

上山草人年譜稿(三)

——谷崎潤一郎との交友を中心に——

(お断り)

本稿は、「甲南女子大学文学部研究紀要」第38号「甲南国文」第49号(ともに平成十四年三月刊)に掲載したものの続篇である。

◆大正二年◆(1913) 三十歳

★田中栄三『明治大正新劇史資料』を引く。《大正二年は新劇の最盛期であった。》雨後の筈の如く簇生する新劇団と新聞の見出しにうたわれた通り、後から後からと新劇団が芽を出して、劇壇に話題を提供した。(中略)この一年間に創立公演をやつて、名乗りを挙げた新劇団だけでも十指を数えた。(中略)枚挙に遑のない程公演が続いた。(中略)新劇ファンは目の廻るような忙がしさで、劇場の廊下は押すな押すな盛況だった。(中略)《出し物も沙翁やゲーテの古典から、シオルツやホフマンスタールの新古典、イブセンもあればストリンドベルヒもあり、ショウ、ワイルド、ゴルキイ、ハウプトマンと、西欧の名作は手当たり次第に上演された。百花撩乱、正に翻譯劇の全盛時代で、タケノコ劇団の汚名も物かは、原作を読むより、見た方が早わかりと、劇団も見物も、西欧文化の吸収に、血道を上げたものだった。だが、このブームはこの年限りで呆気なく終った。年が明けると、筈劇団がバタバタと潰れた。新劇は、大正三年の初頭から下り坂に向った。四年、五年と年毎に下火になり、大正八年にはその極に達した。正直な見物が、まやかし物に懲りて、新劇に背を向けた結果であつた。筈劇団の自業自得であらう。》

この頃には、尾竹紅吉・福美姉妹や神近市子らがかしやに出入りするようになっていた(上山草人『蛇酒』)「紅吉のような新しい女たちは、女優というものに関心を持っていたからであらう。神近市子は、雑誌『近代思想』の関係もある

か？

※草人の「神近市子さんへ」と題する二百字詰原稿用紙三十三枚(以下欠)の書簡?原稿(伊東市の天城診療所所蔵。大正6年5月以降、6月17日以前の執筆と推定)によれば、草人と市子は、一時期、恋愛感情を抱いたらしい。

※高橋梅代さん・三田松五郎さんによれば、神近市子の草人に宛てたラブレターを、三田竹三郎さんが持っている筈だと言う。

※臨川書店版『佐藤春夫全集』の年譜によれば、尾竹紅吉は明治45年、本郷区根津西須賀町にある生田長江の「超人社」に同居。

「趣味」女優号に尾竹紅吉の「山川浦路」、浦路の日記「朝から晩まで」、山崎紫紅「塵頭品話」掲載。尾竹紅吉によれば、『ヘッダ・ガブラー』で、浦路の健全な完全な立派な体形に好印象を受け、間もなく浦路と会い、個人としても大好きになった。浦路は五人の子の母。近頃は草人の焼物の手伝いで大騒ぎらしい。山崎紫紅は、浦路の顔の輪郭と体格の良さを褒めている。

夜、近代思想社の第一回小集がメーゾン鴻の巣で開かれ、伊庭孝が参加(「近代思想」T2/2「大久保より」)。

帝国劇場でローシー作・振付「マリ・ド・クロンピツレ」などが上演される。

※浦路「朝から晩まで」によれば、これに出演したらしい。増井敬二「日本のオペラ」によれば、歌劇部員三十数名も出演した。

夜、草人・杉村俊夫・伊庭孝が森鷗外を訪問。いずれも初対面(「鷗外日記」)。

※伊庭孝の「ファウスト」を初演した人として(「芸術殿」S7/5)によれば、最初、「モンナ・ヴァンナ」を上演するつもりで、草人夫妻と鷗外に翻譯を依頼に行った所、鷗外が文芸委員会からの依頼で翻譯したばかりの「ファウスト」を勧めたので、伊庭が第一部の校正刷りを持って帰って通読し、上演するこ

細江光

とにした。

※森鷗外が『不苦心談』に書いているように、語学を得意とする伊庭は、鷗外の誤訳を指摘した。

草人・伊庭が鷗外を訪ね、『ファウスト』第一部の上演を請う。夜、伊庭が『読売新聞』記者・仲木貞一と再訪(『鷗外日記』)。

※伊庭孝「新劇壇一昔話」によれば、予め脚本を『読売新聞』へ掲載して宣伝してから上演しようという下心だったが、鷗外は「読売に悪口を書かれたことがあるから」と断わった(ただし『モンナ・ヴァンナ』について、とする)【自由劇場が『ボルクマン』を上演した際、上演に先立って鷗外の翻訳を『国民新聞』に連載した先例があったためか?】。

※柴田勝衛『近代劇協会の事ども』によれば、柴田が『ファウスト』を次の演目として推したのは、どうせ不完全な演出で行くなら、こうした大物を手がけてみるのも、過渡期の仕事として無意味でもなからうぐらいの考えだった。

『蛇酒』によれば、松の内を過ぎて、衣川孔雀がかしやを訪ね、草人特製の黄色い白粉を注文して帰る。

『読売新聞』(黒田・鵬心生「オノト雑記」)に、浦路からの年賀状が紹介されている。図案は近頃草人が始めた草人焼に因んだ花瓶と土瓶。

草人が自作の楽焼を持って鷗外を訪ね、『ファウスト』の校正刷りを受け取る(『鷗外日記』)。

『読売新聞』「氷川公園の一日」によれば、この日、「劇と詩」の会の催しが、大宮の氷川公園・萬松楼で行われる。参加者は、上山草人・人見東明・中村春雨・昇曙夢・上司小剣・水谷竹紫・佐藤緑葉・秋田雨雀・田中介二・加能作次郎・荻原朝彦・細川坂月・小杉寛・長山秋郎・八橋有春ら。

『蛇酒』によれば、草人は白粉の注文を受けた四日後、白粉を取りに来た孔雀に女優になるよう勧める。最初、孔雀は乗り気ではなかったが、孔雀の父が二三年前から果鴨の精神病院に居ることを語り、草人も、母が精神病者であることを打ち明けた事から、親密になる。その三四日前に『ファウスト』の校正刷りを受け取っていた。

(日付は『煉獄』による)『蛇酒』によれば、草人は帝劇の支配人【山本久三郎】の私宅を明舟町に訪ね、『ファウスト』上場の許可を得た。そして、品川駅から孔雀と蒲田駅まで行き、羽田穴守稲荷裏の湯の宿で肉体関係を持った。その後、孔雀という雅号を与え、文学・芝居・絵・歌など信ずるものをするように言い、

文芸協会入りを勧めた。孔雀の話では、叔父の一人は陸軍中佐、一人はドイツ大使と言う。

※松本克平『日本新劇史』によれば、草人は楽焼を手土産として山本久三郎から許可を得ることに成功し、得意だった。

富山房から森鷗外訳『ファウスト』第一部刊行。

草人が鷗外を訪ね、『ファウスト』の本読みに入ったこと、帝劇と交渉したことを報告する。鷗外は『ファウスト』上演について、文部省に交渉する(『鷗外日記』)。

※『蛇酒』によれば、孔雀と肉体関係を生じた二日後、草人に過去の経歴を問われて、孔雀は「あなたは十人目」と答えた。草人は一旦は孔雀と別れようと考えたが、「私を救って下さい」と縋り付かれ、女優にすることを決意し、衣川孔雀という女優名を与えた。衣川は草人の母の姓としている【が、事実には反する】。この後、草人は伊庭・杉村に対して、自分の情婦を近代劇協会に入れる許可を求め、簡単に了承された。また、翌日から、かかしやに同居する事になった孔雀と草人は、浦路に二人の関係を打ち明け、許しを得た。孔雀は芝居を余り見ていなかったため、草人は浦路の一幕を見学させるため、帝劇に連れて行った【マリイ・ド・クロンビツレ】であろう。孔雀が近代劇協会に入ると間もなく、孔雀の母たちは、父親の入院している果鴨病院の近くに転居した。この頃、奥村博史が俳優候補生としてかかしやによく出入りしていた。

※衣川孔雀『華やかな舞台を子供の笑顔に代へて』(『婦人公論』T9/4春季特別号)によれば、孔雀が新劇の世界に身を投じたのは大正二年一月。

※草人は、かかしやの二階の八畳で、両側に浦路と孔雀を抱きかかえて、三人一緒に寝たという(谷崎『上山草人のこと』)。

『ファウスト』上演の許可が下りたことを、鷗外が草人夫妻と伊庭に通知(『鷗外日記』)。

伊庭が鷗外を訪問(『鷗外日記』)。

伊庭が鷗外を訪問(『鷗外日記』)。

伊庭が鷗外を訪問。『ファウスト』の歌詞に曲を付ける相談(『鷗外日記』)。

『読売新聞』記事「近代劇協会の試演」によれば、『ファウスト』の稽古事務所として借り受けた新橋際の某所【3・21「読売」記事から加賀屋と推定】は、舞台も見物席も備わり、二百名余が入り得るので、女優達の練習のため、来月早々、第一回試演を催すことに決し、出し物選定中。小野秀雄訳ストリンドベルグ作

・21	「読売新聞」「演芸あさぎ幕」欄に、草人が焼き物を始めて二ヶ月。例の凝り性で、夜を徹す。後世に拙い物を残すのは恥辱だと、失敗作を叩き壊している、と出る。	・19	で、興行日数は、3月27日より五日間に決定した。
・29	草人が鷗外を訪問（『鷗外日記』）。 草人と浦路の間に次男観樹誕生。小松が引き取って育てるが、三歳で病死（三田照子『ハリウッドの怪優』）。		
2	「近代思想」の「消息」欄に3月28、30日、帝劇で近代劇協会が文芸院選定脚本・森鷗外訳『ファウスト』十四場を上演し、伊庭孝が舞台監督を兼ねて登場する、と紹介。「青鞥」には、近代劇協会の『ファウスト』（3日間上演）広告掲載。		
2?	奥村博史が、友人の東京音楽学校助教授・原田潤に誘われて、南房州布良海岸で一緒に暮らして居た所へ、梅の花の散る頃、近代劇協会から原田宛に、「ファウスト」の稽古が始まるから帰れ」という電報があり、奥村も仲間に入れて貰う気になって、立春から大分経った頃、原田と一緒に草人夫妻を訪ねた。浦路は「既に紅吉から奥村の噂は聞いている」と言った。朗読のテストを受け、烏森の芸者屋玉や【加賀屋の仮名であろう】の三階で、稽古が始まった。そことは別に、帝劇でも稽古があったが、ローシーの稽古は猛烈だった（奥村博史「めぐりあい」・平塚らいてう自伝『原始、女性』は太陽であった）。	・23	「東京朝日新聞」に「女学生（一）明暗の二方面」として、近代劇協会の女優の出身校一覧が出ている。山川浦路＝学習院女学部、衣川孔雀＝実践女学校、三原不二＝甲府女学校、波川千早＝三島高等女学校・東京女子音楽体操学校、玉村歌路＝築地立教高等女学校。一条汐路は有楽座の女優の項に挙がっており、久満女学校となっている。
・2	帝国劇場で、「夜の森」と題して、ファンパーディングの歌劇「ヘンゼルとグレーテル」の一部を松居松葉訳・脚色で上演。浦路が母親役で出演。「時事新報」2月5日に「浦路の母親はもう一息」と出る（増井敬二『日本のオペラ』）。	3	「近代思想」に草人の詩「昼の街路にて」「夜の街頭にて」「活字」「目へ」掲載。同じ号の「大久保より」に、伊庭は本誌に寄稿するようになってから、刑事の来訪がうるさくなったので、当分見合わせる。その代わりというのでもあるまいが、草人が新たに入ってきた、と報告している。
・6	「読売新聞」記事「近代劇協会と「とりで」社」によれば、『ファウスト』では、とりで社の村田実が主に道具裏の指図をする。その前に開催する試演では、村田が管理者となり、「強者」は草人、イブセン「建築師」は伊庭が、もう一つは村田が舞台監督をする。『ファウスト』以後の興行には、旧とりで社俳優男女十名いずれも出場する【とりで社との協力・合同の試みは、結局、挫折した。また、試演会も実現できなかったらしい】。	3	「歌舞伎」に伊庭孝「ファウスト」上演に就ての困難（2月15日夜）掲載。
・7	「読売新聞」記事「ファウスト」の欧文番付・筋書等を訂正（『鷗外日記』）。		
・8	伊庭が鷗外を訪問。		
・15	「読売新聞」記事「ファウストは五日間」によれば、既に座席の申込みが多いの		※時期未詳。尾竹紅吉が伊藤野枝を連れて、日頃親しく出入りしている「かかしや」を訪ねた際、近代劇協会が帝劇で3月27日から31日まで上演する「ファウスト」に奥村博が出演することを耳にし、平塚らいてうに伝えた。前年夏、茅ヶ崎で知り合ったものの、その後会う機会を得られなかったらいうは、この知らせ

に胸をときめかせた。らいてうは近代劇協会から招待を受け、27日に「ファウスト」を観た(平塚らいてう自伝『原始、女性太陽であった』)。

伊庭が鷗外を訪問(『鷗外日記』)。

伊庭が鷗外を訪問。招待客の人選について(『鷗外日記』)。

伊庭が鷗外を訪問(『鷗外日記』)。

「読売新聞」の記事「近代劇の女優」によれば、衣川孔雀の他、今回、玉村歌路(20)・若山椿(17)・波川千早(20)らが新たに出演する。中でも歌路は立教女学校出身、美貌・美声で将来が囑望される。独逸大使ベックが28日に書記官ら官員を引き連れ、観劇する由。続く記事「ファウスト」の稽古によれば、昨今火の出るような稽古。新橋加賀屋で正午まで稽古。帝劇ではローシーが稽古を付けている。ローシーは、この劇はメロドラマに近く演じるよう、各場毎にその場の感情を表す音楽を蔭で演奏するよう注意し、草人も、伊庭と相談の上でそうしようと答えた。帝劇未曾有の背景を十四場新たに作るというので大道具は大仕事。既に29・30両日は全部売り切れ、他の日も良い場所は予約済み。

富山房から森鷗外訳『ファウスト』第二部刊行。

「読売新聞」に「ファウストの舞台面」と題して、ドイツのマルテルスタイヒが演出した際の写真掲載。

「東京朝日新聞」(一)富山房「ファウスト」広告に、帝劇での上演広告も入れている。

「読売新聞」「ファウストの舞台稽古」。2幕目までだが、かなり詳しく説明している。

伊庭、訪問。「ファウスト」筋書及び解説を贈る。鷗外は茉莉を連れて帝国劇場に行き、「ファウスト」を観る(『鷗外日記』)。

午後5時から帝国劇場で近代劇協会第二回興行。森鷗外訳『ファウスト』上演。特等2円、1等1円50銭、2等1円、3等70銭、4等25銭(『東京朝日新聞』3・27広告・「帝劇の五十年」)。

※「ファウスト」の上演内容については、「蛇酒」に具体的な説明がある。五日間すべて満員だった。

※主な配役は、草人のファウスト、伊庭のメフィストフェレス、浦路のマルテと魔女、孔雀のグレートヘン、奥村博のジイベル、原田潤のワグネル・ピランデル。協会顧問に森鷗外・坪内逍遙の名を掲げた(大笹古雄『日本現代演劇史』田中栄三『明治大正新劇史資料』)。

※音楽はグノオのオペラ「マルガレーテ(ファウスト)」を竹内平吉が指揮、劇中小曲は清水金太郎作曲、原田・清水ら独唱(『早稲田文学』T2/3)。

※背景は石井柏亭、岡本二平、田中良、近藤浩一路、長谷川昇らが担当、舞台照明とともに優れた効果を示した(秋庭太郎『日本新劇史』)【田中栄三『明治大正新劇史資料』所載の写真で見ても、背景・衣裳は非凡】。

※「読売新聞」S6・7・22「十五年ぶりで帝劇へ出た草人(二)」によれば、帝劇の電気係の秀(文逸)氏が、「ファウスト」で初めて照明に色電気を使った。

※「新劇三十五年史を語る」で草人は秀文逸に言及(秀文逸は芥川龍之介の自殺の因となった秀しげ子の夫である)。

※「新劇三十五年史を語る」で草人は、近藤浩一路が描いた当時の絵巻物を持っていると発言。

※舞台監督の伊庭孝には音楽への関心と素養があったため、グノオの曲を使ったり、バレエ・シーンの振り付けを帝劇の舞踊教師ローシーに依頼し、ローシー振付の劇中ダンスに沢美千代(モリノ)・中山歌子ら帝劇歌劇部一期生を出演させるなど、野心的だった(増井敬二『日本のオペラ』)。

※「歌舞伎」T2/5「上場されたる『ファウスト』」で、服部嘉香・人見東明・中村春雨らが衣川孔雀を絶賛。

※興行的には大成功(秋庭太郎『日本新劇史』)。

※柴田勝衛「近代劇協会の事ども」によれば、約一万円の収益を得た。

※寺崎広載「上山草人氏のこと」(『映画評論』T15/4)では、東北なまりは少し気になったが、なかなかいい演技で、殊に老博士としての方が良かったとする。

※田中栄三「新劇その昔」によれば、草人のファウストは仙台訛りのズーゾー辯で、何を言っているのか少しも判らず、まるで動物園の白熊が檻の中でほえ廻っているようだとの評だった。草人は俳優としてより興行師として認められ、川上音二郎の二代目だというレッテルを貼られた【鮫人】に、梧桐寛治が二世川上音二郎と言われたとして使用】。

※草人は東北訛りで、「あらずもがなの神学」が「あらずもがなのスんがく」に聞えた、と辰野隆が可笑しがった。谷崎は、文芸協会や自由劇場の芝居には青春の血を湧かしたが、赤毛の芝居は好きでないと、辰野の悪口とて、草人のものは殆ど見なかった。(谷崎「上山草人のこと」)。

※谷崎は、『饒舌録』(S2/11「改造」)では、初期の新劇俳優には、色魔や、放蕩に身を持ち崩したり、文士になり損ねたりした、学生の中の食い詰め者・不良青年が多く、見る気になれなかった、新派にもそういう臭味があった、と述べている。	30	「読売新聞」五重塔「帝劇『ファウスト』合評(一)」は、背景は概ね上出来。俳優としては伊庭孝と衣川孔雀には大いに未来がある。上山夫妻はむしろ興行で成功する人ではないか、とする。
※衣川孔雀は初舞台ながら好評で、森鷗外にも激賞された(田中栄三『新劇その昔』)。	31	伊庭が鷗外を訪問(『鷗外日記』)。
※「読売新聞」S8・4・30「時代の人気者解剖座談会(13)」によれば、久保田万太郎と三上於菟吉は、『ファウスト』を見た。久保田万太郎によれば、新劇の切符にプレミアムがついたのはこの時だけ。	4	「近代思想」に草人の詩「金を懐に入れて」掲載。同じ号に荒畑寒村の「ファウスト論(上)」も掲載。同号「売文社より」によれば、近代劇協会の「ファウスト」を、近代思想社と売文社でも総見に出掛ける予定。また、先日は玉村歌路が売文社に遊びに来た。
※伊庭孝「春立つ」(『雨安居荘雑筆』)によれば、兼常清佐は京都から駆け付け、孔雀の大ファンになった。	4	「黒耀」に伊庭孝の小説『強者と弱者と』掲載。「近代思想」四月号「三月の小説」で紹介。
※奥村博史「めぐりあい」によれば、平塚らいてうの他、山村暮鳥も観に来て、楽屋を訪ね、後で奥村に献じた詩を葉書に書いて送って来たが、気に入らなかったで捨ててしまった。奥村は出演料として七〇円を貰った。『山村暮鳥全集』年譜でこの年4月1日上京とするのは誤りか？	1	「読売新聞」土岐哀果「帝劇『ファウスト』合評(二)」。森鷗外の翻訳が完全な現代語訳であることと、伊庭のメフィストが悪魔らしからぬことが、良い意味で偶像破壊になっていたとする。
※小山内薫は、外遊中で『ファウスト』は見なかったが、大した準備もなしに『羊頭狗肉の』《詐欺に等しい》『ファウスト』を上演したことを、ゲーテと演劇に対する《冒瀆》であるとして、『新劇復興の為に』(「新演芸」T6/1)で厳しく批判した。	2	草人と伊庭がお礼のために訪問するが、鷗外は不在(『鷗外日記』)。
※森鷗外「訳本ファウストに就いて」によれば、帝劇が5日間連続で売切になったのは初めて。しかし文壇では、『ファウスト』を汚瀆したという声が多い。	2	「読売新聞」仲木貞一「帝劇『ファウスト』合評(三)」。音楽をすべての場で用いるべきだった。草人の聞き苦しい土音(訛り)は直せないか。孔雀は将来が期待できる、とする。
※矢口達の「戦ひか遊びか」(「新時代」T8/2)によれば、恐らくこの後、間もなく、衣川孔雀と矢口達の恋愛的文通を知った草人が、二人の間を割いた。	3	草人・浦路・伊庭・孔雀が鷗外を訪問(『鷗外日記』)。
「東京朝日新聞」「ファウストの初日」は、逍遙・鷗外が見に来ていた事を報じ、孔雀を場所によっては須磨子以上と褒める。「読売新聞」「ファウスト」第一夜」は、帝劇開場以来未曾有という壮麗な道具と孔雀のグレーチエンが観客を魅了し、他の出演者も大成功と褒める。	3	草人が鷗外を帝国ホテルに招いて、会食(『鷗外日記』)。
「東京朝日新聞」「ファウスト評」は、芸においては文芸協会のぐっと下とする。	3	※次回作として「マクベス」を上演すること、鷗外が翻訳することが決まった(大笹吉雄「日本現代演劇史」)。
「都新聞」で伊原青々園は、草人は態度も立派、音声も相当にあり、年老けた精悍の気が充ちて居る所がよかったが、言葉がハッキリ聞こえぬのと新派の高田に似た格好が疵であった、と評した。	3	※高橋梅代さん所蔵新聞切り抜き記事「沙翁劇翻訳の蔭に知られぬ『友情劇』逍遙博士四年祭に話題の故両文豪」によれば、逍遙の七五調の翻訳を嫌って、鷗外に現代語訳を依頼した。
	※「読売新聞」T2・5・3記事「両博士の握手」によれば、鷗外は「マクベ	

・16	「読売新聞」記事「帝劇青年派の活動」によれば、近代劇協会の「ファウスト」	
・13	添える由。近代劇協会は「ファウスト」を持ちて大阪へ赴くやも知れず。	
・9	近代劇協会の一行、大阪に至る。十日間興行することとなりぬと云ふ（『鷗外日記』）。	
・7	伊庭孝が「近代劇の研究」を講義。	
・6	「読売新聞」記事「日本劇の試演」によれば、近代劇協会第3回公演の出し物はシェークスピアの悲劇・イプセンの史劇・メーテルリンクの象徴劇のいずれかになる。かねて計画中の月々の試演会は、20日頃に、楠山正雄の『油地獄』と、秋田雨雀の『埋れた春』の一編と、木下李太郎の気分劇、N氏の喜劇などになるべく、目下熱心に練習中。この内、『油地獄』はとりて社の村田実が主として力を添える由。近代劇協会は「ファウスト」を持ちて大阪へ赴くやも知れず。	
・5?	近代劇協会の一行、大阪に至る。十日間興行することとなりぬと云ふ（『鷗外日記』）。	
・4	「蛇酒」によれば、近代劇協会では、鎌倉・江の島方面に出掛け、祝賀・慰労会を催した。	
・4	鷗外はシェークスピアを訳せんがために市に閑す（『鷗外日記』）。	
・5	「読売新聞」小宮豊隆「近代劇協会の「ファウスト」」。森鷗外の翻訳も近代劇協会の舞台も、ゲーテを冒瀆するものだった。草人のせりふには何らの表情もなかった。伊庭のメフィストは余りに軽佻浮薄。孔雀は相応の出来。今の見物は、西洋の名高い物とさえ言えば、何でも見ようとする。それを利用したのは巧みだが、芸術的価値とは無関係だ。	
・6	鷗外は「マクベス」翻訳に着手する（『鷗外日記』）。	
・7	※「青鞥」3月号によれば、この日から青鞥社研究会開催。講師の一人として、伊庭孝が「近代劇の研究」を講義。	
・9	「読売新聞」記事「日本劇の試演」によれば、近代劇協会第3回公演の出し物はシェークスピアの悲劇・イプセンの史劇・メーテルリンクの象徴劇のいずれかになる。かねて計画中の月々の試演会は、20日頃に、楠山正雄の『油地獄』と、秋田雨雀の『埋れた春』の一編と、木下李太郎の気分劇、N氏の喜劇などになるべく、目下熱心に練習中。この内、『油地獄』はとりて社の村田実が主として力を添える由。近代劇協会は「ファウスト」を持ちて大阪へ赴くやも知れず。	
・13	近代劇協会の一行、大阪に至る。十日間興行することとなりぬと云ふ（『鷗外日記』）。	
・16	「読売新聞」記事「帝劇青年派の活動」によれば、近代劇協会の「ファウスト」	

20	草人・伊庭、大阪より帰り、鷗外を訪問（『鷗外日記』）。 『読売新聞』『日曜附録』高安月郊「イブセンの建築師」によれば、「建築師」は、追って近代劇協会によって演ぜられる。	25	逍遙が『マクベス』の序を作り、草人に託して鷗外に贈り、また鷗外の訳本に附箋を付して意見を記す（『鷗外日記』）。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、逍遙はじかに朱筆を入れるのは失礼だというので、いちいち丁寧に張り紙をして意見を述べた。 逍遙の説によりて、『マクベス』を修正する（『鷗外日記』）。 ※この日付けの、鷗外の逍遙宛札状が遺されている。 帝国劇場でモーツァルトの歌劇「魔笛」の小林愛雄訳による抜粋上演。浦路は三人の侍女の一人として出演（増井敬二『日本のオペラ』）。 メーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭・草人参加（『近代思想』T2／7暮村隠士『近代思想社小集』）。	29	伊庭が『マクベス』の序を作り、草人に託して鷗外に贈り、また鷗外の訳本に附箋を付して意見を記す（『鷗外日記』）。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、逍遙はじかに朱筆を入れるのは失礼だというので、いちいち丁寧に張り紙をして意見を述べた。 逍遙の説によりて、『マクベス』を修正する（『鷗外日記』）。 ※この日付けの、鷗外の逍遙宛札状が遺されている。 帝国劇場でモーツァルトの歌劇「魔笛」の小林愛雄訳による抜粋上演。浦路は三人の侍女の一人として出演（増井敬二『日本のオペラ』）。 メーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭・草人参加（『近代思想』T2／7暮村隠士『近代思想社小集』）。	30	伊庭が『マクベス』の序を作り、草人に託して鷗外に贈り、また鷗外の訳本に附箋を付して意見を記す（『鷗外日記』）。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、逍遙はじかに朱筆を入れるのは失礼だというので、いちいち丁寧に張り紙をして意見を述べた。 逍遙の説によりて、『マクベス』を修正する（『鷗外日記』）。 ※この日付けの、鷗外の逍遙宛札状が遺されている。 帝国劇場でモーツァルトの歌劇「魔笛」の小林愛雄訳による抜粋上演。浦路は三人の侍女の一人として出演（増井敬二『日本のオペラ』）。 メーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭・草人参加（『近代思想』T2／7暮村隠士『近代思想社小集』）。	6・1	伊庭が『マクベス』の序を作り、草人に託して鷗外に贈り、また鷗外の訳本に附箋を付して意見を記す（『鷗外日記』）。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、逍遙はじかに朱筆を入れるのは失礼だというので、いちいち丁寧に張り紙をして意見を述べた。 逍遙の説によりて、『マクベス』を修正する（『鷗外日記』）。 ※この日付けの、鷗外の逍遙宛札状が遺されている。 帝国劇場でモーツァルトの歌劇「魔笛」の小林愛雄訳による抜粋上演。浦路は三人の侍女の一人として出演（増井敬二『日本のオペラ』）。 メーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭・草人参加（『近代思想』T2／7暮村隠士『近代思想社小集』）。	25	伊庭が『マクベス』の序を作り、草人に託して鷗外に贈り、また鷗外の訳本に附箋を付して意見を記す（『鷗外日記』）。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、逍遙はじかに朱筆を入れるのは失礼だというので、いちいち丁寧に張り紙をして意見を述べた。 逍遙の説によりて、『マクベス』を修正する（『鷗外日記』）。 ※この日付けの、鷗外の逍遙宛札状が遺されている。 帝国劇場でモーツァルトの歌劇「魔笛」の小林愛雄訳による抜粋上演。浦路は三人の侍女の一人として出演（増井敬二『日本のオペラ』）。 メーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭・草人参加（『近代思想』T2／7暮村隠士『近代思想社小集』）。	8	伊庭が『マクベス』の序を作り、草人に託して鷗外に贈り、また鷗外の訳本に附箋を付して意見を記す（『鷗外日記』）。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、逍遙はじかに朱筆を入れるのは失礼だというので、いちいち丁寧に張り紙をして意見を述べた。 逍遙の説によりて、『マクベス』を修正する（『鷗外日記』）。 ※この日付けの、鷗外の逍遙宛札状が遺されている。 帝国劇場でモーツァルトの歌劇「魔笛」の小林愛雄訳による抜粋上演。浦路は三人の侍女の一人として出演（増井敬二『日本のオペラ』）。 メーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭・草人参加（『近代思想』T2／7暮村隠士『近代思想社小集』）。	12	伊庭が『マクベス』の序を作り、草人に託して鷗外に贈り、また鷗外の訳本に附箋を付して意見を記す（『鷗外日記』）。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、逍遙はじかに朱筆を入れるのは失礼だというので、いちいち丁寧に張り紙をして意見を述べた。 逍遙の説によりて、『マクベス』を修正する（『鷗外日記』）。 ※この日付けの、鷗外の逍遙宛札状が遺されている。 帝国劇場でモーツァルトの歌劇「魔笛」の小林愛雄訳による抜粋上演。浦路は三人の侍女の一人として出演（増井敬二『日本のオペラ』）。 メーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭・草人参加（『近代思想』T2／7暮村隠士『近代思想社小集』）。	16	伊庭が『マクベス』の序を作り、草人に託して鷗外に贈り、また鷗外の訳本に附箋を付して意見を記す（『鷗外日記』）。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、逍遙はじかに朱筆を入れるのは失礼だというので、いちいち丁寧に張り紙をして意見を述べた。 逍遙の説によりて、『マクベス』を修正する（『鷗外日記』）。 ※この日付けの、鷗外の逍遙宛札状が遺されている。 帝国劇場でモーツァルトの歌劇「魔笛」の小林愛雄訳による抜粋上演。浦路は三人の侍女の一人として出演（増井敬二『日本のオペラ』）。 メーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭・草人参加（『近代思想』T2／7暮村隠士『近代思想社小集』）。	21	伊庭が『マクベス』の序を作り、草人に託して鷗外に贈り、また鷗外の訳本に附箋を付して意見を記す（『鷗外日記』）。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、逍遙はじかに朱筆を入れるのは失礼だというので、いちいち丁寧に張り紙をして意見を述べた。 逍遙の説によりて、『マクベス』を修正する（『鷗外日記』）。 ※この日付けの、鷗外の逍遙宛札状が遺されている。 帝国劇場でモーツァルトの歌劇「魔笛」の小林愛雄訳による抜粋上演。浦路は三人の侍女の一人として出演（増井敬二『日本のオペラ』）。 メーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭・草人参加（『近代思想』T2／7暮村隠士『近代思想社小集』）。	26	鷗外は、『マクベス』の校正を始める（『鷗外日記』）。 帝国劇場で文芸協会が『ジュリアス・シーザー』を上演。これ以前、五月に松井須磨子が諭旨退会、六月に島村抱月が辞職しており、これを最後として、文芸協会は解散された（田中栄三『明治大正新劇史資料』など）。 ※草人の『劇壇秘話』によれば、文芸協会から有望な人を近代劇協会に貰いたいと思ひ、この公演も観たらしい【この時、シーザーを演じた加藤精一に、九月の『マクベス』でマクベスを任せたのも、その結果であろう。しかし、加藤は十一月から舞台協会の中心俳優となった】。 伊庭が鷗外を訪問し、シヨウの脚本2種を借りる（『鷗外日記』）【7・16「読売」記事にあるように、近代劇協会で、シヨウの『武器と人』などを上演する計画があったためであろう】。 ★時期ははっきりしないが、この年前半のある日、田中栄三が『近代劇精通』（初山書店T2／12）刊行の為、鷗外を陸軍医務局に質問に訪ねた際、鷗外は「君、（衣川）孔雀はこれになったそうだね」とお腹が大きくなった格好をしながらか愉快そうに笑った（田中栄三『新劇その昔』）。 【中央公論】臨時増刊婦人問題号に、山川浦路子「私の女優生活と其周囲」掲載。帝劇女優にレベルの低い者が多いことを指摘している。 鷗外は、『マクベス』の校正を終える（『鷗外日記』）。 伊庭、鷗外を訪問（『鷗外日記』）。 ※「読売新聞」T2・7・11「近代劇協会の頓挫」によれば、この日、8月に有楽座で上演する「チョコレット兵」【シヨウ『武器と人』の稽古を終えた後、近頃某新聞紙上に掲載されつつある同協会の記事に関して草人と伊庭が口論したことが、伊庭が退会した直接の原因】。 伊庭、近代劇協会を脱す。鷗外を訪問（『鷗外日記』）。 ※「蛇酒」によれば、或る週刊新聞が、孔雀と草人の関係を攻撃する記事を毎号掲げ始めた。この記事の種は伊庭の友人の雑誌記者が提供している事が分かり、伊庭に記事差し止めを依頼したが、無視された事から、遂に二人は衝突し、伊庭は近代劇協会を脱会。続いて柴田・杉村も手を引いた。この頃、孔雀の妊娠が明らかになった。 ※松本克平『日本新劇史』によれば、玉村歌路が孔雀にスターの地位を奪われた憤懣から、遠藤無水に草人と孔雀の関係を話し、無水が草人を憎んで「魁新聞」という赤新聞に売り込んだ結果、「現代の腐肉団近代劇協会」という記事が一週
----	---	----	---	----	---	----	---	-----	---	----	---	---	---	----	---	----	---	----	---	----	---

11	<p>間程連載された『近代思想』T1/12以降の「寄贈雑誌」欄に「東京魁新聞」とある。この新聞を見ることは、今の所、出来ていない。</p> <p>※柴田勝衛『近代劇協会の事ども』によれば、近代劇協会創立当初に柴田が作った「協会幹部は女優と関係せぬこと」という不文律を草人が破ったために、柴田が協会の解散を宣言した。</p> <p>※田中栄三『新劇その昔』によれば、この頃、池内洋六が草人に「君は浦路と孔雀をどんな風に扱っている」と訊くと、草人は「一晩置きだ」と答えたと言う。</p> <p>「時事新報」で、伊庭孝が近代劇協会を退会したことが報じられる。</p> <p>※「読売新聞」15日記事「近代劇協会遂に解散」によれば、この日午前、森鷗外は草人と呼んで、伊庭の退会問題について、その意見を聞いた。</p>	12	<p>「読売新聞」に記事「鷗外博士の調停」掲載。</p>	12	<p>麹町隼町に移転したメーゾン鴻の巣での近代思想社小集に伊庭孝が参加。伊庭の近代劇協会脱退が話題になった(『近代思想』T2/7「大久保より」)。</p> <p>※伊庭孝はこの後も大正三年三月まで「近代思想」への寄稿を続けるが、草人は寄稿しなくなる。</p>	13	<p>「読売新聞」「演芸あさぎ幕」によれば、魁新聞の攻撃について、草人が伊庭に調停を頼んだが、伊庭が請合いながら交渉しなかったため、両者は決裂した。</p> <p>伊庭・草人、相次いで鷗外を訪問。二人遂に分裂することに決す(『鷗外日記』)。</p>	13	<p>※「読売新聞」15日記事「近代劇協会遂に解散」によれば、鷗外はこの日、午後2時から伊庭を自宅に招いて詳しく話を聞き、伊庭と草人の演劇観が一致しがたいたことが明らかになったため、同夜、上山夫妻を招いてその旨を告げた。</p> <p>※「煉獄」によれば、伊庭は鷗外が仲裁に立ってくれたのも突っぱねた。</p>	14	<p>七時から上山・伊庭・杉村・柴田が烏森湖月に会して、近代劇協会の解散式を行った(『読売新聞』15日記事「近代劇協会遂に解散」)。</p>	15	<p>※伊庭・杉村は「新劇社」を旗揚げし、玉村歌路も参加したが、大正2年10月、3年1月の2度の有楽座公演に失敗し、続いて旗揚げした「PM公演社」も大正3年11月の旗揚げ公演のみで潰れ、伊庭は近代劇協会に復帰した(田中栄三『明治大正新劇史資料』など)。</p>	16	<p>「読売新聞」に記事「近代劇協会遂に解散」掲載。</p> <p>「読売新聞」記事「近代劇協会の今後」によれば、来月早々、有楽座で開演の筈だったショオの「武器と人」は取消しとなったが、『マクベス』は、他に近代物</p>	15	<p>一幕と共に、9月26日から5日間、帝劇で開演する。</p> <p>「蛇酒」によれば、浦路が口内炎にかかり、たまたま草人がカフェーで出会った同郷の友人で歯科医師の寺木定芳に診察を依頼した。浦路の口内炎は孔雀にも飛び火し、孔雀も寺木の診察を受けるようになった。そして、寺木との間に肉肉関係を生じた。それを知った草人は、孔雀の頸を絞め、危うく殺しそうになった。二人は乱れた心を鎮めるため、千葉県勝浦に三四日遊ぶことにしたが、その前日の新聞に、松井須磨子と島村抱月が長良川で鵜飼見物に出掛けたと報道された。勝浦から戻った頃、浦路はまだ帝劇に出て居た。</p> <p>※衣川孔雀は『由井ヶ浜より』(『女の世界』T7/1)で、5年前、まだ女優に成るや成らずの頃、後に夫となる寺木定芳と結婚寸前まで行ったが、芸術の道を選んだと述べている。</p>	23	<p>警醒社から森鷗外訳『マクベス』刊行。坪内逍遙が『序』末尾で近代劇協会の公演に触れ、『世の好劇家は、定めし深い興味を以て、此秋の演出を期待することであらう。』と書いた【これは提灯持ちを買って出た形である。公演の前に台本を刊行するのは、鷗外への御礼を兼ねた巧みな宣伝戦略と言える】。</p> <p>「都新聞」に、須磨子と抱月が長良川で鵜飼見物に出掛けたと報道されたのは人違いだった、と出る。</p>	24	<p>「読売新聞」記事「マクベス」劇の陣形」によれば、伊庭孝の脱会後、近代劇協会では旧文芸協会の加藤精一ほか4名を招聘し、俳優学校卒業生の宇田省三・神林末蔵・日疋重亮ら4、5名と、旧無形劇場主幹・近藤重弥が参加。とりで社に背景一切のデザインを任せる他、同試演部の長尾豊・木村・村田実らも参加し、30余名の大団体となる。</p>	4	<p>草人、鷗外を訪問。『マクベス』の配役決定(『鷗外日記』)。</p>	5	<p>「読売新聞」警醒社書店の森鷗外訳『マクベス』広告で、近代劇協会の公演もタイアップ広告。</p>	7	<p>「よみうり抄」に、15日「白草」創刊。正富汪洋・上山草人ほか、と出る【この雑誌を見ることは、今の所、出来ていない】。</p>	13	<p>草人・伊豆四郎、鷗外を訪問。『マクベス』興行のことを話す(『鷗外日記』)。</p>	2	<p>※伊豆四郎は、宇野四郎(1893-1931)の筆名。この頃は、舞台装置家を志し、とりで社の同人だった。のち演出家として活躍した。</p>	15	<p>「読売新聞」「演芸」欄によれば、多人数の俳優を要するため至難とされる『マクベス』も、交渉の結果、帝劇歌劇部・管弦楽部の出演を得、同部男女優二十余名</p>
----	--	----	------------------------------	----	---	----	--	----	---	----	--	----	--	----	--	----	---	----	--	----	---	---	--------------------------------------	---	--	---	---	----	--	---	---	----	--

・ 19	草人、鷗外を訪問。「マクベス」準備のことを話す（『鷗外日記』）。
・ 20	「読売新聞」記事「新劇社の設立」によれば、伊庭孝と一緒に近代劇協회를辞した前理事杉村敏夫・前出納主任安岡克実は、新劇社興行部を創設。10月16日から有楽座でエデキント「出発前半時間」・シヨウ「チョコレエト兵隊」「武器と人」を上演。前近代劇協会員の浅井松彦・奥村博・玉村歌路・波川千早らが参加する。
・ 22	「読売新聞」記事「帝劇のマクベス」によれば、「マクベス」は、シヨウの「武器と人」の予定だったのを、伊庭孝の脱会のため、変更したもの。近代劇協会では、とりで社の村田実「マクベス」の舞台面の設計を依頼。村田はクレীগ式の象徴懸った設計図を作り、背景画家たちも賛成し、山本支配人からも許可を得たが、ローシーは認めず、英国芝居式の大道具が設計されることになった。村田の設計図は、19日から有楽座で開かれている芸術座の劇場美術展覧会に出品陳列されている。
・ 23	「読売新聞」警醒社書店の森鷗外訳「マクベス」広告で、近代劇協会の公演もタイアップ広告。
・ 25	「マクベス」初日の前日に既に三日目までの切符が売り切れた。そこで草人は、「今日いよいよ開演」という号外を新聞配達に配らせ、その裏に「三日間売切」と刷り込んだ。その鮮やかな宣伝振りに日正らは感心した（S2・2・12「サンデー毎日」日疋重吉「興行的手腕」）。
・ 26	「読売新聞」に記事「マクベスの稽古」。24日から毎日朝から三時過ぎまでやって居る。
・ 26	帝国劇場で近代劇協会第三回興行森鷗外訳「マクベス」上演。配役は臨時参加の加藤精一がマクベス、浦路がマクベス夫人、孔雀がマクダフ夫人、石井漢（石井林郎）が第三の魔女とメンテイスなど。ローシーが技芸指導。秀文逸が電気指揮（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。
・ 30	※『蛇酒』によれば、草人は、文芸協会の解散を余儀なくされた坪内逍遙に、この「マクベス」上演をデディケートする事で、一片の同情の表明とした。登場俳優は百人を超え、演出はローシーの案でお伽劇風に賑やかに面白可笑しく演じられた。九分の入りで、財政上も充分成功した。
	※田中栄三『新劇その昔』によれば、登場人物が多いので、帝劇歌劇部・文芸協会系・俳優学校系から十人以上を臨時に集めた。草人一流の粗雑なものだったの
・ 27	「東京朝日新聞」（七）「文芸」欄によれば、草人の近代劇協회를森鷗外・千葉掬香・柴田柴庵・矢口達・加藤朝鳥らが助け、11月より月刊誌「近代」を出す。演劇だけではなく、広く芸術の鼓吹・報道・評論をする。
・ 28	「東京朝日新聞」（九）竹の屋主人「近代劇協会の「マクベス」は、浦路のマクベス夫人の夢遊病のくだりを「大出来」と激賞。
・ 28	「読売新聞」記事「お伽式の「マクベス」は、草人を第二の川音【川上音二郎】として、その興行上の才能を称賛。しかし「マクベス」は面白くない、旧文芸協会の俳優だけが光っていた、とする。同紙に仲田勝之助抄訳メーテルリンク「マクベス論」掲載。
・ 30	「読売新聞」「演芸あざき幕」は、余りに卑近な現代語を用いるので権威が認められぬとし、加藤・宇田らを酷評。浦路は（背が高すぎるため）相手に合わせようと姿勢が悪くなり、あれでは西洋人にならぬ、と指摘。
10	「生活と芸術」に伊庭孝が「鷗外先生を論ず」掲載。
・ 1	帝国劇場では、公衆劇団の旗揚げ公演として、ベアリング作「マクベスの稽古」などを上演（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。
・ 20	Japan Advertiser が MacBeth 評を載せて鷗外に寄贈（『鷗外日記』）。
・ 2	草人、鷗外を訪問（『鷗外日記』）。
・ 3	※田中栄三『新劇その昔』によれば、「マクベス」が済むと、草人は鷗外に「入
	で、評判にはならなかった。
	※大金を投じてフランネルに銀染めで軍卒の鎧を作ったが、新聞紙で作ったというデマが広がった（草人・加藤精一ほか「新劇三十五年史を語る」『テアトロ』S14／6＋7合併号）。
	※「歌舞伎」一六一号に伊原青々園の評あり。
	※小山内薫は『自由劇場の悲観 五度新劇復興の為に』（T6／7「新演芸」）で、ローシーの「マクベス」演出を《詐欺》と決め付け、西洋人に全責任を委ねることも、厳しく批判した。
	※高田保「青春スクラップ」によれば、高田の友人が近代劇協会の女優と恋仲になった関係で、高田は近代劇協会の「マクベス」の稽古場を覗きに行き、その切符二十枚ほどを捌くように依頼され、ひどく光栄に思っ、苦勞して売り捌いた。
	※岩野泡鳴『菓鴨日記』によれば、26日に観た。しかし、そもそも原作が駄目と感想を記す。

4	<p>形の家』の翻訳を依頼した。</p> <p>草人と浦路、加藤という雑誌記者を伴い、鷗外を訪問（『鷗外日記』）。</p> <p>※『蛇酒』によれば、ぶらぶらしているよりは人目を避けて地方興行に出た方がスキャンダルを鎮めるのに好都合であり、かつ地方に新劇の客層を新たに開拓し、座員の練習も兼ねようという考えで、草人は単身、京阪から岡山へと先乗りした。帰京すると、草人は孔雀に、一人で外出しないこと、変わらない愛の証として血書の誓紙を毎月一枚ずつ認めること、寺木と会った頃に身に着けていた一切の物を捨てること、などを要求し、孔雀は従順に従った。</p>
5	<p>『読売新聞』記事「近代劇協会の「マクベス」合評」。すべて悪評。小宮豊隆は「ローシーを軽蔑できるようにならなければいけない」、仲田勝之助は「活動写真程度のも。ただ表面的に筋を運ぶのに忙しい」、S.T.Gは「大入りは世界的古典に対する崇拜・好奇心のせい」、谷の人は「ファウスト」や「マクベス」のよう古い物をやるのは矛盾。</p>
16	<p>『読売新聞』記事「新劇界のさまじく」によれば、近代劇協会は、11月中旬、有楽座で『人形の家』を上演する【実際にはT2/11大阪近松座で上演後、T3/4有楽座となる】が、島村抱月が訳した台本の貸与を拒否されたため、森鷗外に委嘱して独逸語訳から重訳することになった【『読売新聞』T4・3・11草人「武器の奪ひ合ひ」（上）も同じ】。配役は既に内定【詳細略。リンデ夫人のみ杉山綾子から浦路に変更される】。他にダヌンチオの『秋夕夢』。第三回興行にはイブセンの『海の夫人』を上演する。</p> <p>※草人「武器の奪ひ合ひ」（上）によれば、イブセン作『海の夫人』については、芸術座が3ヶ月後に上演を予定しているので【T3・1・17、31上演】、近代劇協会での上演は取り止めるようにという申し入れがあり、承諾した【後の「復活」をめぐる争いの前哨戦】。</p>
16	<p>鷗外、『人形の家』を訳し終わり、草人に渡す。五日に起稿して十二日目なり（『鷗外日記』）。</p>
11	<p>『近代思想』に『草人の近代劇協会が来年一月より雑誌『近代』を出し、劇を中心として広く芸術界に於ける新氣運の興作に努むべく、先ずその零号として十一月中旬にノラ及び秋夕夢に関する研究号を発行する、編輯は加藤朝鳥主宰するよし』と出る。</p>
11	<p>「スバル」に森鷗外「ノラ解題」掲載。</p>
9	<p>『読売新聞』記事「多忙なる新劇壇」によれば、東京で『ノラ』を上演するとい</p>
10	<p>う噂のあった近代劇協会は、『ノラ』『秋の夕暮』を携え、15日に大阪に赴き、神戸・岡山・広島等、各地を巡演して、明春二月、帰京の筈。既に先発隊は大阪で活動している。</p>
13	<p>『読売新聞』「演芸」欄によれば、近代劇協会では、東京での発表に先立ち、練習の目的で関西行きを思い立ち、『人形の家』『秋夕夢』『マクベス』『ファウスト』を携え、今月下旬より12月中旬にかけ、大阪近松座・岡山・神戸など巡業し、明年2月帝劇で開演すべし。</p>
21	<p>警醒社から森鷗外訳『ノラ』が刊行される【『マクベス』の時と同じ巧みな宣伝戦略と言える】。</p>
30	<p>大阪近松座で近代劇協会第四回興行。イブセン作森鷗外訳『ノラ』、シェークスピア作坪内逍遙訳『ヴェニスの商人』、ダヌンチオ作森鷗外訳『秋夕夢』を上演。配役はノラを衣川孔雀、リンデ夫人を浦路、シャイロックを草人など（田中栄三『明治大正新劇史資料』ただし、25日までとなっているのを、孔雀「思つたま、」（『中央公論』T3/1）などにより、30日までと訂正）。</p> <p>※『蛇酒』によれば、孔雀の妊娠を隠すために、特別仕立てのノラの衣裳を注文した。近松座は、いつもは人形浄瑠璃のかかる小型の劇場だった。イブセンの脚本を選んだのは、在来の新劇に付きまとう誇張を改め、自然な純写実的演技を創始したいという草人の意図に適っていたからだだった。しかし、平明にして微細な感情を的確に表現する技巧を身に着ける事は、容易でなかった。また、この時も、翌年四月の東京の時も、世間はむしろ須磨子が演じたような正面に見えを切る演技を良しとしたので、草人は前途の遠慮を思つて嘆息せずにはいられなかった。雨統きのせいもあって、興行的には散々な不入りだった。</p> <p>※田中栄三『新劇その昔』によれば、大阪でやったのは、東京で『人形の家』を上演する前のテスト興行のつもりだった。</p> <p>※大阪近松座で、十日間の収益が千六百円に過ぎなかった。それに対して、一日の場代が八十円、税金が五十円、宿料が三十人なら三十円、俵約しても二十五円、この他、運動費・大道具代などもかった（『減び行く新劇団（三）』T3・1・30「東京日日新聞」）。</p> <p>※孔雀「思つたま、」によれば、千秋楽の30日にノラを演じているうち、興奮し過ぎたのか、舞台で卒倒。舞台指揮が観客に中止・解散を乞うたが、意識を取り戻した孔雀が再開した所、割れる様な拍手で、涙がこぼれる程の喜びを感じた。しかし『秋夕夢』には出演できなかった。</p>

雑誌「近代」創刊号発行（11月14日印刷納本）。創刊号定価30銭。毎月一回一日発行・定価25銭。編輯者・加藤信正、発行人・上山草人、発行所・近代劇協会、発売所・東京堂。近代劇協会顧問として森林太郎の名の目を掲げている（坪内逍遙の名はない）。近代劇協会事務所として、かかしやの住所を挙げると共に、近代劇協会稽古及試演所として、鳥森町一番地が記載されている。本文は一九四頁。内容は、『ノラ』梗概・『秋夕夢』梗概・北原白秋の詩「新月」・島村民蔵訳シュニツレル戯曲「あそび」・厨川白村「ルウエイルの漫画」・鷺尾浩「生命そのもの、声もて語る美」・渡辺秀峯「ダンヌンチオとその作」・鼎「曾我廼家劇の将来」・朝「新版鳥瞰 女の一生」・相馬御風「新時代―フランシス・グリアースン」・本間久雄「サロメ」と「秋夕夢」・A「鷗外氏に聴いて」・椿姫「SHAWの新脚本」・松本苦味「緑室より」・人見東明の詩「垂死の微笑」他・矢口達訳ボードレール「黄昏の微光」他・中西稲影「劇壇の未来派」・三浦環「驢馬ですよ」・梅外生「大阪文芸界の運動」・朝鳥生「零墨二篇」・古子三平の戯曲「はての日」・中村兵衛「岡山と近代劇」・六号雑誌（細江蔵書による）。加藤信正は朝鳥、鷺尾浩は後の雨工である。執筆者には、早稲田系の若手が多い。六号雑誌の（S生）は草人で、島村抱月が「人形の家」の翻訳脚本を近代劇協会に貸さなかったり、『海の夫人』を上演しないよう交渉したりした態度を氏のために惜しむ、と書いている。

『蛇酒』によれば、岡山へ廻って、ノラの世評や、六高の学生が見に来てくれたことなどで成功。しかし、大阪での失敗を埋め合わせるには足らなかった。岡山の次に乗り込む場所がなかなか決まらず、孔雀の妊娠も座員に気付かれ、東京に帰る者も出た。やがては孔雀に取って代わると期待していた杉山綾子や、草人が弟のように親しくしていた日正重亮も去った。

※孔雀の「思つたま、」（「中央公論」T3／1）末尾には（岡山より）とある。

※武田正憲「諸国女はなし」によれば、杉山綾子は、もと四谷や向島の芸者で、芸名・綾太郎。驚嘆すべき肉体の持ち主。

「よみうり抄」によれば、「近代」は、近代劇協会が地方興行に出たため、新年号を休刊する【このまま廃刊した可能性が高い】。

半ば過ぎ、『蛇酒』によれば、尾道で「マクベス」とハウプトマンの『エルガー』を上演。草人がマクベスを演じた。この公演の後、一座は一旦解散することになり、草人は自分の外套や女たちの長襦袢を質に入れて、帰りの旅費を与えた。草人・浦路・孔雀は宿代も払えず、女たちは「このままロシヤへでも渡ろう」と言

◆大正三年◆（一九一四年）三十一歳

い出したが、土地の親分に救われ、辛うじて安宿に落ち着いた。東京からは、浦路の実家・三田家で、親類の間から離婚話も持ち上がったという報せが届いた。年末、孔雀の母が東京から迎えに来て、孔雀は東京の郊外で出産する事にし、草人だけを残して、浦路も一緒に帰京した。

1

「中央公論」「女優十名家感想録」に、浦路の「汽車の窓より」と孔雀の「思つたま、」掲載。浦路は「女優になる以上、社会の罵倒・嘲笑・侮辱は初めから覚悟している」「芝居は大勢でする芸術だから、謙遜な心で忍耐し通すのを唯一の道と心得るよう常々（草人に）言われている」「演出以外に自分の感情のままに笑ってしまったりした時は、芸術に対して申し訳ないような心持ちがする」、と答えている。一方、孔雀は「舞台に立つと、観客は皆知己としか思われず、身も心も役に成りきった私が喜び悲しむと、観客も共に喜び悲しむように感じられ、何の恐れもなく、輝かしい心持ちになる」と答えている【浦路とは対照的で、女優としての天才が感じられる】。

1

『煉獄』によれば、孔雀は渋谷辺りの産婆に預けられ、浦路は五反田の親戚に監禁同様となり、草人は呉の海軍の姉の家に逃げ込んで、それぞれ正月の雑煮を祝った。その後、四月までに、岡山や尾道に残した芝居の荷物を残らず引き上げ、劇団の陣形を整える為、散々苦労した。その間、孔雀は女の子を産んだが、多摩川あたりの百姓に里子として引き取って貰った。

※浦路は平気で草人と二人で病院の孔雀を見舞いに行った。その子供は関東大震災で遭難死した（工藤美代子『聖林のモンゴル王子』）。

「時事新報」「暖炉の辺り」に、近代劇協会が京阪から岡山まで至る所で失敗を重ね、尾道で新派劇「浪子」を出している、と出る。

「大阪毎日新聞」6面に掲載された楠山正雄の「八 天下の新興劇団」に、草人が「川音第二世」と綿名されている事が出る。

「東京日日新聞」「滅び行く新劇団（三）」に、近代劇協会が尾道で解散したと、衣川孔雀の妊娠などが出る。

楠山正雄「劇壇一年の記録」（「早稲田文学」T3／12）によれば、この月、《新劇団凋落を喜ぶのか気の毒がるのか、面白がるのか分からないやうな言語がしきりに流行する》。また《翻訳劇をむやみに悪くいふことが同じやうに流行する》。

草人が鷗外を訪問（「鷗外日記」）。

4	「近代思想」に「近代劇協会が4月13日から7日間、有楽座でイブセン作森鷗外訳『ノラ』・ハウプトマン作『ハンネレの昇天』を上演し、ノラには孔雀が扮して、敢えて松井須磨子と優劣を競うそうだ」と出る。 昭憲皇太后死去。	5 未か 6 初め?
11	※松本克平『日本新劇史』によれば、孔雀は出産後14日目に舞台に立たねばならない所を、皇太后死去のため、有楽座の上演が一週間延期され、ホツとした。 有楽座で近代劇協会第五回興行。イブセン作森鷗外訳『ノラ』・ハウプトマン作森鷗外(実は小山内薫?)訳『ハンネレの昇天』を上演。配役はノラとハンネレを衣川孔雀、リンデ夫人を浦路など。森鷗外を協会顧問とプログラムに明記。特等1円50銭、一等1円、2等40銭(田中栄三『明治大正新劇史資料』松本克平『日本新劇史』)。	6
17	※田中栄三『新劇その昔』によれば、孔雀のノラは、松井須磨子以来二人目だったので、注目を惹き、評判も良かった。 ※「早稲田文学」T3/12中村吉蔵「劇壇一年の記憶」で注目に値するものとし、演じ方が自然主義的にサラサラし過ぎという非難に反論している。しかし、『ハンネレの昇天』は全くの失敗で、これは主として舞台マネージメントの不行届きが原因としている。	中旬?
26	「読売新聞」に近代劇協会「ハンネレの昇天」の舞台写真掲載。 「東京朝日新聞」(一)面、警醒社の森鷗外訳『ノラ』広告で近代劇協会の公演もタイアップ広告。	中旬?
25	「読売新聞」上司小剣「幹部といふ言葉」によれば、自然に近いという点では、須磨子の臆面のないノラより、おどおどして考えた通りにはものを言いにくそうな孔雀の方が勝っていた。	中旬?
20	草人夫妻と衣川孔雀が鷗外を訪問(『鷗外日記』)。	中旬?
19	「煉獄」によれば、雨後の筈のように新劇団が乱立する中、生き残るためには地方の観客を開拓しなければならぬと気が付いて、近代劇協会の事務員が博多で運動を始めた所、芸術座でも博多公演の準備を始めた事が判り、草人は直ちに博多に乗り込み、博多の有志・九州大学の学生らに根回しを終えると、電話で留守居の浦路・孔雀らに指図し、配役やプログラムは暗号電報で作製し、浦路と孔雀が一二日のうちに三十名程の俳優を集め、この日、東京を出発し、博多に乗り込んだ【参加者として「煉獄」に仮名で挙げられている俳優のモデルは、矢村光枝・香住浦子・諸口十九・宮島文雄・笹本甲午・高山實一郎らのようである】。	中旬?
5 3 28	「煉獄」によれば、博多では第一日目に「人形の家」、二日目にズーダーマンの『故郷』、三日目にストリンドベルヒの『令嬢ユリエ』とチェーホフの喜劇を演じ、好評。最初はあと一二箇所帰京する手筈だったが、大牟田・熊本以下、結局八ヶ月もの長旅となった。 草人の「武器の奪ひ合ひ(上)」(T4・3・11「読売新聞」)に、この月の「演芸画報」に、芸術座が近代劇協会の俳優を再三再四奪取した事についての両者の書簡を公開した、とある。が、見当たらない。他の雑誌の誤りか? ※秋田雨雀の「二劇団の為に惜む」(T2・3・10「読売新聞」)にも、「草人は芸術座の俳優奪取について発表した事がある」と書かれている。 「煉獄」によれば、熊本で公演。五校生とボートで夜通し城の外郭の坪井川を下したりもした。熊本から海路、長崎へ。 ※牛原虚彦『虚彦映画譜50年』によれば、牛原は、熊本で近代劇協会の「人形の家」と『復活』を見た。 近代劇協会が長崎で『故郷』『熊』『ハムレット』『ヴェニス商人』『人形の家』『犬』を順次上演。出演は草人・孔雀・諸口十九など(雑誌「芸術」七月号「編輯のあとから」)。 ※戸板康二編「対談日本新劇史」の三村伸太郎の証言によれば、『ハムレット』の地方公演の際、草人のハムレットが花道から出て来る時、お囃子に太鼓を打たせたと言う。 ※S3・5・31「読売新聞」記事「活動写真今昔譚(九六)」に、草人が伊庭孝がハムレットをやった時、天鵝絨の服を着た所、映画俳優の中に天鵝絨の服を着る者が現れた、と出る。 直子誕生。高橋梅代さんによれば、20日過ぎ。後の上山草人夫人三田直子。 近代劇協会が鹿児島で『ノラ』『マグダ』『ハムレット』を上演後、座方及び土地の後援者からは非「復活」をと要望され、日延べをして急遽上演した。その後、佐賀・神戸・呉・朝鮮・満州・台湾でも『復活』を演目に加えた(T4・3・13「読売新聞」上山草人「武器の奪ひ合ひ」(下))。 ※T4・1・7「時事新報」記事中の弁護士鈴木富士弥の談話によれば、電報と手紙で、島村抱月が翻訳脚色した『復活』台本および中山晋平作曲「カチューシャの唄」の興行権について申し入れをし、草人も今後上演しないと返信したにもかかわらず、6・7月に鹿児島市鹿児島座で1回、佐賀市新栄座で1回、呉市春日座で2回、都合4回『復活』を上演した為、1回三百円、計千二百円の損害賠	中旬?

7	「中央公論」に長田秀雄の『放火』掲載。 ※「演劇新潮」T15／8合評会「新劇運動の回顧、功績」で、長田はこれが近代劇協会で上演され、上演料三十円と車代十五円を貰ったと発言しているが、未詳。	7？
8	『煉獄』によれば、鹿兒島から再び熊本へ行ったが失敗。佐賀での公演後、十日間トヤに就く。草人が神戸へ先乗りして、聚楽座に売り込むことに成功。第一次世界大戦が勃発。 「芸術と生活」に杉村敏夫「芸者屋町」を読んで伊庭君へ」掲載。 『煉獄』によれば、神戸から呉へ。その後、下関から新羅丸で朝鮮の釜山へ渡る。この時、落伍者が出て、座員は東京立出時の三分の一に減った。朝鮮の亡国の民の惨めで不潔な暮らしに同情より悪感を抱く。 ※草人『新劇壇思出話』によれば、朝鮮・満州・台湾巡業の際、諸口十九は『復活』で侯爵の若様に扮し、浦路のカチューシャと対して百回余りも演じ、また『マグダ（故郷）』では、参事官ケラー役を演じた。この時、後の映画監督松本英一・小沢得二らも参加していた。	8 ・28
9？	『煉獄』によれば、釜山から大邱を経て京城に着く。朝鮮総督・寺内正毅伯爵から金一封が与えられ、草人は身に余る光栄とした。京城では手打ち興行を試み、興行師が寄越したごろつきに襲撃されたが、興行は大成功で、十日間満員だった。続いて仁川・平壤での興行を決めた草人は単身、大連に渡り、満州の大連・遼陽・撫順・奉天・安東県での興行を決めて、中国と朝鮮の国境をなす鴨緑江の橋の袂で座員達と合流、南満州鉄道の北端・長春まで行った。 ※菊池貞二『中国四十年の回顧 秋風三千里』『上山草人と私』（S41刊）によれば、奉天の奉天座で『ヴェニス商人』を演じた。シャイロック役の草人の演技が素晴らしかった。	9？
10？	『煉獄』によれば、長春から一座は大連に向かったが、草人は東清鉄道に入り、ロシア領内のハルビンまで旅を続けた。車内のロシアの将校たちは、ドイツ軍とロシア軍が対峙していたポーランドのガリツィア地方の戦況を語り合うらしく見えた。草人は、日露戦争開戦当時、チチハル付近に潜入し、東清鉄道の橋を爆破しようとしてロシア軍に捕らえられ、ハルビン郊外で銃殺刑に処せられた沖楨介・横川省三らの志士の壮拳を追想した。ハルビンからモスクワへ直行する汽車を眺め、ヨーロッパへ行きたい思いに駆られたが、アレキサンドライトという宝石	10？
11？	※谷崎『夏日小品』『宝石』に、草人がアレキサンドライトを持って出ると出る。 『煉獄』によれば、船は日本軍が攻撃中のドイツの租借地・青島の沖合を通過。浮流水雷を恐れつつ、灯火を消して進んだ。上海に寄港した際、『ノラ』と『復活』を上演し、福州にも寄港して、約一週間の船旅で、台湾に着いた。 『煉獄』によれば、青島陥落の報を台湾南部の或る町で聞き、座員一同と土地一流の青楼に祝賀の宴を開いた。 近代劇協会が台湾台南で興行中に、鈴木弁護士の名前で、興行禁止の電報を受けた。それに対して質問書を出した（上山草人「武器の奪ひ合ひ」（下））。 芸術座の依頼を受けた鈴木富士弥弁護士がこの日付けの上山草人宛書簡が、松本克平『日本新劇史』に引用されている。島村抱月脚色の『復活』およびカチューシャの唄の興行権は抱月にあり、訴訟については熟考中である、という内容。 ※草人は、鈴木弁護士から返事を受け取った後、『復活』の脚本を独自に作製し、門司上陸後三四回上場し、宇和島興行中に芸術座が訴えた事を知った（上山草人「武器の奪ひ合ひ」（下））	11？
12？	『煉獄』によれば、台湾での興行は、至る所満員で、約一ヶ月間居た。草人の胴巻は札束で膨らんだ。帰る前に、台北の北、北投温泉で当たり祝いを兼ねた引き上げの宴を張った。三日の航海で門司に着き、その周囲一二箇所公演したが、年末の田舎町では入りが良くない為、一行は別府温泉で、約一ヶ月間、旅の疲れを癒すことにした【近代劇協会が巡演した朝鮮・満州・台湾へは、翌年、芸術座も出掛ける事になる】。	12？

◆大正四年◆ (1915) 三十二歳

1・1

『煉獄』によれば、初日の出は、四国松山に乗り込む瀬戸内海の船の上で迎えた。松山では『マグダ』をやり、草人がシユルツエ、早川謹二が中尉マックスを演じる。

・7

『東京朝日新聞』『読売新聞』『都新聞』『時事新報』などに、島村抱月・中山晋平が、草人夫妻を『復活』および『カチューシャの唄』を無断興行し、著作権興行権を侵害したかどで6日に告訴、千二百円の損害賠償を請求した、近代劇協会は目下、九州別府温泉に滞在中、などとする。

※草人「武器の奪ひ合ひ」(上)によれば、芸術座が告訴に踏み切った背景には、近代劇協会と芸術座の先発員が岡山・広島で衝突していたことがある。

・?

『煉獄』によれば、宇和島でも公演。その後、大雪のため、四五日、滞在を延長する間に、訪問した『大阪朝日新聞』特派員から芸術座が告訴したことを知らされる。その為、船で高松・大阪を経て、そのまま帰京する。

・20

午後、近代劇協会一行は、四国から大阪へ掛けて興行の予定を切り上げ、急遽、帰京(『読売新聞』1・21記事)。

※『煉獄』によれば、浦路の父・三田守一が事業不振のため、大阪に引越すことになり、平八・袖子も大阪へ同行する。この頃、伊庭がかかしやを訪ねて来て協会に復帰することになり、3日3晩泊まっていた。その間に、杉村俊夫は病勢が悪化し、間もなく狂死した。同じ頃、芸術座の沢田正二郎も協会に加入することになった。伊庭・沢田の仲介で下山京子も参加し、一条潮路・玉村歌路も復帰した。

※『日本映画俳優全集・女優編』によれば、三田小枝(後の上山珊瑚)は、虎の門の東京女学院から大阪のプール女学院に転校し、のち病身のため中退したと言ふ【父と一緒に大阪へ行ったのであろう。二年ほど前に東京女学院に入学したとすると、守一の没落は、この頃急に起こったことと見て良いのではないか】。

※工藤美代子『聖林のモンゴル王子』では、浦路の父は大正初期に死去したとし、その頃には芝の明舟町にあった屋敷も手放したとする。

※杉村の病死について、田中栄三『女優漫談』(S2聚英閣)では、大正四年一月、伊庭孝のビイェム公演社の京都南座・大阪弁天座での公演が大失敗に終わり、杉村敏夫が後始末に苦心惨憺した結果、帰京後間もなく病を得て亡くなったのであって、新劇のために一命を失った気の毒な人だ、とする。

・21

草人が鷗外を訪ねる(『鷗外日記』)。

・25

※『復活』裁判について、鷗外の助言を求めに駆け付けたと推定できる。
鷗外が草人を水野錬太郎に紹介する(『鷗外日記』)。
※水野錬太郎(1868-1949)は、内務官僚として明治32年に著作権法案の起草に従事した経歴の持ち主。当時は、貴族院議員。後に内務大臣に三度、文部大臣に一度就任した。

2か

3頃?

2?

『煉獄』によれば、孔雀は二人目の子供を懐胎した。

草人の「お世話になるばかり(上)」(S5/6改造社版『谷崎潤一郎全集』月報2)によれば、大正4年2月頃、谷崎は、高田商会(当時の代表的な総合貿易商社で、大倉組・三井物産・三菱商事とともに四大武器商社とも言われていた)に勤めていた友人の茂木良平(かつぶくのいい早川雪洲に似た好男子)を連れて、新橋駅近くのかかしや化粧品店へ初めて上山草人を訪ね、俳優にやってこれと頼んだ。当時、茂木は女流教育家の妻と別居し、愛人(後の映画女優花川環二、勝見庸太郎夫人)と同棲していた。草人は最初、自分をモデルにして小説を書くために谷崎がスパイを送り込んだのだと思いついたが、これは被害妄想的猜疑心の現われ、間もなく疑いが晴れた。『役者の妻』にも、茂木は鈴川慈夫の名で出演した【ただし、田中栄三『明治大正新劇史資料』の配役表に鈴川慈夫の名が出るのは、大正5年1月の「ハンネレの昇天」だけ】。

※草人の『谷崎潤一郎との四十年』(S26/4「文芸春秋」春の増刊第2人物読本)によれば、草人は直ちに承知して、近所の鰻屋に谷崎と茂木良平を招いた。谷崎は「君の劇団はピカ一ではないが、君の経営に信頼が持てるから連れて来た」と言った。草人は谷崎に、何かしら根性骨の深い所からウマの合うものを感じた。谷崎は、苦学した経験があったので、友達には親切だった。好き嫌いは激しかったが、気に入れば、溢るる誠意で厚遇するを常とした。

※谷崎『上山草人のこと』では、『役者の妻』上演後、大正五六年頃に、茂木を俳優にしてくれるように草人に頼んだ谷崎の紹介状を持って、茂木が草人を訪ねたが、近代劇協会は既に解散してしまっていて、茂木は佐藤紅緑に預けられた、とする。が、記憶違いが多いと思われる。

2・16

『よみうり抄』によれば、草人は、芝区兼房町岩島病院で宿痾の痼癪を切開。同日「読売新聞」記事「新しい劇の妥協」によれば、近代劇協会と下山京子・伊庭孝の金扇社、沢田正二郎・玉村歌路の新時代劇、新劇社が合同し、来月演技座で旗揚げする事は、多大の興味を持って一般に迎えられている。上演される『役者

・22	の妻」は、市村羽左衛門夫妻・新橋芸者静江・大倉喜七郎・喜八郎・福沢桃介・初瀬浪子・松井須磨子と、モデルそのままらしい。 岩淵甚四郎が鷗外を訪問。近代劇協会を脱し、東京演劇協会を起こすについて、顧問就任を乞われ、鷗外は承諾（『鷗外日記』）。
3・3	「東京日日新聞」記事によれば、昨日、東京地方裁判所で、『復活』をめぐる裁判が始まった。被告側は、代理人として、弁護士・吉田三市郎、田坂貞次が出廷した。
・5	※草人「谷崎潤一郎との四十年」によれば、トルストイは最初から著作権を放棄して自由に演出を許しているのに、上演権などとは片腹痛いと思った。山崎今朝弥・長野国助らの弁護士に応援の論陣を張ってもらった。
・9	「読売新聞」に「著作興行権問題」（一）として中村吉蔵「他人を議する勿れ」掲載。 「よみうり抄」に、近代劇協会は月末から演技座で「役者の妻」上演、と出る。 また、「著作興行権問題」（二）として昇曙夢「著作権の在る処」掲載。
・10	「読売新聞」に「著作興行権問題」（三）として、秋田雨雀「二劇団の為に惜む」掲載。
・11	「読売新聞」に草人の「武器の奪ひ合ひ」（上）掲載。芸術座が近代劇協会の俳優を再三奪取したため、昨年来絶縁しているなど。
・13	「読売新聞」に草人の「武器の奪ひ合ひ」（下）掲載。『復活』は十数年前、藤沢浅二郎・佐藤蔵三が本郷座で姉崎博士らの助言のもとに演じ、その後様々な新派俳優によってやり古されたものだ」と述べている。また、「よみうり抄」に、伊庭孝が20日開演の近代劇協会に加入出演すること、近代劇協会は、「役者の妻」に劇中劇「サロメ」一幕を加え、20日から来月4日まで演技座で開演することが出る。
・16	「読売新聞」に「著作興行権問題」（六）（七）として、島村抱月「復活」問題に就いて鈴木弁護士に送る」連載。
・18	「読売新聞」に「著作興行権問題」（八）として、宮島五丈原「著作権侵害は明白」掲載。
・20	「読売新聞」に広告「演技座の近代劇協会と <small>（東京で一番よく売れるホーカークー液）</small> 掲載。 「近代劇壇の大同団●役者の妻と疑問のモデル」として、羽左衛門と静江がモデルと紹介し、この芝居は「従来の翻訳劇の様に或一部の人々の鑑賞のみに止らず御令嬢、奥様紳士方、学生、芸者衆お女中に至るまで何誰が御覧になつても判り
・24	易く面白い」としている。また、山川浦路・衣川孔雀・下山京子曰くとして、ホーカークー液に賛辞を呈している。また、「廿日初日五十銭均一」「おみやげとしてホーカークー液進呈」と広告。本来は、特等1円20銭、1等1円、2等70銭、3等50銭。また、開演は毎夕四時。 ※新劇が観客層を広げ、コマースヤリズムと手を結ぼうとする際の問題が窺われる。 ※静江は新橋芸者。羽左衛門との恋愛事件は、大正7～9年の同棲後、破局を迎えた。 近代劇協会第六回興行。根岸興行部傘下の赤坂演技座で伊原青々園の『役者の妻』を上演する。これは十五代目市村羽左衛門の恋愛問題を扱った通俗小説の劇化で、劇中劇として、『サロメ』を上演。『サロメ』では、下山京子がサロメ、沢田正二郎がヨカナアン、ヘロデアスを浦路が演じた（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。 ※草人の「劇壇秘話」によれば、長期巡業の成功に勢いを得て、草人は散逸していた新劇俳優の大同団結を企て、下山京子・一条汐路・伊庭孝・沢田正二郎らを集め、「役者の妻」を上演した。新劇団が大衆劇を演じた最初。花柳はるみが粕谷銀子、久松喜世子が椿東杉枝の名で出演していた。 ※「煉獄」によれば、興行的には成功した。 ※田中栄三「新劇その昔」によれば、衣川孔雀の芸者寿美丸が酔っ払って沢田の玉川を口説く場面で、田中は衣川の酔態が実に巧かったので感心した。一緒の枡で見ていた谷崎も、「孔雀はうまいねえ」と、感嘆していた『役者の妻』には星野という文士が登場する。「鯨人」に、明らかに谷崎自身をモデルとした悪魔主義の作家・星野が登場するのはここに由来するか？。 ※草人の「女優さんやい」によれば、草人は、劇中劇の『サロメ』で、舞台監督（島村抱月によく似た正邦宏が演じる）が女優（松井須磨子役）にうつつてを抜き、楽屋裏から道具にもたれると、道具具が倒れかかり、道具具の親分（草人が演じる）が怒って、金槌で舞台監督の頭をなぐるという場面を作者に無断で挿入し、著作権問題の憂さ晴らしをした【ただし、田中栄三『明治大正新劇史資料』の配役とは一致しない点がある】。 ※小山内薫「ワイルドの「サロメ」」に、下山京子のサロメは、潤いも陰影もなく、ただ声の大きいだけだった、という評がある。

24	「読売新聞」「読売文壇」に島村抱月「再鈴木富士弥氏に呈す」(一)～(三)連載。	を召喚し、注意した。
26	「読売新聞」「読売文壇」に、佐藤紅緑「妥協は断じて不可なり」掲載。	
27	東京地方裁判所の三淵裁判長が原告被告両代理人に対して和解を勧告。9日「東京朝日新聞」には、記事と共に、草人の談話も掲載している。	
4・8	「読売新聞」「消息いろ／＼」。近代劇協会は、日本電報通信社協賛のもとに、明14日一日に限り、演伎座で「役者の妻」特別開演をなし、当日は入場者に対して、洩れなくお土産として大入福袋を呈する。	
13	「大阪毎日新聞」「女の群から(下)」に孔雀・浦路・玉村歌路への言及あり。	
14	東京地方裁判所裁判長三淵忠彦の和解勧告により、「復活」の損害賠償請求は放棄、裁判費用は各自で負担、今後は無断興行をしないことで、抱月と草人の和解成立(「東京日日新聞」「読売新聞」23日など)。「煉獄」もほぼ同じ。	
22	※草人「谷崎潤一郎との四十年」によれば、漫画家岡本一平が、この事件について「朝日新聞」の一面にでかでかと戯画を出した。	
下句?	「煉獄」によれば、近代劇協会は、晩春、長野・松本で「マクダ」などをやった他、上諏訪・甲府でも興行。	
5	草人ら近代劇協会一行は、山梨県の巴座で公演(山梨県の歴史 http://www.pref.yamanashi.jp/syoku/teikishu/aisho_1.html)。	
7・1	※「煉獄」によれば、信濃路から帰ると間もなく、再び一座を率いて仙台で公演。郷里の人たちの声援を受け、目出度く打ち上げ、団員を東京に帰してから、草人は浦路と孔雀を伴って南山閣の義兄を訪ね、そこから十里奥の寒村にある父の墓にも詣でた。それから松島に遊んだ。	
10	※草人「新劇壇思出話」によれば、「役者の妻」の後、諸口十九は主役を沢田に奪われた不満から退団。草人は、伊庭孝・沢田正二郎と共に、信濃路や仙台方面に地方巡業に出た。	
	近代劇協会第七回興行。赤坂演伎座で尾崎紅葉作『金色夜叉』、ソログウプ作昇曙夢訳『死の捷利』、岡本綺堂作『能因法師』を上演する。伊庭孝の貫一、一条汐路のお宮、沢田正二郎の荒尾譲介、下山京子の赤橙満枝など(田中栄三「明治大正新劇史資料」)。	
	※田中栄三「新劇その昔」によれば、地方興行を合わせると、この時が五十三回目興行だった。	
2	※「煉獄」によれば、この頃から草人は憂鬱になり、人生や思想問題について考え込む。	
4	「読売新聞」に広告「於演伎座 近代劇協会第五十三回興行」。2・4日はホーカイ液をお土産として進呈す、とし、衣川孔雀・下山京子曰くとして、ホーカイ液に賛辞を呈している。	
5	「読売新聞」記事「演伎座の近代劇」。「金色夜叉」は息が合っていない、調子が乗っていない。特に伊庭孝。沢田と京子だけが無難。しかし『死の捷利』は大成来。近代劇協会はやはりこういうものを沢田見せてくれた方が好い。「能因法師」は未見だが、草人が非常に好いという評判だ。また、「よみうり抄」に、近代劇協会は月末、帝劇で『リア王』を上演すると出る【実際には『桜の園』。しかし大正8年1、2月に上演しているから、この頃、既に計画していたのかも知れない】。	
6	「時事新報」記事「近代劇の金色夜叉」。「金色夜叉」はお粗末なもの。新派を征服するつもりらしいが、不自然だと思われる技巧よりも、自然だと思っている生地の方が、遙かに不自然に見えた。中幕の翻訳劇『死の勝利』の方がましだった。素人が演じるには、翻訳劇の方が楽らしい。	
20	草人が鵜外を訪ねる(「鵜外日記」)。	
26	奥川辰雄が鵜外を訪ね、近代劇協会のことを言う(「鵜外日記」)。	
31	近代劇協会第八回興行。帝国劇場でチェーホフ作伊東六郎訳『桜の園』を上演。配役は浦路のラーネフスカヤ、孔雀のアーニヤ、沢田正二郎のガーエフ、栗島狭衣のロバーヒン、伊庭孝のトロフィーモフ、南部邦彦(早川金三)のピーシチック、一条潮路のワリーヤ、玉村歌路のドウニャーシャ、草人のフィルスなど。(田中栄三「明治大正新劇史資料」)。	
	※興行的には全くの不入り(大笹吉雄「日本現代演劇史」)。	
	※田中栄三「新劇その昔」によれば、演出を依頼された小山内薫は、草人や伊庭孝の稽古不熱心に激怒し、助手の莊司直に「明日から来ないから君やっておけ」と言って帰ってしまった。草人は演出のお礼にも来ないので、田中が注意すると、草人は安い反物を一反持つて来た。	
	※草人「新劇壇思出話」によれば、南部邦彦・栗島狭衣などが参加。帰朝早々の小山内薫に監督を依頼したが、芝居が不当たりで、監督料不払いなどの問題を生じた。	
	※「帝国文学」九月号・若月紫蘭「近代劇協会の桜の園」は、神秘的象徴的な	

<p>『死の勝利』の時に比べて『意想外の成功』とし、『桜の園』は写実的だから、『割合に真面目な』近代劇協会の諸君には、理解も表現もしやすかったのだらう、とする。また、瀬沼夏葉の翻訳よりは、せりふが流暢な立派なものになっていたことを評価しつつ、原作に不忠実であることがこの協会の大きな欠点である、とする。演技では孔雀を絶賛し、潮路・歌路・浦路・沢田を褒め、伊庭・栗島らを批判。草人については、称賛した批評家も少なくなかったが、声が平戸間の半ば回りでも殆ど聞こえなかったと批判している。また興行的に失敗した点については、『桜の園』は歌舞伎の誇張的な形式に慣れた低級な日本の観客にはまだ無理であり、だから劇評家や若い俳優たちですら、脚本に退屈して途中で席を立ったのだ、としている。</p>	<p>※伊庭孝は、この後、浅草オペラで活躍し、関東大震災後は、音楽評論家として業績を挙げ、昭和12年に死去。</p> <p>※『煉獄』によれば、この後、草人は久しく怠っていた読者や思索に耽った。盆過ぎ、（大正3年初めに）孔雀が産んだ娘は、急性脳膜炎で死去。</p> <p>脚本作家五十余名が、舞台監督小山内薫氏のため、『桜の園』の総見を催す（28日「よみうり抄」）</p> <p>「時事新報」記事では、狭衣・歌路・南部・沢田を褒め、草人は時々セリフが通らなかったと評する。</p>
<p>※『新小説』九月号の小宮豊隆「近代劇協会の桜の園」は、せりふが会話になっ ていなかったと厳しい。</p> <p>※『煉獄』によれば、観客として期待できる学生たちの帰省中であるにもかかわらず渋い芝居を上場したので、予想通り見物は薄かった。小山内薫は、自ら鎧を振るって、舞台裏で桜の木を切る音を立てていた。</p> <p>※土方与志は「自伝」（『なすの夜ばなし』）で、若き日に印象に残った公演として挙げています。</p>	<p>「読売新聞」記事「近代劇協会の『桜の園』」によれば、第五十四回興行。出し物もよし、新たに栗島狭衣・田村寿美代らに加わって、大いに活気を呈している。皆一生懸命で、それぞれによく役の性格が表されているが、草人の老僕フィルスが抜群。栗島もしっかりしている。女優では潮路が一番上出来。伊庭孝だけは、何をやっても同じ様になって、駄目。</p>
<p>※「新劇三十五年史を語る」で、草人と秋田雨雀は、学生時代の土方が草人の稽古場に入りしていた事を証言している。</p> <p>※谷崎の『法成寺物語』を上演するに際して、土方与志が書いた『演出にあたって』（『月刊前進座』S33/8）に、谷崎が土方を草人の近代劇協会の稽古場に連れて行ったという回想がある。</p>	<p>「読売新聞」記事「近代劇協会の『桜の園』」によれば、第五十四回興行。出し物もよし、新たに栗島狭衣・田村寿美代らに加わって、大いに活気を呈している。皆一生懸命で、それぞれによく役の性格が表されているが、草人の老僕フィルスが抜群。栗島もしっかりしている。女優では潮路が一番上出来。伊庭孝だけは、何をやっても同じ様になって、駄目。</p>
<p>※「読売新聞」S6・7・22「十五年ぶりで帝劇へ出た草人（二）」によれば、この頃、草人は沢田正二郎に金50円の給料を渡していた。</p> <p>※この頃か？ 沢田正二郎「三千六百五十日」（『新国劇』沢田正二郎 舞台の面影）によれば、草人・伊庭・沢田の三人が、新劇運動に望みも絶え果て、一夕、茶屋料理屋が軒を並べた街を歩いていた時、自動車に頭から泥水を跳ねかけられたが、怒鳴る気力も失せて、ぼんやり顔を見合わせると、草人が突然「おい、泥棒をしようじゃないか」と真顔で言い出し、伊庭が見張り役、沢田が家人を縛る役、草人が財物を纏めて持ち出す役と決めた事もあった（同書の竹田敏彦「沢田正二郎氏小伝」では、帝国劇場に公演して大失敗を重ねた時のこととする）。</p>	<p>「煉獄」によれば、ちょうど、露国一寸法師劇団が新橋駅に到着した日に、妊娠九ヶ月にもなっていない草人が産気づき、女の子を産み落とすが、間もなく死亡。駒込にある先頃死んだ上の娘と同じ墓に葬られた。</p> <p>※「萬朝報」などによれば、ベテログラード小人劇団が9月28日から本郷座で公演を行っている。</p>
<p>「近代思想」（T4/10-T5/1）ただし、2号以後、連続発禁）に載った大杉の論文をめぐって草人が神近市子と議論し、大杉栄宅（この夏から十二月まで小石川区武島町に住んだ）の面会に連れて行かれた。荒畑寒村らと一緒に帰る途中、【現・文京区水道町二丁目】石切橋のたもとで電車を待っていた時に、神近は、草人の多妻生活・三角同盟に関して所存を尋ねた。丁度その頃は、神近が勤めていた【東京日日】新聞で、女性の貞操問題に関して日々各方面の識者の意見を連載している時だった（草人の『神近市子さんへ』と題する二百字詰原稿用紙三十三枚（以下欠）の書簡？原稿による。伊東市の天城診療所所蔵。大正6年5月以降、6月17日以前の執筆と推定）。</p> <p>（推定）『煉獄』によれば、金比羅大権現の縁日の日に、孔雀は子供の頃からの自</p>	<p>「近代思想」（T4/10-T5/1）ただし、2号以後、連続発禁）に載った大杉の論文をめぐって草人が神近市子と議論し、大杉栄宅（この夏から十二月まで小石川区武島町に住んだ）の面会に連れて行かれた。荒畑寒村らと一緒に帰る途中、【現・文京区水道町二丁目】石切橋のたもとで電車を待っていた時に、神近は、草人の多妻生活・三角同盟に関して所存を尋ねた。丁度その頃は、神近が勤めていた【東京日日】新聞で、女性の貞操問題に関して日々各方面の識者の意見を連載している時だった（草人の『神近市子さんへ』と題する二百字詰原稿用紙三十三枚（以下欠）の書簡？原稿による。伊東市の天城診療所所蔵。大正6年5月以降、6月17日以前の執筆と推定）。</p> <p>（推定）『煉獄』によれば、金比羅大権現の縁日の日に、孔雀は子供の頃からの自</p>

・13	分の盗み癖について告白する。 〔推定〕『煉獄』によれば、お会式の太鼓の音が聞こえる日、孔雀は、「草人への愛の証として毎月書いて来た誓紙の内、一枚だけ不浄なもの〔経血〕で書いた」と告白した。草人は激怒し、「お前は獣だ、神や仏を拝む前に先ず人間を拝め」と、自ら座禅を組んで拝ませ、「獣なら、人間の食べるものを食うな、これでも飲め」と言つて、以下伏字部分あり【草人の尿を飲ませたか?】	・11	し、三体の阿弥陀の夢を見る。 『煉獄』によれば、草人の帰京した日の夜、巢鴨の母親が訪ねて来た。草人は、暫く別居することにして孔雀を母と帰らせると、「悪魔払いだ」と言つて塩を撒いた。しかし、すぐに巢鴨行きの電車に飛び乗ったり、また引き返したり、未練に懊悩した。
・27	『煉獄』によれば、近代劇協会的女優【桂久枝?】から、孔雀の素行を仄めかされ、孔雀を追及した結果、孔雀は毒婦のような形相になり、草人が満韓に連れて行つた俳優すべてと関係を持つたと答えたので、相手の名前・場所・日時の一覧表を作らせ、一人一人から謝罪状を取るべく、先ず早川謹二から厳しく追及を始めた。しかし、翌日、早川は逆に「草人を告訴する、新聞にも発表する」と言い出した。孔雀は、その後も、浮気はしていないと言つたり、したと言つたりして、草人を悩ますが、最後に、浦路の血を飲み、般若心経の真実という文字を飲んで、身の潔白を誓つた【『煉獄』のこの辺りの叙述は、谷崎『痴人の愛』におけるナオミの浮気事件の叙述に影響を与えた可能性がある】。	・12	『煉獄』によれば、不動明王のお告げで、添い遂げるよう言われて、再び孔雀が戻つて来る。その後、草人は再び孔雀の浮気を疑いだし、「孔雀は自分を毒殺しようとしているのではないか、この二三日、孔雀に髪の毛を梳いて貰っている間に自分が忽ち寝入ってしまったのは、魔薬のせいではないか、マラリヤの様な浦路の発熱も薬のせいではないか」と疑つたりする【こは、『鮫人』で梧桐寛治が「自分は妻の総子か愛する真珠に睡眠薬で眠らされているのではないか」と疑う所に影響している】。また、自家の女中から、孔雀のかつての自白を裏付けるような証言を聞き出す。そして剃刀で孔雀の喉を傷付けてしまう。
・9	『煉獄』によれば、早川の問題は、桂久枝の弟がそのかしていたらしく、この日、五十円を渡し、謝罪状を書くことでケリが付いた。	・29	『煉獄』によれば、不動明王のお告げによつて深川不動尊で三日間の水垢離を行い、この日、孔雀と別居する。孔雀は「この3年間、あなたは一度も、浦路と別れてお前を本妻にしてやる、と言わなかった」と恨み言を言つた。しかし、草人は、別居後も毎日会いに通つた。3年間に作つた孔雀に対する恋の歌は二百首を越えていた。
・10	『煉獄』によれば、今上陛下御大典の初日、草人は一人、成田山新勝寺に参籠	11上旬 ?	※草人の「神近市子さんへ」に、「私の【衣川孔雀との】愛の生活は、不動様とお数珠と経文とがほいて呉れました」とある。 近代劇協会第九回興行。三崎町の東京座で、舞台協会と合同で、通俗劇『みなし児』上演。衣川孔雀も芸者辰龍役で出演（田中栄三『明治大正新劇史資料』【ただし、舞台協会の俳優が中心】）。 ※戸板康二編『対談日本新劇史』の木村修吉郎の証言によれば、『みなし児』は、田村秋子の父で中央新聞の田村西男からの話でやることになった。 ※高木健夫編『新聞小説史年表』によると、「中央新聞」T4・7・7・T5・1・27に李風山人「みなし児」が連載されている。 ※衣川孔雀はこれ以降、舞台を退き、郊外の母の家で芝居とは没交渉の隠遁の一年を送る（衣川孔雀「由井ヶ浜より」）。
・9	※T5・3・29「東京日日新聞」記事「衣川孔雀が尼と発狂の噂」では、大正4年の暮頃、孔雀の母方の祖母から不動信仰を勧められ、草人・浦路・孔雀は、一時熱心に朝夕の看経・三日の参詣を勤めたとする。	12・1 10	『読売新聞』記事。東京座の合同劇は、中央新聞社の主催。「みなし児」は英国リットン卿 [Baron, Bulwer-Lytton] の『夜と昼』 [Night and Morning, 1841] を李風山人が翻案し、仲木貞一が脚色した甘いものだが、見た目には変化があつて面

白い。探偵が出る所や岩窟の中で外国貨幣を密造している場面など。俳優は、合同のため、息が合わない所はあるが、加藤・横川・川井・金井・鎌野・浦路・房江は良くしている。余興の芸妓の踊りも賑やかだ。

草人は衣川孔雀と公正証書を交わし、草人の参与しない演劇に出演することを禁止した（松本克平『日本新劇史』に写真版で掲載されているT6・6・21沢田正二郎宛草人書簡による）。

※『劇壇秘話』によれば、この無名契約に立ち会った公証人は、三浦環の父・柴田猛甫だった。後の伊沢蘭奢・明石潮らとも、柴田猛甫を立会人として同様の無名契約を作成した。

「読売新聞」根岸興行部の全面広告記事の一部として、近代劇協会と舞台協会は、演技座で、小杉天外作・脚色・監督の『銀笛』とハウプトマン作『ハンネレの昇天』を合同上演。1月元旦より17日間の長期興行。午後2時開場【下山京子が多美子役で出演予定になっているが、実際には河合磯代に替わった。また東がお捨てに予定されているが、これも和泉房江に替わった。興行期間は10日までに短縮され、開場は午後5時に変更されたらしい】。

年末か翌年初め？
草人は神近市子から大杉栄との愛の成長を打ち明けられた（草人『神近市子さんへ』）。

◆大正五年◆（1916）三十三歳

この正月頃から谷崎潤一郎は上山草人と交際を始める。草人は悪辣な油断のない人間のように評判されていたが、付き合ってみると、率直で飾り気のない無邪気で天真爛漫な男だった。余りに生一本・赤裸々・直情径行で、時に赫怒・号泣・奮躍・切歯し、恋愛や事業については執拗・大胆である為、誤解を招いたらしい。谷崎は僅かの間にすっかり草人が好きになり、やがて三日にあげず互いに訪問し合う程になった。目下の所、草人が一番懐かしい遠慮のいらぬ相許した友人である（T6／10谷崎『蛇酒に序す』）。

近代劇協会第十回興行。赤坂演技座で、舞台協会と合同で、小杉天外作『銀笛』・ハウプトマン作『ハンネレの昇天』を上演。『ハンネレの昇天』の医師ワッハレル役で鈴川慈夫が出演。衣川孔雀は不参加。興行的には全くの不入り（大笹吉雄『日本現代演劇史』田中栄三『明治大正新劇史資料』）。

※『演芸画報』二月号に、草人はかなりよく演じていたが、東北弁でぶち壊しになる、と批評が出る。

※『読売新聞』T5・2・7「豆えん筆」によれば、途中から両協会の間にごたごたが持ち上がり、『ハンネレ』の舞台上で、労働者役の草人が木樵役の東屋三郎を杖で殴り、翌晩は、東屋が草人に当て身を喰わせた。

※草人『素顔のハリウッド』の夏川静江「よろこびのことば」によれば、『ハンネレの昇天』に、当時七、八歳の夏川静江を初めて出演させた。

※大正四年、日比谷公園で遊んでいた数え年七歳の斎藤静江（夏川静江）を草人が見出し、近代劇協会と佐々木積らの舞台協会が赤坂演技座で合同公演を持った際、小杉天外の『銀笛』に子役として出演させたのが初舞台（『日本映画俳優全集・女優編』）。

※夏川静江の「こはい小父さん」（S2・2・12「サンデー毎日」）に、草人の稽古が厳しかったことを回想している。

※この公演後2年半、近代劇協会は浦路の病氣と孔雀の脱退の為、活動を停止し、茂木（鈴川）は佐藤紅緑の劇団に加わるが、間もなく病死した（上山草人「お世話になるばかり（上）」）。

※佐藤紅緑の劇団は、時期から考えると新日本劇か。『日本映画俳優全集・女優編』で、花川環（茂木の愛人）が新日本劇で初舞台を踏んだとしている点から、そう考えられる（ただし、新日本劇は佐藤愛子『花はくれない』によると、大正5年の夏の終わりに解散し、紅緑は、その秋から日本座を新たに旗挙げした）。草人は、佐藤紅緑と新派の本郷座時代に親しくなっているし、新日本劇には武田正憲、日本座にも日足重亮という旧友が座頭格で入っていた。また佐藤紅緑は、『読売新聞』T4・12・26記事によれば、根岸興行部の顧問にもなっていた。

下句
孔雀の父・牛円競一が死去。この後、後見人となる叔父・牛円陸軍大佐が元ドイツ大使・杉村虎一ら親戚と相談した結果、孔雀は草人との関係を絶ち、女優をやめて、実家に戻ることにした（『東京日日新聞』T5・3・29「衣川孔雀が尼と発狂の噂」）。

※草人『劇壇秘話』『新劇壇思出話』によれば、浦路はリユーマチで二年余り病臥した【近代劇協会が大正七年六月の『ヴェニス』の商人】まで二年五ヶ月休する主因はここにあり。草人は演技座主・根岸哲の知人である関係から、根岸興行部ならびに常盤株式会社の相談役となり、座組・脚本選定などを受け持つ。小泉丑治に進言して、新劇の民衆化を企て、四散していた男女新劇俳優を、民衆娯楽の中心浅草に集注すべく、黒幕的活動の時代に入った。

春

※草人「お世話になるばかり(上)」によれば、草人が新劇団の残党の大同団結を計ろうとした時にも、谷崎は大いに尽力したという。

※阿部優蔵『東京の小芝居』によれば、根岸興行部(株)は、根岸浜吉が明治二十一年に常盤座を建て、四十四年その隣に金龍館を建て、翌年86歳で死去、大正二年、跡を継いだ娘婿の小泉丑治が、常盤座の北隣にあった芝居茶屋を改築して映画館東京倶楽部とし、三館を運営する会社として、設立したものである。大正六年には兄弟会社として常盤興行を設立し、観音劇場・公園劇場を直営した。

※根岸哲は、浜吉・丑治と同村の出で、丑治から長女むめの婿に望まれ、土浦中学卒業後、十代で結婚。以後、興行師として優れた手腕を振るった。一枚の入場券で、隣接する常盤座・金龍館・東京倶楽部を自由に観て歩けるという興行方法も、哲のアイデアで成功した。哲が若くして亡くなった際には、松竹が「これでやっと浅草に進出できる」と赤飯を炊いて祝った程だった(榊原勝『高田保伝』)。

※『松竹七十年史』によれば、三館共通制は大正四年一月から。常盤興行創立は大正六年三月。

草人が初めて向島の谷崎宅を訪ねてきた。以後、谷崎・鈴川・草人で方々を飲み回った。ただし、谷崎は糖尿病で酒は飲まず、食べる方が専門だった(上山草人「お世話になるばかり(上)」ただしT4/6頃とする)。

※草人「谷崎潤一郎との四十年」によれば、千代子はまだ乳飲み子の鮎子を抱いていた【とすれば大正5年3月14日以降になる】。三日に一度ぐらい会っていた。お互いの家庭に寝泊まりをするようになり、一つ夜具にもぐることも珍しくなかった。両方の細君が「二人はおかしい」と囁き合った程だった。草人の家で原稿を書くこともあった。風呂も仲良く一緒に入った。閨房の秘法まで誇り合いながら大切なものを比べる事があったが、比較にならなかった。或る日、来客に二人の合作を乞われて、谷崎が「わざおぎの草人ぬしのでかまるは風呂場の板をなめもこそすれ」と書いた下に草人が松茸を描き添え、また草人が「文豪の谷崎ぬしのちびまるは衣をかつぎておわしますかな」と書き、里芋の絵も添えた。草人は上野の美術学校で付け立て【日本画で、寝かせた筆の腹で描き、筆に含んだ墨または絵具と水の加減で一筆の中に濃淡を付ける描き方】を川端玉章から習い、芋や茸は習っていた。

※「りべらる」S28/12草人・横尾泥海男の対談「馬敬礼奇譚」で、「一に草人、二に(江川)宇礼雄、三四がなくて、五が馬だ」という歌に言及している。

3・29

4

・8
17

「東京日日新聞」記事「衣川孔雀が尼と発狂の噂」。孔雀は草人の子を二人産んだが、何れも嬰兒で死んだ。今は果鴨の実家に戻っている。

「女の世界」に小町京之助「尼になる衣川孔雀」掲載。孔雀は私生児を二人産み、一人は間引いた。最近読経に明け暮れている。草人は孔雀の後釜として、下谷の八千代・酒井米子・一条潮路・玉村歌路を口説いてはねつけられた、とする。

芸術座が第一回新劇普及興行を行う。根岸興行部傘下の浅草常盤座で、『復活』と中村吉蔵作『嘲笑』に活動写真「冬物語」が付いて、一等入場料が五十銭(阿部優蔵『東京の小芝居』【田中栄三『明治大正新劇史資料』では『復活』と『サロメ』とするが、誤り。】)

※4・9「東京日日新聞」記事「芸術座の初日は大入人気」によれば、最初が『嘲笑』で大受け、次いで着色活動写真シェークスピア原作「冬の夜の物語」、最後が「復活」。「カチューシャ可愛や」が大受け。須磨子がネフリュードフに見せられた初恋の写真と床に投げ付け嘲罵するあたり、大喝采で「須磨子大当たり」の声が四方から起こる。客種は今までの常盤座とはガラリと変わって、華族令嬢・公園芸者・京阪辺りの興行師なども来ていた。新劇壇は堅苦しいもののように思われているが、浅草公園と決して不調和ではない。

※小山内薫は「新劇復興の為に」で、こうした動きを、「日本の新しい芝居の魂は、無惨に傷付けられ、浅草公園の八公熊公の前に晒され、池に投げ込まれてしまった」と批判した。

※田中栄三『明治大正新劇史資料』によれば、小山内は「新劇はインテリに見せるもので、大衆のために存在するものではない。満員になるような芝居は新劇の皮をかぶった通俗劇だ」と言って軽蔑していた。

※草人「劇壇秘話」「新劇壇思出話」によれば、新劇普及興行は、草人が浜松に出張し、巡業中の島村抱月と話を取り決めた。開演間近には前祝いとして、常盤座重役山田喜久次郎が楼主である吉原の稲井楼で前祝いがあり、草人・抱月・須磨子は、それぞれ相方と一夜を明かした。この頃、草人は孔雀と再びよりが戻って、大川端に「二枚標札の家」と評判になった家を構えた【「二枚標札の家」は、後出、駒形(浅草諏訪町十一)の家と思われるが、一年足らずで孔雀が飛び出したため、草人はかかしやに戻る。谷崎はこの駒形の家を訪ねた事があり、「鯨人」の梧桐寛治の家は、この浅草諏訪町に設定されている。草人がここに住んだのは、諏訪町河岸にあった小泉丑治宅のすぐ傍だったからであろう】。

8	・ 8	「読売新聞」記事「須磨子と孔雀」の島村抱月談によれば、先夜、抱月・須磨子	・ 9	芸術座は神戸で公演を行ったか？（草人『神近市子さんへ』から推定） 午前2時過ぎ神近市子が大杉栄を襲った日蔭茶屋事件が起こる。
7	・ 7	※衣川孔雀の『由井ヶ浜より』によれば、前年夏以来、舞台を退き、郊外の母の 家で芝居とは没交渉の隠遁の一年を送っていたが、真に芸術を求めたい心持ちか ら参加した。しかし、芸術の理想とはほど遠く、演劇と絶縁する決意を固めた。	・ 8	
6	・ 6	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 9	
5	・ 5	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 10	
4	・ 4	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 11	
3	・ 3	※衣川孔雀の『由井ヶ浜より』によれば、前年夏以来、舞台を退き、郊外の母の 家で芝居とは没交渉の隠遁の一年を送っていたが、真に芸術を求めたい心持ちか ら参加した。しかし、芸術の理想とはほど遠く、演劇と絶縁する決意を固めた。	・ 12	
2	・ 2	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 13	
1	・ 1	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 14	
0	・ 0	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 15	
9	・ 9	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 16	
8	・ 8	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 17	
7	・ 7	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 18	
6	・ 6	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 19	
5	・ 5	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 20	
4	・ 4	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 21	
3	・ 3	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 22	
2	・ 2	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 23	
1	・ 1	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 24	
0	・ 0	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 25	
9	・ 9	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 26	
8	・ 8	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 27	
7	・ 7	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 28	
6	・ 6	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 29	
5	・ 5	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 30	
4	・ 4	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 31	
3	・ 3	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 32	
2	・ 2	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 33	
1	・ 1	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 34	
0	・ 0	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 35	
9	・ 9	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 36	
8	・ 8	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 37	
7	・ 7	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 38	
6	・ 6	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 39	
5	・ 5	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 40	
4	・ 4	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 41	
3	・ 3	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 42	
2	・ 2	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 43	
1	・ 1	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 44	
0	・ 0	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 45	
9	・ 9	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 46	
8	・ 8	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 47	
7	・ 7	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 48	
6	・ 6	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 49	
5	・ 5	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 50	
4	・ 4	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 51	
3	・ 3	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 52	
2	・ 2	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 53	
1	・ 1	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 54	
0	・ 0	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 55	
9	・ 9	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 56	
8	・ 8	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 57	
7	・ 7	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 58	
6	・ 6	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 59	
5	・ 5	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 60	
4	・ 4	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 61	
3	・ 3	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 62	
2	・ 2	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 63	
1	・ 1	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 64	
0	・ 0	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 65	
9	・ 9	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 66	
8	・ 8	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 67	
7	・ 7	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 68	
6	・ 6	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 69	
5	・ 5	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 70	
4	・ 4	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 71	
3	・ 3	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 72	
2	・ 2	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 73	
1	・ 1	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 74	
0	・ 0	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 75	
9	・ 9	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 76	
8	・ 8	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 77	
7	・ 7	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 78	
6	・ 6	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 79	
5	・ 5	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 80	
4	・ 4	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 81	
3	・ 3	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 82	
2	・ 2	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 83	
1	・ 1	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 84	
0	・ 0	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 85	
9	・ 9	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 86	
8	・ 8	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 87	
7	・ 7	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 88	
6	・ 6	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 89	
5	・ 5	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 90	
4	・ 4	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 91	
3	・ 3	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 92	
2	・ 2	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 93	
1	・ 1	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 94	
0	・ 0	谷崎『美男』（新潮）発禁。	・ 95	
9	・ 9	※モデルは鈴川こと茂木（谷崎『上山草人のこと』）【恐らく、茂木はこれ以前に 死亡していたのであろう】。	・ 96	
8	・ 8	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 97	
7	・ 7	この朝から、孔雀が芸術倶楽部で稽古に参加（東京日日新聞）9月7日）。	・ 98	
6	・ 6	「東京日日新聞」に「須磨子と孔雀の握手」として、26日から帝劇の芸術座『ア ンナ・カレーニナ』『爆発』に衣川孔雀が参加と出る。孔雀の談話として、「今回 はただ加入しただけですが、次回からは芸術座の人になることになりましたよ」 とある。	・ 99	
5	・ 5	※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、鈴川は、癩【皮膚の毛嚢が化膿する 病氣】に似た奇病で早死にした。	・ 100	

と草人・孔雀とその母が、孔雀の後援をしている某夫人宅で話し合っ
た。孔雀は次回から芸術座に加入する。

衣川孔雀が鷗外を訪ねる。孔雀を与謝野晶子に紹介する（『鷗外日記』）。

帝国劇場で芸術座第7回公演として中村吉蔵作『爆発』とトルストイ作松居松葉
脚色『アンナ・カレーニナ』を上演。衣川孔雀は『爆発』の娘・近子と『アンナ
・カレーニナ』のキティ。沢田正二郎も出演（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。

（10・6・7）「時事新報」に秋田雨雀の「須磨子と孔雀の顔合せ」（上・中・下）
掲載。「孔雀は日本の新しい芝居の生んだ唯一人の女、男女優を通じてたった一
人の天才形の俳優」と評している。

芸術座が第二回新劇普及興行として、浅草常盤座でシユミット・ボン作『樽仙人
（ディオゲネス）の誘惑』（衣川孔雀出演）・中村吉蔵作『飯・同』『新婦朝者』
（衣川孔雀出演）・ワイルド作『サロメ』を上演。沢田正二郎も出演（田中栄三
『明治大正新劇史資料』）【恐らく草人が企画したものであろう】。

「大阪時事新報」に「孔雀と草人」（上）。大阪中座の芸術座初日幕間に、緞帳を
上げて、舞台上の須磨子に草人からの、孔雀には浦路からの花環が贈られ、披露
された。浦路はリョーマチスで脚が伸びた仮で曲がらず、病蔭に悩んでいる。草
人は根岸興行部の相談役でかなり得意の地位にいる。かかしやの店は繁盛。

「大阪時事新報」に「孔雀と草人」（下）。孔雀は23歳。草人は粗豪のようで一面
脆い涙弱い神経質な所がある。その恋は一途・命懸けで、相手を情炎に焼き尽く
さねば承知しない。この春、孔雀の父は死去。草人は男らしく孔雀と別れ、孔雀
が結婚する時には媒酌人になろうと言っている。しかし、近代劇協会のスターと
しての孔雀を手放す気はない。従って、芸術座に孔雀を貸すにはいろいろ条件を
付けた。番付に「近代劇協会女優」と書かせたのもその一つ。東京興行の際、草
人は須磨子・孔雀会という見連を作って、浦路から孔雀へ、草人から須磨子へ、
二つの花輪を贈った。しかし、東京では、須磨子が先ず一人で受け取った後、一
度帳を下ろしてから、孔雀が出て受け取った。そこで草人は、大阪では須磨子と
孔雀が並んで花輪を受け取る事を条件とした。これも近代劇協会と孔雀の名を重
んずるためである。なお、同紙「芸界」欄によれば、中座の芸術座は、六日限り
で打ち上げる筈。

芸術座は神戸で公演を行ったか？（草人『神近市子さんへ』から推定）
午前2時過ぎ神近市子が大杉栄を襲った日蔭茶屋事件が起こる。

芸術座は神戸で公演を行ったか？（草人『神近市子さんへ』から推定）
午前2時過ぎ神近市子が大杉栄を襲った日蔭茶屋事件が起こる。

※草人の「神近市子さんへ」によれば、この前日、草人は、神戸に彼女「衣川孔雀」を訪ね、事件が起こった時間は、悩ましい体を、その夜初めて鉄道院が施設した三等列車付き二等寝台に載せて、東京へ帰る車中だった。帰宅後、草人は神戸の女を気遣ひ、「セツニセツニハンセイライノル ヘンマツ」と電報を打つて、二昼夜夜具の上に座っていた。その夜具の上で、日蔭茶屋事件を知り、思想上、大きな刺激を受けた。

※日蔭茶屋事件以降、『神近市子さんへ』執筆（T6／5?6?）以前に、大杉栄は一度、草人を浅草諏訪町の家に訪ねた（『神近市子さんへ』）。

朝、「ゴシンバイヲカケテスママ キラツケル アンシンセヨ」という返電が届いた（草人）（神近市子さんへ）

「時事新報」「昼の目夜の目」によれば、草人は根岸興行部の顧問で納まり返っている。浦路は半年以上も病気で気の毒な有様。

「都新聞」に、暫く他の経営に委ねていた赤坂演伎座が根岸興行部直営に戻り、大刷新を断行するという挨拶文が出る。

※この時から根岸哲が演技座の経営に当たった（曽田秀彦『私がカルメン マダム徳子の浅草オペラ』）。

赤坂演技座で佐藤紅緑作新派劇『裾野』（衣川孔雀・諸口十九出演）伊庭孝作舞踊劇『古塔物語』（伊庭・高木徳子出演）松居松葉作新劇『富士の裾野』（衣川孔雀・諸口十九出演）

雀・諸口十九出演。（増井敏二「日本のオペラ」。田中栄三『明治大正新劇史資料』は、「樗野」と「古塔物語」の配役が入れ違っていたので訂正した。）

※この公演は、伊庭・高木コンビが川上貞奴一座に招かれて十月に行なった甲府・信州巡業に続くもので、浅草オペラに繋がる二人の歌舞劇が東京で公開された

最初のものである。『古塔物語』は、大正六年が巳年であることに引つ掛けて徳子の得意とするスネーク・ダンスを売り物に、美女が蛇に化身するインドの伝

※「古塔物語」の内容は、大いに当たった（増井敬二『日本のオペラ』）。説を構成したもので、曾田秀彦『私がカルメン』に詳しい。

※根岸哲はオペラに期待していたらしく、ローシーと契約し、赤坂演伎座でオペラを上演できるように、オーケストラ・ボックスを作るなど改装工事を始め

た所、舅の小泉井治に反対されて断念した事があった（伝記『根岸寛二』）。ただし、これを大正七年ローヤル館閉鎖の際としているのは誤りで、根岸哲は大正六

年に死亡している。「都新聞」T5・1・4に「ローシーが演技座でオペラの旗揚げをする」という記事があり、大正四年十二月、帝劇洋劇部の解散が確定的に

なつた際のことであろう。なお、伊庭・高木の『古塔物語』を上演したのは、根岸哲のオペラ志向に加えて、草人と伊庭の繋がりのあったのではないか。

・ 31 芸術座が第三回新劇普及興行として、浅草常盤座でマイヤーフェルスター作『思ひ出（アルト・ハイデルベルヒ）』と中村吉蔵作『剃刀』。沢田正二郎も出演（田中栄三『明治大正新劇史資料』）【恐らく草人が企画したものであろう】。

・ T 6 ・

1 ・ 11

◆大正六年◆ (1917) 三十四歳

谷崎は演伎座の楽屋で草人・衣川孔雀と鳥鍋をつつく（谷崎『晩春日記』）。

佐藤春夫の『都會の憂鬱』を信じるなら、春夫はこの頃、現・千代田区富士見町の幽霊塚の家に、川路歌子と住み始めた。春夫の『詩文半世紀』によれば、この時、歌子は草人が今度組織する一座に加わるつもりで、家賃ぐらいいは自分が稼ぐと言った。

※草人『谷崎潤一郎との四十年』によれば、草人は、谷崎と親しくなる以前、こは記憶違いであろう」、近代劇協会の川路歌子からの紹介で、佐藤春夫を知っていた。脚本も書くが、舞台背景の手伝いをさせて欲しいと言うので、実際にやってみて貰ったことがあった【当時、春夫の妻だった歌子が、草人一座に加入した事と、舞台背景の手伝いを春夫にさせて欲しいと頼んだことは、春夫の『都會の憂鬱』と一致する。ただし、田中栄三『明治大正新劇史資料』の配役表に、川路歌子の名前が出る例はない。春夫が背景を手伝った事例は、春夫の父・豊太郎宛7・9・1付け書簡に出るが、これは友人としてのもので、金のためではなない】。

芸術座が第三回新劇普及興行の二の替わりとして、浅草盤座で中村吉蔵作『爆発』と同『お葉』上演。沢田正二郎も出演（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。恐らく草人が企画したものであろう。

赤坂演技座で新劇新派合同興行。柳川春葉作「二人静」(新派の武田正憲・諸口十九・宇田省三・村田栄子らに衣川孔雀が加入)・「女の力」(高木徳子・伊庭孝

・田辺若男・沢モリノ・一堺漁人作「十六形」(武田・宇田・村田ら上演)
 (『都新聞』・田中榮三『明治大正新劇史資料』)。

※『女の力』は伊庭孝の新作歌舞劇で、徳子のトウダンスが看板。沢モリノも出演（増井敬二『日本のオペラ』）。

※『女の力』の内容は、曾田秀彦『私がカルメン』に詳しい。

※『劇壇秘話』によれば、この演技座の正月興行については、根岸興行部から、

新之助一派の旧劇と高木徳子のトウダンスだけでは賑やかさが足りないから、草人と孔雀で新劇を出すよう要請があり、沢田正二郎に諒解を求めた所、意外にも強硬に反対されたため、やむを得ず、孔雀・沢田と共に小泉宅を訪れ、草人抜きで孔雀だけが出演するということで決着した。

・22
『都新聞』(三) 面によれば、演伎座は佐藤紅緑作新派劇『浮雲』。衣川孔雀・武田正憲・諸口十九・宇田省三・村田栄子ら出演。

・22 浅草常盤座で佐藤藤三らの新派劇『不如帰』と共に、伊庭孝・高木徳子が「女軍出征」を初演。未曾有の大当たりとなり、浅草オペラ黄金時代の先駆けとなった。

29 (増井敬二「日本のオペラ」)【草人が企画したか、仲介した可能性が高い】。

※『女軍出征』の内容は、曾田秀彦『私がカルメン』に詳しい。

※谷崎潤一郎の『痴人の愛』（八）に、讓治が金龍館で『女軍出征』を見たという記述がある。恐らく谷崎はこの時に見たのだが、常盤座は金龍館・東京倶楽部と入場券を三館共通にしていたため勘違いしたのであろう。

・30
演伎座では、この日から新派劇「柿番小屋」を衣川孔雀・武田正憲・諸口十九・宇田省三・村田栄子・中山歌子で上演（都新聞）31日）。

浅草常盤座で佐藤蔵三らの新派劇『金色夜叉』と共に、伊庭孝・高木徳子が『古塔物語』を『古塔譚』と改題再演（増井敬二『日本のオペラ』）。

2・3 浦路は昨年来の病気が悪化し、楽山堂病院に入院（2・22「東京日日新聞」）。

「萬朝報」に、これの日から演技座で佐藤紅緑作新派悲劇「日の出る国」上演。出演は衣川孔雀・武田正憲・諸口十九・宇田省三・稲富・村田栄子・中山歌子・川路歌子。また、旧劇「夜討曾我」大切「弁天小僧」を、市川新之助・新十郎・高麗之助・小次郎ほか市村座・帝劇付き若手俳優で上演。

※川路歌子が上山草人一座に加入していたことは、これで確かめられる。

※武田正憲『諸国女はなし』によると、赤坂溜池の演技座で新田合同劇で居た時、川路歌子は新十郎の弟子の新四郎という下回りに関係して、茶屋でも大っぱらにいちやつしていた。客も大分取つたらしい。のち、新派に入り、震災後には赤坂で待合を経営していた。

・ 9 浅草常盤座で佐藤蔵三らの新派劇『椿姫』と共に、伊庭孝・高木徳子は『さすらいの娘』を上演（増井敬二『日本のオペラ』）。

※『さすらいの娘』の内容は、曾田秀彦『私がカルメン』に詳しい。

の所へ巢鴨の実家から伯父と弟が来て、一旦帰ってくれと勧めた為、反対する草

人と孔雀の間で口論になり、終演後、孔雀は飛び出した（2・22「東京日日新聞」記事中の草人の談話）。

19 「読売新聞」によれば、演技座は歌舞伎「碁盤忠信」らと高木徳子の「死に面して」などで、衣川孔雀の出演はない。

19 浅草常盤座新派劇『生さぬ仲』に演伎座より諸口十九・村田栄子らが加わる。
（『東京朝日新聞』）。

※2月19日「都新聞」3面記事によれば、佐藤歳三らの新派と諸口らの新劇団が、一回ごとにかわるがわる演じて、その違いを見て貰うという趣向。

※草人『新劇壇思出話』によれば、水野好美を座長とする常盤座の新派の中に、諸口十九・村田榮子らを引き込んで、新派新劇の同成団を始め、その際、草人の発案で、浦路・孔雀・汐路・京子らの名で「公園の羽左さんへ」と染め出した引き幕を送った。

・19
草人は孔雀を或る学友の家で発見、駒形の自宅（浅草諏訪町十二）に連れ帰った。夜11時頃、孔雀はお湯へ行くと行って家を出、姿を隠した（2・22「東京日日新聞」記事中の草人の談話）。

※田中栄三「新劇その昔」によれば、麹町三年町二番地にあつた佐藤別宅（当時アパート）は東京中で此処と上野倶楽部と二軒しかなかった。の田中の部屋に草人が血相を変えて飛び込んで来て、「孔雀はどこか教えろ」と言った。

※田中榮三『女優漫談』によれば、孔雀は青山の安田という知人の家に長らく身を潜めていた事が後で分かった。

草人宅に、神田の消印で、20日付けの衣川孔雀の手紙が届く（2・22「東京日新聞」記事中に引用）。

「東京日日新聞」に孔雀の家出が記事になる。記事中の草人の談話には、「孔雀も浦路とも性的関係を絶ち、孔雀とは昔の師弟ないし友人に立ち返る。孔雀が他の男と結婚しようとも、孔雀が帰ってくれさえすれば、喜んで賛成する」とある【近代劇協会の女優としても、愛人としても、手放したくないというのが本音であらう】。

※武田正憲「諸国女はなし」は、孔雀がこの頃、柳永二郎と関係を生じていたとする【が、時期は、もつと前か？ 柳は近代劇協会の『ハンネレの昇天』（T3）『サロメ』（T4）に、永井武の本名で出演した事がある】。

※佐藤春夫の『都会の憂鬱』を信じるならば、草人は、この年1月か2月に春夫が楽屋を訪ねた際、陰悪な態度を示し、それは、川路歌子の説明によれば、孔雀

2月頃	3末か 4初め	午前十時半頃、佐藤春夫は、上野の山下で、既に一面識のあった草人と連れ立って歩いている谷崎を見掛けた。谷崎はモーニングを着て、二十三から五ぐらいに 見た（S5／6改造社版『谷崎潤一郎全集』月報2佐藤春夫「潤一郎と僕 （二）最初の訪問」）【実際は数えて三十二】。
4？	4？	佐藤春夫は東照宮下のアパート上野クラブに住む（『佐藤春夫全集』年譜）。
4・6	4・6	※『都会の憂鬱』に描かれている下宿であろう。川路歌子とは、このまま6月に離婚する。
・18	・18	草人は、生涯の記録の第一稿四五〇枚を書き上げる（草稿「巻後に」断片）。
・22	・22	新富座で沢田正二郎が新国劇を旗揚げ。しかし、非常な不入り。
・19	・19	「国民新聞」「うきよ草紙」によれば、数日前、沢田正二郎・渡瀬淳子夫妻の所へ草人が遊びに行っている所へ衣川孔雀が遊びに来た為、大喧嘩が始まった。
中旬	中旬	谷崎は、千代子連れて向島に花見に行った帰りに、駒形の草人を訪ね、鰻を御馳走になる。丁度、浦路も楽山堂病院を二三日前に退院していた。草人は暇潰しに創作を始め、浦路に筆記させていると言っていた（谷崎「蛇酒に序す」）。
・28	・28	谷崎「晩春日記」（ただし4・30と誤る）（土）雨。帝劇で衣川孔雀と会う。飼主【寺本定芳？】と先日赤坂へ、この間は鶴見の花香園へ行ったと言う。
3・7		※（時期不明）谷崎と草人が向島撮影所を訪ねる（『活動画報』T6／8（6月2日印刷納本）「話のたね」）。
・8		※『日本映画史大鑑』（文化出版局）によれば、この年四月から、田中栄三が日活向島撮影所に入社、小口忠監督の助手になった関係か？
？		※谷崎「活動写真の現在と将来」（T6／9）にも言及あり。
・14	5・14 初夏	谷崎潤一郎の母セキ死去。享年五十四。
・23	6・7 中旬	草人は銀座で衣川孔雀を見かけたが、一二度振り返ってみただけで、もはや感情を動かされなくなっていた（草人「神近市子さんへ」）。
以降		衣川孔雀は夫（寺本定芳）と琴平町【現・港区虎ノ門二丁目】に住む（衣川孔雀「由井ヶ浜より」）。
下旬	6	「里潮」に佐藤春夫の「病める薔薇」掲載。草人と谷崎は、これを読んで感心していたので、佐藤春夫が訪ねてくると、急速に親しくなった。草人の方が先に佐藤春夫を知っていて、谷崎と引き合せた（上山草人「お世話になるばかり（下）」S5／7改造社版『谷崎潤一郎全集』月報3）。
	6	谷崎は、草人から持ち込まれた自叙伝『蛇酒』の原稿約七百枚を通読し、これは
	6	浅草の小屋に出た。

上旬

新劇運動の側面史ともなるし、芸術的にも、不満な点は多々あるが、往々ずば抜けた箇所もある、と感じた。そこで、草人から毎日のように催促されつつ、二三の新聞社へ持ち廻った末、遂に阿蘭陀書房の落合（太郎）が出版を承諾してくれた（谷崎『蛇酒に序す』）。

（または五月の二十八九日頃）の雨の日に、芥川龍之介『羅生門』出版記念会の発起人に谷崎を加えるために、江口渙に同行したのが、佐藤春夫が谷崎に会った最初（S5/6改造社版『谷崎潤一郎全集』月報2佐藤春夫「潤一郎と僕（二）最初の訪問」）。

※「群像」S40/10伊藤整・沢田卓爾の対談『荷風・潤一郎・春夫』によれば、佐藤春夫を初めて谷崎に引き合わせたのは武林無想庵。当時の谷崎家には、岸某『茂木良平と谷崎の友人・岸巖を混同したか？』という後に俳優になった男とかせい子も居た。沢田卓爾・上山草人も来た。

谷崎は妻の千代子と娘の鮎子を父倉五郎、弟精二・終平の住む蛸殻町1丁目2番地のヤマジユウ商店の店に預ける。これは、千代子の妹せい子を愛人として暮らすためだった。

※谷崎の「更紗」（T6/7『夏日小品』）によれば、妻子を日本橋の父の許に預け、小石川の家を一箇のビュローとしたに就いて、室内を洋風に改むるのに、更紗の帷が欲しくなった。折良く遊びに来た草人がジャワ更紗の角帯を締めていた。銀座資生堂化粧品部でジャワ更紗を買い、応接間の花壇に面する硝子戸の前に掛けた。

・17

神近市子に対して、懲役二年の判決が下る。
※恐らくこれ以前、初夏に衣川孔雀と銀座で出会って以降に、草人は「神近市子さんへ」を書いたと推定される。

・21

草人が沢田正二郎に対して、衣川孔雀の新国劇への参加は認めない旨の手紙を送る（松本克平『日本新劇史』に写真掲載・演劇博物館所蔵）「差出人住所は日蔭町のかかしやになっている。孔雀と別れて間もなく、戻ったのであろう」。

※これ以前、新富座での旗揚げ公演に失敗した沢田は、6月25日からの京都南座公演で再起を図る事になったが、南座側から松井須磨子・衣川孔雀クラスの女優を加える事を条件とされたため、急遽、孔雀と下山京子に出演を要請。孔雀については、寺木が沢田の友人だった関係で、今回限りという条件で了承を得たが、草人が横槍を入れた（松本克平『日本新劇史』）。

※6・28「東京日日新聞」記事によれば、孔雀は断ったが、沢田は既に孔雀が一

・22

座するという条件で松竹から五百円を借りていた為、沢田からのたつての頼みに孔雀も折れた。

※沢田正二郎「三千六百五十日」によれば、21日夜、沢田ら新国劇の団員は、東京駅から京都に向かう。しかし、一足後から来る筈だった孔雀から、参加不能の断り状が来る。その為、南座は契約取消を主張。困った沢田は、單身帰京し、孔雀と夫・寺木氏を訪ね、遮二無二三人を京都に連れて来た。

夜、孔雀は京阪興行の旅に出発。しかし草人が後を追って来て、芝居をやらせぬと騒ぎ立てた（6・28「東京日日新聞」記事）。

※田中栄三『女優漫談』によれば、草人・浦路が先回りして京都駅で沢田と孔雀を待ち構えていたが、駅で契約書の話で草人から聞かされた仲木貞一が、こっそり電車で大津まで出迎え、沢田と孔雀に訳を話して密かに電車で京都の宿へ連れて来た。待ちぼうけを喰った草人は、その夜、仲木・沢田を訪ね、三条大橋の上で草人が短刀を振り回したが、夜更けには、浦路の出演参加ということで、円満に解決できたとする。

※沢田正二郎「三千六百五十日」によれば、草人もすぐに孔雀の後を追って京都に来ると、新国劇一座に対して強硬な談判を始めた。沢田と倉橋仙太郎は、死ぬ覚悟で闘う決意をして、短刀を二本買い込み、夜十時過ぎに、草人と会見した。

沢田正二郎「苦闘の跡」によれば、最初、ピストルを買おうとしたが売って貰えなかったので短刀にした。そして、草人夫妻が陣取っていた木屋町の木屋旅館に向いて話し合った。

※草人の『劇壇秘話』によれば、沢田正二郎は倉橋と短刀を二本買い込み、死ぬ覚悟で闘う決意をした、と後で倉橋から聞いた。が、短刀で脅されるようなことはなく、草人の要求した謝罪状を書くこと、浦路も出演させること、出演料は要らないが、草人と浦路の旅費宿泊費一切を負担すること、という条件を沢田正二郎が受け容れた。

※「読売新聞」T8・3・6の「一日一信」（署名はN）【仲木貞一か？】によれば、無断で孔雀を連れて行ったというので、草人が凄姿で啖呵を切りに来た。附近の木村屋へ漸く草人を拉し、徹宵議論を闘わせた後、草人はNと一つ布団に寝ながら、孔雀への未練を語った【松本克平『日本新劇史』では、京都で談判したとする沢田の回想を嘘ないしは代筆とし、「劇壇秘話」の記述から、東京で穏やかに話し合ったとするが、前引「東京日日」記事や「読売」「一日一信」などから、談判は京都で行われたと見る方が良いだろう】。

25	京都南座で沢田正二郎らの新国劇が、仲木貞一作『飛行曲』岡本綺堂作『新朝顔日記』松居松葉作『寝台列車』を上演(田中栄三『明治大正新劇史資料』)。 ※『劇壇秘話』によれば、事情を聞いた仲木貞一は、浦路のために、『飛行曲』に洋装の美人の役を書き加えた。この時、無名の下回りだった戸山英二郎(後の藤原義江)が、足の悪い浦路が楽屋の裏梯子を上下するのを助けた。この公演も全くの不入りに終わったが、沢田は、旅費滞在費百数十円を約束通り支払った。 ※衣川孔雀はこれを最後に劇界を去った。	28	「東京日日新聞」に記事「孔雀と草人が京都で畦み合ふ」。	28	谷崎は昼前に芥川龍之介を訪問。赤いチョッキに黒の背広姿。絵や小説の話をしてながら昼食を共にし、お八つを食べ、六時間ほど居て帰った。(芥川龍之介の十月三十日付け文宛書簡)。 ※今東光「変化に富んだ表情」(『新潮』T13/2)によれば、この赤いチョッキは、上山草人に贈られたものらしい。 衣川孔雀は夫(寺木定芳)と鎌倉に移転(衣川孔雀『由井ヶ浜より』)。 ※寺木定芳著『人、泉鏡花』に寄せた里見弾の序文「私の知る限りの寺木定芳君」によれば、寺木定芳は、関東大震災の際には、子供を二人亡くし、家財道具も焼かれたと言う。同書には久保田万太郎・三宅正太郎も序文を寄せている。 ※川口松太郎「遠い日」(『オール読物』S42/2)によれば、寺木定芳の家は鎌倉駅の裏にあり、大正末期から昭和初期にかけては、鎌倉文士の倶楽部のようになっていて、毎晩のように、佐々木茂索・川口松太郎らが麻雀に集まっていたと言う。	8・11	「よみうり抄」によれば、谷崎夫妻は草人夫妻と近日四万温泉に避暑に行く。 佐藤春夫は、無名の女優米谷香代子(当時二十歳)と同棲(『佐藤春夫全集』年譜)。 ※『佐藤春夫全集』では、米谷香代子は芸名小笹文子という無名女優とする。 ※武田正憲『諸国女ばなし』によると、草人門下の笹川不美子は佐藤春夫の二度目の妻になった。しかし、不美子は金竜館の五九郎一座の扇蝶という役者と浮気をしていた【田中栄三『明治大正新劇史資料』の近代劇協会の役割表には、小笹文子・笹川不美子などの名前はない】。	9	※『月刊東京』T15/9によれば、佐藤春夫は、大正七年二月九日、新宮で笹川ふみ子と再婚。ふみ子は川路歌子の妹分の女優。衣川孔雀の弟子とも言う。 ※大正九年九月、横光利一は、下宿屋・初音館に移った。中山義秀『台上の月』	10	
22	によれば、そこへ、無名の利一の原稿を時折買ってくれていた或る広告誌「サシエス」?の編集者「藤森淳三」?が、佐藤春夫の妻・米谷香代子と連れ、泊まりに来る。利一は、一つしかない夜具を二人に提供し、その傍らに臥せりながら、二人の営みを聞かねばならないという拷問のような体験を、作品を載せて貰った恩義ゆえに堪え忍んだ。この体験は、利一が男女の愛に対する過度の懷疑に悩まされる一因だったかも知れない ※大正九年十月、中国旅行から帰った佐藤春夫は、米谷香代子と別れた(『佐藤春夫全集』年譜)。	28	村田実の踏路社第四回私演として、牛込芸術倶楽部でヴェーデキント作野上白川訳『春のめざめ』を上演。芝居がかった所が少しもないリアリズムの演技で、これを見た草人は、「新劇の演技はこう行くべきだ」としみじみ感嘆していた(田中栄三『新劇その昔』)。 「時事新報」文芸消息欄によれば、草人の『蛇酒』阿蘭陀書房から近刊。 根岸哲が脊椎カリエスで病没。29歳。哲は高田保に優れた劇作家になれる素質があると妻むめに語っていた。むめは、後に高田保の内縁の妻となり、高田を世に出すために力を尽くした(榎原勝『高田保伝』)【以後、草人は根岸興行部と疎遠になったようである】。 ※武田正憲『諸国女ばなし』によると、草人は、脊椎病で病床にあった根岸哲の顧問兼花札の相手をしていた。 東京を中心に東日本に大暴風雨。死者行方不明1300人。昭和13年9月3日谷崎書簡に言及あり。谷崎の記憶する東京に於ける最大の大風。 ※丁度、『蛇酒』出版で八十円を手にした草人と谷崎・佐藤春夫で、翌10月2日に近郊の風害視察に出掛け、方々ぶらつき、大森の砂風呂に泊った。砂風呂は当時の新車の売春宿だったが、草人も谷崎も春夫も、売春婦などに近付いたことは一度もなく、この時も宿の勧めを断って、女は入れなかった。ここで佐藤春夫が語り出した長篇小説のプロットに、谷崎も草人もすっかり魅了された。佐藤春夫は夕方になり、夜になり、床に入り、翌朝になっても語り続けた。それが『田園の憂鬱』になった(上山草人「お世話になるばかり(下)」、佐藤春夫『アントニオのやうなセンチメンタリズムから生れた「田園の憂鬱」』「うぬぼれかがみ」、上山草人『谷崎潤一郎との四十年』)。	30	草人著『蛇酒』の序文「蛇酒に序す」を谷崎が執筆。11月刊行。 ※谷崎「蛇酒に序す」の原稿(松屋製二百字詰め・ペン書き)と、それを草人が	30					

4・12	谷崎は、草人の芝居のことで佐藤春夫と共に、久米正雄を訪ねる。助力を約束して貰う(久米正雄『大凶日記』T7/5「新潮」)。
・19	『都新聞』によれば、松竹が上山草人・山川浦路・諸口十九・村田栄子・日疋重亮ほか五十名に松竹専属劇団を組織させ、第一回興行を行う予定で、松岡実三が有楽座と契約した所、大谷竹次郎らは、有楽座では金は出せぬと言ひ、松岡を袋叩きにしたため、松岡が大谷を告訴したと言ふ。
5?	佐藤春夫の『あのころの私と交友』によれば、春夫が脱稿した『李太白』の原稿を持って谷崎宅を訪ねると、谷崎はちょうど草人の所へ出かける所だったので、一緒にいかしやへ行き、そこで谷崎が読んで直した。
5	近代劇協会の研究生だった明石潮や溝口末之助らの希望により、渋谷の坂の上にあった渋谷劇場で『ヴェニスの商人』をやった。その後、『虞美人草』をやることになり、草人と生田長江が脚色に当たり、三村も手伝ったが、夏目家から断られた(戸板康二編『対談日本新劇史』の三村伸太郎の証言による)。
・1	※伊沢蘭奢『素裸な自画像』『蘭奢フロニカ』では、早稲田劇場、蘭奢は初舞台で、伊沢晩生の名でボーシヤを演じた。
・3	「時事新報」文芸消息によれば、草人は生田長江の推薦により『煉獄』を「中外」6月号から三ヶ月間連載する。
・19	「時事新報」文芸消息によれば、谷崎は14日まで、芝日蔭町一ノ一上山草人方に逗留、『金と銀』執筆中。
・23	上山草人より長電。《急に有楽座より話あり来る六月一日より十日間『虞美人草』にて明ける事となりし由、右につき、久米正雄にもいろ／＼御尽力願度、小生よりも頼んでくれとのこと》(中谷元宣「谷崎潤一郎未発表書簡(久米正雄宛一通)紹介」『国文学』H12/11/30)
	「時事新報」記事によれば、近代劇協会が夏目漱石の『虞美人草』を上演。谷崎が伊香保で5幕8場に脚色中。
	※結局、夏目未亡人の反対で実現せず(6/15「週」)。
	※草人「お世話になるばかり(下)」によれば、谷崎が、森田草平・鈴木三重吉・小宮豊隆・松岡譲と交渉し、夏目漱石未亡人を動かして承諾を得、舞台稽古も大体終って、いざ上演しようという間際になって、突然、夏目家から上演不承諾の通告が来たので、谷崎は激怒したが、佐藤春夫が宥めた。上山草人「谷崎潤一

6	郎との四十年」にも出る。
・3	「中外」に、生田長江の「煉獄」を推奨す」と谷崎潤一郎の「煉獄」に序す」を付して草人の「煉獄」が掲載される。谷崎は「煉獄」に序す」で、「煉獄」は前著「蛇酒」と同時に脱稿されたもので、今回「蛇酒」と合わせて一著となしたものの。素人くさい欠点はあるが、草人の筆力はまことに驚嘆に値する。規模雄大なるオーケストラを勢揃せしむる同君の傑作を江湖に薦める」と述べている。
・4	生田長江は、「蛇酒」「煉獄」が、自然主義小説の尋常茶飯事を超脱し、また人道主義作家の屢々陥る狭小なる道德的先人見にも囚われていない、と評価している。
・5	「ヴェニスの商人」初日の二日前の夜、谷崎は草人と会った。その際、谷崎に褒められてすっかり興奮した草人は、悪友たちと「有島武郎何のその」という軍歌を歌って徹夜で飲んだ(犬養健「女優」)【有島武郎が前年来、新潮社から『著作集』を出し始め、俄に人気作家になったことに対して、有島などには負けないという意味であろう】。
・14	近代劇協会第十一回興行。有楽座でシェークスピア作生田長江訳「ヴェニスの商人」とストリンドベルヒ作小山内薫訳「犠牲」を上演(田中栄三「明治大正新劇史資料」)。
	※配役は、シャイロックが上山草人、アントニオが特別参加の加藤精一、パッサーニオが森栄治郎、ボーシヤが山川浦路。この時、ジェシカ役と「犠牲」のテレザ役で上山珊瑚、ネリッサ役で伊沢蘭奢がデビュー。
	※戸板康二編『対談日本新劇史』三村伸太郎の巻によれば、この公演の時、谷崎と佐藤春夫は毎日日蔭町のかかしやに来て、草人の相談相手になっていた。明石潮は谷崎が最初「潮風」と付けたのを久米正雄が「潮」に変えた。伊沢蘭奢を蘭奢、上山小枝子を珊瑚に変えたのも久米。草人は舞台で夢中になる余り、セリフを忘れて、相手役「お前言え、それから何だ？」と聞いたり、幕が閉まるとプロンプターをひっぱたいて、「もつと聞こえるように言え！」と怒鳴ったりした。そして、後で「怒るな、俺が悪かった」とケロッとしていた。草人は何から何まで自分で決める独裁者だった。よく喧嘩する人だった。興行師としては度胸の据わった人。詩人で文章もうまいし絵も描くし、離れて見ると魅力があり、尋常の人物でないことはよく分かった。荒削りで、不調和な大きさを持っていた。

六月の公演の前に、三村・明石・溝口・蘭奢は草人に呼ばれ、今後十年間近代劇協会の許可なく他の劇壇に出演しないなどの公正証書を出された。三村は、有楽座の時、芝居がはねると宿屋で『煉獄』の筆記をさせられた。初めは小沢得二がやっていた。草人は猛獣が吠えるような調子で口述し、興が乗ると夜通し続けた。草人は伊庭の才能を非常に買っていた。草人は公演に先立って、俳優達に自分の役の解釈を原稿用紙十枚ぐらい提出させ、その上でレクチャアした。草人以外にも、高浜（正香）・生田長江・秋田雨雀・久米正雄らが意見を言った。

※谷崎は『上山草人のこと』で、草人のシャイロックが巧いのに驚いたと回想。しかし客は不入りだったと言う。また、この興行の金は、珊瑚をひどく可愛がっていた瀧田樗陰や、伊沢蘭奢の後援者である「中外」の内藤が出したのかも知れないと言う。

※座談会「山城少掾を開んで」（S22／6「観照」）で谷崎は、「証文を破くところて笑うのが大変良かったので褒めたら、翌日はもう笑えなかった」と回想している。

※伊沢蘭奢の恋人・徳川夢声の自伝でも、草人のシャイロックはなかなかの絶品で、東北なまりがいかにユダヤ人らしく聞こえたとする。

※伊沢蘭奢「私から私への花輪」（T15／12「女性」）によれば、この時、蘭奢には花輪を送ってくれる人が居なかったたので、衣類を売ったお金で、自分宛に偽名を使って花輪を送った。都下の新聞は筆を揃えて、上山珊瑚・伊沢蘭奢の初舞台を段抜きで誉め立てた。

※谷崎の『酢豆腐の一件』（伊沢蘭奢『素裸な自画像』所収）に、谷崎が「かかしや」に泊まっていた、蘭奢と珊瑚が、『酢豆腐』という言葉をめぐって議論するのを聞いたエピソードが紹介されている。また、草人は、伊沢蘭奢に期待し、最初から上山珊瑚同等に扱っていた事も記されている。伊沢蘭奢の『或時の印象』（『不同調』T15／9）に、四五年前の事として、神田の維新号で会食した際、谷崎が自分の好物の料理に唾を吐き入れて独り占めにした事が紹介されているが、『酢豆腐の一件』によれば、草人渡米以後は、伊沢蘭奢とは疎遠になったという事であるから、この会食も大正八年二月以前の事であろう。

※初日の日、楽屋を犬養健が訪問、『女優』に書いている。珊瑚は丸顔で、見るからに快活で、悪戯気の溢れた、疲労なぞ知りそうにもない、健康な若々しい娘だった。この日、たまたま谷崎も楽屋を訪れたらしく、犬養はその印象を、『縮れた頭髪を無雑作に伸ばした、額の大きい、眼のざろりと動く、風采からして一

見芸術家とわかる、豪放な物腰の紳士」《太い煙管を銜へ》た《悪魔主義作家》と描写している。「喜ぶです」「茶化すです」「観るです」という草人の口癖と、それを真似て喋る谷崎の姿も写されている。草人は谷崎に向かって、ヨーロッパの劇評家の説を引いて、『ヴェニス商人』の主人公はヴェニスの町人気質だと説いていた。草人は健に、「日本にはまだ新劇の観客層が出来ていないので、金に追われて田舎廻りが多くなる。図太く悪辣に構えないと、この社会では生存が難しい。私など借り倒しで生きている。算盤の合わない土地では夜逃げまでやっ

た」と話した。小学生という草人の長女『袖子』と浦路の母『小松』も楽屋に来ていた。健は翌日も見に来て、二日とも満員に近い入りだったとする。二日目に、浦路は珊瑚を「悪気もないし、擦れてもいいけれど、跳ね上がりよ」と評した。

※川端康成は学生時代（T6／3以降か？）、有楽座などで草人の新劇を何度か見物したと『上山草人』で述べている。

※古海卓二「悪縁だね!!」（S2／2・12「サンデー毎日」）によれば、この頃、古海がよく遊びに来た。天野桃光『ヴェニス商人』ではロースロット役が『ヴェニス商人』の先乗りと称して神戸・岡山・広島と手金を取って歩いたので、草人が驚いて後を追って広島まで来た時に古海は会ったが、その時、既に草人はアメリカに行くつもりだと言っていた。

※高橋梅代さん所蔵新聞切り抜き「演芸一皿料理」欄によれば、尾道で、十五六の林美美子が楽屋口を訪ねて来て、弟子入りを志願したが、草人に諫められて、帰って行った。日中戦争従軍から帰京した林美美子を囲む晩餐会が銀座で催された際、人に勧められて草人が出席すると、林美美子から二十年前のこの時のことを言い出され、思い出したと言う。

『読売新聞』記事「有楽座のヴェニス」。「ヴェニスの商人」では草人のシャイロックは粗笨な所も多いが、大体において成功。浦路は押出が立派。せりふはやや不満。珊瑚・蘭奢は成功。加藤が一番板に付いている。黙っている間にも細かい芝居をしている。男優は素人同然の者が多いが、三村・小沢・天野はまし。舞台と衣装は立派。「犠牲」では加藤と珊瑚が好かった。全体として、練習が短時日だった割には、大成功。

「中外」に、草人の『煉獄』が掲載される。

草人が鷗外を訪ねる（『鷗外日記』）。

生活費に困った伊沢蘭奢の相談を受け、草人が「中外」の内藤民治に紹介、8月

8	から編集部で働くことになった(伊沢蘭著『素裸な自画像』)。 「中央公論」アンケート「私の好きな夏の料理」に草人は自作の句「水飯の水を みどりの夜の蜘蛛」で回答。 「中外」に谷崎「ちひさな王国」掲載。 ※佐藤春夫の「潤一郎は『小さな王国』——一作を選ぶ(八)」(河出書房新社 『日本文学全集』第21巻月報S37/11)によれば、谷崎はこれを戯曲化して草人 にやらせてみたいと言っていた。 草人は三崎から帰京。『蛇酒』『煉獄』は近く合冊して出版する心組み(8・15 「よみうり抄」)。 「よみうり抄」谷崎潤一郎は目下、悲喜劇「新婚生活の人々」を執筆中。来月6 日より、有楽座で近代劇協会により上演せらるべし。 ※「新婚生活の人々」は「ウキンダミーヤ夫人の扇」を改題しようとしたもの か? 「中央公論」に谷崎「浅草公園」掲載。近代劇協会に言及。 佐藤春夫の佐藤豊太郎宛書簡(佐藤春夫全集)に、「草人が芝居を打つので背景 の世話をさせられ、疲れ切っています」と出る。 近代劇協会第十二回興行。有楽座でワイルド作谷崎訳(実は佐藤春夫・沢田卓爾 との共訳)『ウキンダミーヤ夫人の扇』・谷崎作『信西』・ソログープ作昇曙夢訳 『死の捷利』を上演。配役は草人がダーリントン卿・信西、浦路がアーリン夫人 と母マリギスタ、珊瑚がウキンダミーヤ夫人、伊沢蘭著がバリーック公爵夫人と 腰元アリギスタ、長谷川武夫がウキンダミーヤ卿、越山なるみがプリムデール夫 人、川崎紫苑がアガーザ、天野桃光がバーカーなど(田中栄三『明治大正新劇史 資料』橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』谷崎『上山草人のこと』・「読売新 聞」T7/9/9記事)。 ※谷崎「明治時代の日本橋」によれば、草人が上演脚本が欲しいと言うので、佐 藤春夫と半分ずつ急いで訳したものだ。 ※田中栄三「日本に上演された『ウキンダミーヤ夫人の扇』の思ひ出」(『映画時 代』S2/4)によれば、台本の台詞は洗練されていたが、大した反響もなかっ た。演出は余り優れたものではなかった。『信西』の方が印象に残った。この公 演のために、八官町の床屋の二階で五六人の女優を集めて稽古していた頃、進退 極った草人は、日活向島撮影所で監督をしていた田中栄三を頼って、一座の女優 六七人と一緒に日活入社を希望したが、まだ女形の時代だったので、日活の専務
---	---

9	に断られた(ただし田中栄三『新劇その昔』では、この公演後とする)『日本映 画史大鑑』によれば、日活向島が女優を採用するのはT9/9から』。 ※借金で首が回らなくなった草人夫妻を憐れんで、アメリカへ行かせようと考え たのは「中外」の内藤民治で、洋行その他の費用は内藤が出すことになった(谷 崎『上山草人のこと』)。 「読売新聞」記事「有楽座の近代劇」。「死の捷利」は浦路のマリギスタが光って 見えた。谷崎の『信西』はさすがに好い脚本。しかし、作者の注文とかで、一同 のせりふを甚だ低くしたのは疑問。草人の信西は、苦心の跡が見えて一番好かつ た。「ウキンダミーヤ夫人の扇」では、珊瑚の形が好かった。珊瑚も長谷川も好 い素質を持っている。浦路・草人・蘭著・なるみは達者にやってのけた。しかし 紫苑と天野が嘲笑の的となり、全体を打ち壊した。 (月推定) 駒込神明町四五二米谷(香代子) 方佐藤春夫宛潤一郎葉書38。13日芝 居へ行く。江口(渙)氏を誘って、4時頃までに上山(草人)方へいらつしや い。 谷崎渡支送別会が開かれた(『現代日本文学大年表』)。 ※「中央文学」T7/11号口絵写真によれば、瀧田樗陰・上山草人・浦路・里見 梨・永代静雄・吉井勇・田中純・佐藤春夫・安成貞雄・赤木桁平・江口渙・久米 正雄・芥川龍之介・麻田(駒之助?)氏・和田(利彦?)氏が出席。 ※佐藤春夫全集年譜によれば、佐藤春夫・上山草人の発起で、鴻の巣で開かれ た。 谷崎潤一郎は汽車で東京駅を発ち、単身、朝鮮・満州・天津・北京・漢口・九江 ・江蘇浙江地方を遊歴。12・11蠟殼町の父の家に帰着。 伊沢蘭著は、「ヴェニス」の商人」のネリツサと、ストリンドベリイ『女優二人』 の夫なき女優役で出演(伊沢蘭著『素裸な自画像』「蘭著フロニカ」)。 ※明石潮「研究生時代」によれば、明石が高浜正香らと作った創作劇協会が早稲 田劇場で行った旗揚げ公演か? 新潮社より上山草人『煉獄』刊行(印刷は10月15日)。装幀は山内神斧(本名・ 金三郎)。谷崎と生田長江の「中外」掲載推薦文を序文として再録している。 ※「煉獄」という表題は、第十一章などから、「苦しみ・試練を経ることで、よ り高い境地に至る」意味と推測できる。 ※川端康成は『上山草人』で、『煉獄』は、題材となった恋愛事件が世の噂とな っていて、この小説も有名だった。私は幾度も繰り返し読んで感激した。石浜金
---	--

・24
・25
(26?)

谷崎の父倉五郎死去。享年六十一歳(谷崎『おふくろ、お関、春の雪』)。

夜12時頃、通夜の席に振袖姿の浦路が現れ、金策の相談をする。谷崎が瀧田樗陰に手紙を書いて、金策を依頼する(谷崎『上山草人のこと』)。

※草人「お世話になるばかり(下)」では、浦路と伊沢蘭奢が金策の相談に来た。谷崎の手紙を読んだ瀧田樗陰は中央公論の麻田社長に相談し、麻田社長が手形を発行してくれたが、夜中で現金に換える事が出来なかった。朝になって、小山内薫から見送りの人が集まってから、漸く「中外」の内藤氏が船の切符を持って駆け付けた。二人は、その朝アメリカに旅立った。谷崎も見送りに来た。

※T8/5「日本及日本人」にゴシップ記事「草人の洋行費」あり。

「読売新聞」記事「綺堂梅雪両氏の約束」に、岡本綺堂が草人と一緒に船なので話相手が出来たと喜んでることに関連して、「上山君の話上手なことは知友間に有名すぎるほどのものだ」とある。また「よみうり抄」に、今晚、偕楽園において上山草人夫妻送別会、と出る。

※渡米出発前夜、偕楽園で上山草人・浦路の送別会があった。松居松翁も出席。

この席で、友人達の激励に興奮した二人は「ローマへ、ローマへ」と叫んだ(松居松翁『続劇壇今昔』)。

※T7・12・12「東京朝日新聞」記事にあるように、イタリアを最終目的地としていたのであろう。

上山草人夫妻は、関係者に見送られて、朝9時過ぎの電車で東京駅を出発、横浜港正午発の天洋丸でアメリカへ出航。船室はBの二百十四番。浦路は振袖・丸帯姿で、「坪内先生のお勧めにより、主として純文芸的な作品を上演する小劇場を視察しようと思っております」と記者に答えた。憲政会の安達謙蔵や岡本綺堂・伊坂梅雪と同船(「読売新聞」2・28記事「平和の欧州指して政客、官吏、文士連の出発」)。

※松居松翁『続劇壇今昔』によれば、帝劇の岡本・伊坂と同船。食卓も同じくした。

※草人「谷崎潤一郎との四十年」によれば、谷崎・草人共通の友人である笹沼源之助夫妻・大村正夫博士・長野草風らは、朝、草人の船を横浜に送り、引き返して谷崎家の葬式に回ったと言う。

※和田利政「上山草人の思い出」は、「草人は、将来の演芸界を制するものは舞台劇ではなく映画であると固く信じ、映画に転向して一旗揚げようとアメリカに渡った。」としている。

※渡米1年後の草人の「難い哉在米の活動俳優 妹珊瑚への公開状」(T9/10「中央公論」)は、「フィルムは将来、一切の舞台演劇・新聞・雑誌・出版物を圧倒する。舞台芸術からフィルム芸術へ行くことは進化であって墮落ではない」と力説している。ただし、外遊の目的は、映画出演と演劇見学以外に、生活革命の意図があったと述べている。

※T7・12・12とT8・2・27の浦路の談話を信頼するならば、二人の洋行は、当初はハリウッド入りを最終的な目標としていた訳ではなく、むしろ舞台演劇の研究が主で、映画は視察やアルバイト程度で、最終的にはヨーロッパ、特にイタリアを目指していたようである。しかし、日本移民の多いアメリカ西海岸を渡欧の足掛かりにしようとして、金銭的理由からその儘カリフォルニア近辺に居着かざるを得なくなり、偶然のチャンスをつかんで、ハリウッド映画のスターに成り上がったと見るべきではないか? なお、「新劇三十五年史を語る」で、草人は川上音二郎を再評価すべきだと力説している。この渡米も、欧米に渡って苦勞の末、成功した川上音二郎・貞奴夫妻に倣おうとしたのかもしれない。

※留守宅には、老母と平八と袖子が居残った(谷崎『上山草人のこと』)。

※路子は八歳の頃(T8?)、東京府下荏原郡上大崎大工職・岡田三吉方へ養女として貰われて行った(S6・7・9「大阪朝日新聞」記事)。

※谷崎の十返肇との対談「新春放談」(昭和30年1月1日「京都新聞」)によれば、草人がアメリカへ行っていた間は家族の面倒を見たりした。

※年代不詳、アメリカの草人・浦路に宛てた谷崎の書簡二通現存。小松の借金に関すること(1907・2・25三田照子さんの細江宛私信)。

※草人と同じ船には、松竹の大谷社長が欧米劇界の視察に派遣した松竹の社員・松居松葉(文芸部長)・市川猿之助・田中良・山森三九郎(巡業部長)がたまたま乗り合わせていた。この頃、日本の活動写真界は、極めて幼稚低級な段階に留まっていたが、大谷社長は、活動写真が近い将来、演劇に代わって大衆娯楽の王座を占めることを予期しており、活動ファンの末弟(白井)信太郎(23歳)を松葉に同行させ、海外の活動写真界の状況を視察させた。その報告を聞いて、大谷社長は、翌大正9年2月に、松竹キネマを発足させ、信太郎を社長に、松居松葉・山森三九郎らを補佐に付け、小山内薫を顧問に招き、ハリウッドからカメラマン・ヘンリー小谷らを招いて、欧米の水準を目指したのである(「松竹七十年史」)。

※市川猿之助はこの欧米視察から帰国後、春秋座を起す。また、ロシア・バレ

- 王子」。
- ※アメリカに来ていた京大教授島文次郎博士の講演で演劇研究会の発会式を挙げたばかりの日に着した。演劇研究会は映画俳優や「羅府日報」の記者や芸術愛好者によって組織された半玄人的集団だった。草人夫妻と和田氏は歓迎会に招かれた(和田利政「上山草人の思い出」)。
- ※草人「難い哉在米の活動俳優」によれば、羅府演劇研究会のメンバーは、主にもとアメリカで『不如帰』『金色夜叉』など新派劇を上演して廻っていた俳優たちで、今はロサンゼルスに集まり、日本人活動俳優組合を作って、東洋人の群衆シーンなどのエキストラで日働きをしている人たちで、他は邦字新聞記者・浪花節の興行師などだった。
- 「ロサンゼルス エギザミナー」紙に草人夫妻渡米記事「映画を学びに」、「ロサンゼルス タイムス」に記事「日本名優羅府訪問」が出る(上山草人『素顔のハリウッド』)。
- 草人夫妻は早川雪洲夫妻の邸宅に招待される(7・10「羅府新報」)。
- ※朝、撮影所に早川雪洲を訪問し、午後は新聞社への挨拶廻り、夜は早川邸での晩餐会。青木つる子・阿部ジャック・島博士らに紹介された(和田利政「上山草人の思い出」)。
- ※草人「素顔のハリウッド」に、この時撮った雪洲・青木鶴子と草人・浦路の記念写真が載っている。
- ※雪洲(1886-1973)は、1913年からハリウッド映画に出演し始め、15年のThe Cheatで大スターになった。日本人でありながら、常に主役クラスで、18年末までに28本、19年だけで9本の出演作が封切られた。草人が招かれた頃、雪洲は週給7500ドルという高給を取っており、ハリウッドの一角にあったその邸宅は、グレンギヤリ城と名付けられたスコットランド風4階建て、毎週開かれるパーティーには、数百名の客を招待したというハリウッドの大豪邸だった。雪洲は昭和32年の「戦場に架ける橋」など、ハリウッドでの出演作は生涯に77本、他にフランスなどで14本、日本での出演作は16本を数える(野上英之『聖林の王早川雪洲』Internet Movie DataBase)。
- 夜、有名な海水浴場ベニスの某女史宅を訪問(和田利政「上山草人の思い出」)。
- 大山領事・宮田ドクトルを訪問(和田利政「上山草人の思い出」)。
- 「羅府新報」に草人夫妻の公演会開催が報ぜられる(工藤美代子『聖林のモンゴル王子』)。
- ※演劇研究会主催の新劇公演打ち合わせ会が開かれた。藤田東洋・青山雪雄・関操らの映画人・ダンサー・音楽家・新聞記者・文士などが出席し、「復活」「ベニスの商人」チェーホフの『犬』の上演が決定し、草人の監督指導のもとに、翌夜から「ベニスの商人」の稽古に取りかかった。ところがグラシヤノ役の青山雪雄の稽古がうまく行かず、「ベニスの商人」は取り止めになり、「復活」と「故郷」の二本立てになった(和田利政「上山草人の思い出」)。
- ロサンゼルススピリング街エルクス・ホールで、午後七時半から「復活」上演。日系移民で大人り満員。配役は藤田東洋のネフリードフ、山川浦路のカチューシャ、青山雪雄のファナリン弁護士、丸勢浜子の女囚フォードシャ、和田利政のシモンソンと陪審長(和田利政「上山草人の思い出」・「羅府新報」8・12)。
- この日付けでダイアナ活動写真会社の会社規約がカリフォルニア州内務局長に認可される(『映画時代』T15/10牛原虚彦「草人氏と私」が引く創立趣旨書による)。
- 「マクダ」上演。日系移民で大人り満員。配役は上山草人のシュワルツ中佐、浦路がマクダ、和田利政がフォンケラー参事官、丸勢浜子がマリ、青山雪雄がマクス中尉、塩野忠雄が中佐の妻(和田利政「上山草人の思い出」・「羅府新報」8・12)。
- 「復活」上演。日系移民で大人り満員(和田利政「上山草人の思い出」・「羅府新報」8・12)。
- 「羅府新報」に草人夫妻の公演会の成功が報ぜられる(工藤美代子『聖林のモンゴル王子』)。
- ※草人「難い哉在米の活動俳優」によれば、草人は千ドル近くの取り前を得た。※しかし、稽古の際の軋轢、草人が純益の八割を要求したこと、草人が「故郷」にしか出演しなかったことなどから、興行が終わると直ちに草人に対する絶交状が邦字新聞に掲載された。その為、ストックトン・フレスノ・サクラメント等の地方巡業に出かける話も、立ち消えになった。草人は浦路と和田氏に調停を依頼したが無駄だった。そこへ、スターリングという男から、浦路をスターとする「ダイアナ活動写真会社」設立の話が持ち掛けられ、会社創立発表会まで行ったが、資金難のため、第一回撮影に着手する前に会社は解散してしまった。ちょうどその時、シアトルの自由劇団から招待状が来たので、三人はシアトルに向かった(和田利政「上山草人の思い出」)。

・5	※牛原虚彦「草人氏と私」が引く創立趣旨書によれば、「この年八月二十七日付 けで、ダイアナ活動写真会社はカリフォルニア州会社監督官から十万ドルの株券 発売を認可された。資本金は二十万ドル。第一着手として草人・浦路と僅かなる 給料にて長期に亘る契約を結んだ。二人の出演する我が社の映画は、日本で歓迎 され、また日本の風物を背景として撮影すれば、アメリカでも歓迎され、一挙両 得なるは明瞭なり」とする。	9 ・8
・4	※草人「難い哉在米の活動俳優」によれば、早川雪州から大役を提供され、映画 出演を勧められたが、「ダイアナフィルム会社」との契約が成立した後だったの で、断ったと言う。この会社は、二十万ドルの株券を日米で募集する計画だった が、それがうまく行かず、大正九年十月現在では行き詰まった形になっていた。 ※「Diana Motion Picture Corporation」の一〇ドルの株券が、高橋梅代さんの手許 に遺されて居り、株式資本総額二〇万ドルと記載されている。 夜、草人夫妻は、サンフランシスコからシアトル行きの汽車に乗る筈が、トラブ ルとなる（9・11「新世界」）。	11 ・27
・3	※見送りは宮田ドクトルただ一人（和田利政「上山草人の思い出」）。	10 ・2
・2	日本語新聞「新世界」に上山草人夫妻が鉄道会社を相手に損害賠償の訴えを起こ した事が出る（工藤美代子「聖林のモンゴル王子」）。	10 ・2
・1	「読売新聞」「美術家と女優」に、奥村博史が上山珊瑚をモデルに二十号の油絵肖 像画を揮毫中と出る。	10 ・2
・1	神近市子、二年の刑期を終えて出所（S47「神近市子自伝」。「木佐木日記」では 3日）。	10 ・2
・1	草人夫妻がシアトルの日本人ホールで午後八時から『故郷』を上演。超満員。配 役は草人のシュワルツ中佐、浦路がマグダ、和田利政がフォンケラー参事官、江 南が牧師、西井が中佐の妻、長谷川がマリイ、山本がマックス、舞台監督が岩崎 （和田利政「上山草人の思い出」）。	10 ・2
・1	草人夫妻がシアトルの日本人ホールで午後八時から『人形の家』を上演。超満 員。配役は浦路のノラ、和田のヘルメル、草人のクロググスタッド、山本のラン ク医師、西井のリンデン夫人、舞台監督は草人（和田利政「上山草人の思い出」 出）。	10 ・2
・1	草人夫妻がシアトルの日本人ホールで午後八時から『故郷』を上演。超満員（和 田利政「上山草人の思い出」）。	10 ・2
・1	※松居松翁の「若葉の窓より」（S2／6「演芸画報」）によれば、シアトルで草 人・浦路は松居松翁のホテルを訪ねたが、一足違いで会えなかった（松翁は十一 月に日本に帰国）。	10 ・2
・1	※この後、草人夫妻はタコマ・ポートランド・バンクーバーに招かれ、『復活』 と『故郷』を上演。至る所で超満員の盛況だった。地方巡業の配役は、『故郷』 はシアトルと同じ、『復活』は和田のネフリュードフ、浦路のカチューシャ、長 谷川の女囚フォードシャ、草人のシモンソン、山本の助手医、大高の看守・組合 長。バンクーバーでは田村俊子の家に泊まった（和田利政「上山草人の思い出」 出）。	10 ・2
・1	草人一行は、バンクーバーのアヴェニュー座で『マグダ』を上演し、好評を博し た。草人・浦路は鈴木悦・田村俊子夫妻と旧交を温めた（工藤美代子「晩香坡の 愛」）。	10 ・2
・1	※鈴木悦が主筆を務めるバンクーバーの邦字新聞「大陸日報」に草人評が掲載さ れた（工藤美代子「聖林のモンゴル王子」）。	10 ・2
・1	※「読売新聞」T9・1・10「紫鉛筆」によれば、草人夫妻は、バンクーバーで は同地第一等の劇場へ日本人としては初めて登場して、大分気炎を上げた。 犬養健は、新聞の演芸欄で、草人の留守家族がかかしやに居ることを知って、訪 ねた。繁華な駅の傍とは思えない寂れた横町にあり、看板も飾窓も荒れて、化粧 品屋とは思えない有様だった。二階からは浦路の長男（平八）の音読の声が聞こ えて居た。珊瑚は子供二人の世話が大変で、もう芝居は出来ない、と話した（犬 養健「女優」）。	10 ・2
・1	草人はポートランド興行を終えてシアトルに帰った（和田利政「上山草人の思い出」 出）。	10 ・2
・1	アメリカの草人夫妻からかかしやに久しぶりの便りがあり、クリスマスの贈り物 として子供らに本などを贈ったと言ってきたので子供らは楽しみにしている （「読売新聞」T9・1・10「紫鉛筆」）。	10 ・2
・1	草人は北極に近い所に住んでいる従兄を訪ねるために、カナディアン・ロッキー を越えた（上山草人「難い哉在米の活動俳優」）。	10 ・2
・1	※「家の光」（S15／5都市版）の「洋行珍談奇談打明座談会」によれば、アラ スカのノーム。	10 ・2
・1	※この従兄がアメリカで成功した草人の父方の従兄で、落籍した芸者を草人に託 して女優・一条汐路にした従兄であるならば、田中栄三『女優漫談』（S2聚英 閣）に言う「星」なにがしということになる。ちなみに、高沢初太郎『現代演劇	10 ・2

「総覧」(T7/12文星社)では、一条汐路について、本名・星由子、明治25年4月東京麹町生まれ、牛込某女学校卒としている。

◆大正九年◆(1920)三十七歳

1 10 「中央公論」に谷崎の『鮫人』連載。梧桐寛治のモデルは上山草人。

1 「婦人公論」に神近市子の『獄中通信』掲載。

1 草人夫妻がシアトルで正月公演として、『復活』と『ベニスの商人』を上演。『ベニスの商人』の配役は、草人がシャイロック、浦路がポーシャ、和田がバッサーニオ、迫田がアントニオ、大石がグラシアノ、西井がネリッサ、山本がモロッコ王、増田がチューバル、田中がジェシカ。この公演後、タコマ時報の大塚社長から編集を任せたいという申し出があり、引き受けた。草人と浦路は日本新聞の切り抜き、小説・随筆の執筆。和田は英字新聞記事の翻訳と社説。しかし、半年足らずで首になった(和田利政「上山草人の思い出」)。

※蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌』によれば、大塚俊一は、大正三年、週刊「タコマ週報」を創刊し、翌年「タコマ時報」と改題、同九年から日刊としたが、一年余りで経営難に陥り、十年からは「自由」と改題し、週刊に戻した。

※この頃か? 草人・江戸川乱歩・藤原義江の「われらの三人、探偵映画座談会」(『新青年』S5/3)・安井美然「上山草人との一問一答」(『映画時代』S2/2)によれば、草人はひどい蓄膿症を治すため、シアトルの名医に歯を全部抜いて貰い、総入れ歯にした。それが後で扮装に役立った。映画用に二十種類以上の違った入れ歯を小道具として用意している。

10 「読売新聞」に「紫鉛筆」によれば、草人は、目下シアトルの岩崎という日本人の二階に下宿して、華州大学生の平野という青年と一緒に同地で新聞を起こそうと狙っている。

2 16 「読売新聞」に「紫鉛筆」によれば、普通選挙の示威運動として、紀元節当日に衣川孔雀が自動車で練り歩くと伝えられたのは、事実無根らしい。孔雀は去る1月2日に次男を分娩した。

4 「婦人公論」春季特別号に衣川孔雀『華やかな舞台を子供の笑顔に代へて』。劇団生活の裏面を語ったもの。波多野秋子が鎌倉に訪ねて依頼した。秋子は孔雀の女学校で一学年下。孔雀は文芸を愛好する空想家で、演劇のことは何も知らずに、芸術の世界への憧れから、母や弟の反対を押し切って女優になった。既に子供が二人いる。

2 近藤熊太郎という民衆文化会の創立者で社会主義運動家の肝煎りで、上山草人夫妻はシアトルの日本人ホールで武者小路実篤『二つの心』シェイクスピア『ヴェニスの商人』チェーホフ『犬』を上演。また、朗読として、浦路の『マクベス』、草人の『リア王』『オセロ』、草人・浦路の『金色夜叉』、和田の『ハムレット』、最後に全員で谷崎の『信西』を朗読。この公演後、和田は演劇実地見学のためにニューヨークへ旅立った。草人と浦路はカリフォルニア州ストックトン・フレスノ・サクラメントで『復活』と『故郷』を上演。ひとまずオークランドに落ち着き、『東西時報』を発刊して生計の道を立てた(和田利政「上山草人の思い出」)(王藤美代子『聖林のモンゴル王子』では翌年)。

4 20 東洋汽船の浅野良三(浅野総一郎の次男)・(取締役)中谷義一郎・(同)志茂成保と(代表取締役)小松隆(日米協会会長)・松方乙彦(明治の元老・松方正義の六男)らが、大正活動写真株式会社(のち大正活映株式会社)を創立。前身は東洋フィルム会社とサンライズ映画社。栗原喜三郎は支配人。(田中純一郎『日本映画発達史』、『日本映画史素稿』第8集「岡部龍編」資料 帰山教正とトーマス栗原の業跡)。

4 28 谷崎が上山珊瑚を大正活動の支配人・栗原トーマス喜三郎に引き合わせ、5月1日から活動写真俳優となった(5・4「都新聞」)。

※谷崎の推薦で上山珊瑚入社(『日本映画俳優全集・女優編』)。

5 1 谷崎、大正活映株式会社の脚本顧問として月給二五〇円、週一回出社という条件で招聘される。

※草人宅に、草人と同じ仙台・早稲田出身で大活重役の志茂成保と栗原トーマスが訪ねて来て、大活脚本顧問に誘われた(S27/7「映画の友」「谷崎潤一郎先生をお訪ねして」、『映画のことなど』)。

※大正活映株式会社は、1。東洋汽船が太平洋航路の客船内で外人客向けに見せていたニューヨーク封切りの最新作映画を日本国内でも見せること、2。外国人観光客誘致のために日本を紹介するような映画を作ること、などが動機で、外国映画の輸入と日本映画の製作を目的として設立された(『日本映画史素稿』第8集「岡部龍編」資料 帰山教正とトーマス栗原の業跡)。「谷崎シナリオの映画『蛇性の姪』は、2。の目的に添うものとして作られたのであろう。関東の適当な場所ではなかった。栗原喜三郎の「日本を世界に紹介するには」(『活動雑誌』T10/10)によれば、栗原は、『蛇性の姪』が日本人の心持ちを外国人に了解させ

・4	<p>るのに適していると考えていた」。</p> <p>※トーマス栗原は、アメリカ人の日本人に対する偏見を無くすために、映画を作ろうと考えた人であった（『活動倶楽部』T9／6トーマス栗原「活動写真と僕」）。</p> <p>※この頃は、東京へ出る時には、新橋の草人の留守宅（かかしや）に泊っていた（谷崎『映画のことなど』）。</p> <p>「都新聞」に記事「谷崎潤一郎氏が映画製作に係る」。谷崎は第一回創作として『人面疽』映画化の大体の計画を既に立てたと言う。また女優山川珊瑚を人杜させた。草人・浦路の娘・そで子が危篤のため、珊瑚は目下、小田原の病院に行っている。大正活動の中心人物は、輸出入商・志茂成保、米国に二十年もいた小松隆、ファーストナショナルに最近まで居た栗原トーマス。日本に現在五台しかない映写機の内、二台は大正活動の所有、その他、米国から新式のを輸入している。俳優は初歩から養成する計画で、栗原が主任。撮影所は多摩川畔に偉大なるものを設け、トーマス監督の映画劇と谷崎の日本芸術映画を制作し、輸出する計画。ゴールドウィンと契約し、制作完了二ヶ月後は東京で封切る。有楽座を封切館とし、第一回はノーマンドの「ピント」とエジプトを背景にした「砂漠の情火」。</p>	・5	<p>「読売新聞」に記事「原信子 草人夫妻は失意の境遇」掲載。アメリカのサンフランシスコ・ロサンジェルス・サクラメント・タコマを巡演して帰国した東家楽燕（浪曲師）の話として、草人夫妻はタコマの上演にケチが付いて失敗し、今ではタコマ時事新報【タコマ時報】の記者となり、夫人は校正係として働いているが、小新聞なので、同胞の間では余りよく言っていない、と言う。</p> <p>佐藤春夫の谷崎宛電報（佐藤春夫全集）。シンクウ局からジュウジ三ノ七〇六タニザキジュンイチロウ宛「ハヨマノアカイトリヘ一〇〇ハナシテミテクレ」</p> <p>※同日、葉山にいた鈴木三重吉宛佐藤春夫書簡によれば、谷崎が佐藤春夫に「草人の娘が死ぬ故、金が必要、後援せよ」と言ったのに対して、「赤い鳥」に掲載する原稿料から一〇〇円前借りを申し込むということ。</p> <p>草人の娘・袖子が十歳で死亡。谷崎・北原白秋夫妻・佐藤春夫が、葬儀など一切を処理した（草人『難い哉在米の活動俳優』）。</p> <p>※谷崎『上山草人のこと』によれば、胸の病気で小田原の病院で死んだ。新宮の佐藤春夫宛谷崎書簡（『中央公論』H5／4）。かかし屋に袖子の葬式代として「赤い鳥」から貰った百円を渡した。</p>	・19	<p>下句？</p>	・29	<p>初め</p>	・6	<p>※草人「谷崎潤一郎との四十年」によれば、草人の娘・袖子が胸を病んで医者から転地療養を勧められていたもので、【T8／12】谷崎が小田原へ引越すに際して預かろうと申し出たが、草人がぐずぐずしているうちに死んでしまった。書き残した童謡詩があつて、北原白秋が出版したいと言ったが、そのままになった。</p> <p>※十二年六ヶ月の短い生涯。袖子は小松のもとで平八と共に、佐藤春夫から詩の指導を受け、天才少女と言われていた（三田照子『ハリウッドの怪優』）。</p> <p>※「読売新聞」T11・6・20記事「女優上山珊瑚さんが舞台を引いて結婚」によれば、袖子は享年十二歳。</p> <p>「人間」に里見弴「新樹」掲載。寺木定芳著『人、泉鏡花』に寄せた里見弴の序文「私の知る限りの寺木定芳君」によれば、この戯曲で敵役を歯科医にしたのは、草人が寺木に孔雀を奪われた顛末を、草人自身や谷崎潤一郎、山内金三郎（号・神斧）から詳しく聞いていたため。しかし、後には寺木と親しくつき合うようになった。</p> <p>「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に菊池寛の『真珠夫人』連載。その16章「客間の女王」で、ヒロイン瑠璃子のサロンに集まったエリート青年たち（外務省勤務・洋画家・帝大文科生・慶応理財科生・日本生命勤務・伯爵の長男・政友会代議士）の中に、演劇関係では唯一、元近代劇協会に居たという青年が挙げられている。この事は、近代劇協会のイメージを考える一つの資料となるだろう。</p> <p>「活動雑誌」に4月15日付の青山雪雄「米国スクリーン月報」掲載。その中に「儼然な上山草人、山川浦路 ▲落魄して貧困に悩んで居るとの報」と題して、二人は羅府演劇研究会およびシアトル市自由劇団員から絶交され、興行も出来ず、映画会社からも相手にされない、と書かれた。</p> <p>ワシントン湖畔【シアトル】に託び住居中の草人・浦路のもとに、上山珊瑚の手紙が届き、袖子の死を知る。袖子から送って来ていた沢山の詩・歌・絵・手紙を送り返す（上山草人『難い哉在米の活動俳優』）。</p> <p>谷崎は「アマチュア倶楽部」撮影。上山珊瑚も出演。</p> <p>「中央公論」に上山草人の『難い哉在米の活動俳優 妹珊瑚への公開状』掲載。青山雪雄の中傷に対する反駁、アメリカの映画では、東洋人は憎まれ役・軽んぜられる役にしか付けない事、排日感情の存在などが報告されている。草人・浦路は、新聞に連載小説や時事評論を書いたり、家庭雑誌の編集を手伝ったりして生計を立てている。</p> <p>※「木佐木日記」T10・3・3によれば、上山珊瑚が草人の手紙と原稿を持って</p>	・9	<p>夏</p>	・12	<p>7</p>	・22	<p>10</p>
----	---	----	---	-----	------------	-----	-----------	----	--	----	----------	-----	----------	-----	-----------

瀧田橋陰に会いに来て、掲載された。

※蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌』に、大正七年の事として、シヤトルの「大北日報」の附録雑誌「家庭」を、草人・浦路が創刊したが、執筆者は殆ど浦路のみだった、とあるのはこの頃のことか？

神近市子、鈴木厚と結婚。

谷崎は『其の歡びを感謝せざるを得ない』執筆。二三日のうちに第2回目的物語

『月の囁き』脱稿。三田小枝子【上山珊瑚】主演。

有楽座で『アマチュア倶楽部』封切り（橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』

有楽座プログラム。原作谷崎、監督トーマス栗原、撮影稲見興美、字幕上野久

夫、装置尾崎庄太郎（田中純一郎『日本映画発達史』）出演は葉山三千子（小林

せい子）・夏海生（岡田時彦）・三田小枝子（上山珊瑚）ほか。

有楽座で『葛飾砂子』封切り（橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』。泉鏡花

原作、谷崎脚色、トーマス栗原監督、稲見興美撮影、上山珊瑚・高橋英一（岡田

時彦）主演（田中純一郎『日本映画発達史』。「キネマ旬報」に批評あり）。

◆大正十年◆ (1921) 三十八歳

『木佐本日記』によれば、この日、アメリカ帰りの佐々木指月が中央公論社に來

た際、「草人は、初めは演劇と活動写真の方面で芸術的な活動をするために意気

込んでいたが、アメリカの商売人に利用されて、思うような活動が出来ずに困っ

ている」と話した【アメリカの商売人に利用され】云々は、ダイアナ活動写真

会社との契約を指すのであろう】。

『読売新聞』に映画俳優人気投票結果発表。上山珊瑚が二一四二票で日本人女優

の第一位。

『読売新聞』に映画俳優人気投票結果発表。上山珊瑚が四四六〇票で日本人女優

の第一位。

上山珊瑚主演・大正活映作品『喜撰法師』封切り（橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著

書総目録』）。

夕、草人・浦路は、カリフォルニア州ストックトン市在住日本人の「ストックト

ン市演芸会」から迎えられて、同地朝日座で、トルストイ『復活』イブセン『人

形の家』チェーホフ『熊』シェークスピア『ヴェニスの商人』を上演（6・24

『読売新聞』記事「脚光を浴びて 久し振りで舞台に立つ上山珊瑚嬢」。

『活動画報』に上山珊瑚「近く春を眺めて」掲載。珊瑚はアメリカの映画女優メ

リー・マックラレン (Mary MacLaren 1896-1985) に似ていると人から言われ

る。近日、「邪教」の撮影が始まり、大役を引き受けねばならないので不安、と

する。

※「邪教」は、潤一郎が洋書の『マジック』などという本を買ってきて研究し、

女教祖が大きな鏡から抜け出て宙乗りで空中に舞い上がったリリックの大

仕掛けな台本を作ったが、この年、2月12日、第1次大正教事件が発生したた

め、中止になったと言う（終平『懐かしき人々』）。

『読売新聞』（5）面「活界へらず口」に、「上山珊瑚が大正活映の賛成を得て

『項羽と劉邦』に出演する。本人は給金無しでもいいと稽古に励んでいる」と出る。

『読売新聞』に記事「脚光を浴びて 久し振りで舞台に立つ上山珊瑚嬢」掲載。

有楽座で研究座第四回公演。長与善郎『項羽と劉邦』。虞美人役で上山珊瑚が出

演（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。

※三島章道『項羽と劉邦』の劇評（『演芸画報』8月号）は、珊瑚の虞美人

を、「よく役を理解している、控え目にやった所が却って奥深く見させた、最

後の所は少し熱情が足りないように思った」と評している。

『読売新聞』に谷崎氏は『雨月物語』全5巻を脱稿、紅沢葉子・葉山三千子・上

山珊瑚の三女優を活躍せしめ、自ら映画監督の任に当たっているが、今月一杯で

映画を完成する見込み、と出る。

『読売新聞』記事「上山珊瑚が重態」によれば、珊瑚は開演中に発病したのを無

理に動めたため、遂に腎盂炎となり、自宅で楽山堂病院の金子学士の治療を受け

ているが、なかなかの重態。

大正活映が莫大な費用を投じて撮影した『蛇性の姪』を外国映画『水郷の歌』と

共に有楽座で封切り。大入り満員。大正活映専務志茂成保の挨拶、栗原トーマス

の説明あり（『活動雑誌』T10/11）

※原作上田秋成『雨月物語』、脚色谷崎潤一郎、監督トーマス栗原、撮影稲見興

美、装置尾崎庄太郎、出演高橋英一・紅沢葉子・栗原喜三郎（田中純一郎『日本

映画発達史』。上山珊瑚は出演しなかった。「キネマ旬報」に批評あり。

大正活映は、資本金を二〇万円から一五〇万円に増資（『活動雑誌』T10/12）

※同時に、経営難のため声色新派製作へ方針転換（田中純一郎『日本映画発達

史』）【これが谷崎が大正活映から手を引く原因になった】。

谷崎は、大正活映との関係を断つ（『現代小説全集谷崎潤一郎集著者年譜』）。

草人・浦路の娘・きん子（5）が死去（『読売新聞』T11・6・20記事「女優上

11
年末

・15

9・6

・8

・17

7・1

・24

・23

6

・25

5・11

・9

・4

3・3

◆大正十一年（1922）三十九歳

— 山珊瑚さんが舞台を引いて結婚。 —

1 芝区日蔭町一ノ一上山珊瑚から世田ヶ谷池尻の生田葵宛年賀状あり（細江所蔵）。

1～12 「婦人公論」に佐藤春夫の『都会の憂鬱』連載。草人が大川秋帆の仮名で登場する（佐藤春夫『詩文半世紀』）。

・24 「読売新聞」記事「舞台を退いた上山珊瑚さんが母堂と二人で芝口に」によれば、母も病氣、珊瑚も寝たり起きたり。

2・10 （日付は「よみうり抄」2・12）浦路・珊瑚の母・三田小松が死去。享年五十九歳（「読売新聞」T11・6・20記事「女優上山珊瑚さんが舞台を引いて結婚」）。

3初め 早川雪洲は、映画『The Vermilion Pencil』の大地震のシーンで、中国の太鼓橋の上の石と煉瓦のバグダが、監督の説明とは違って、ともに頭上に落ちて来ることを、舞台美術監督から教えられ、危うく難を逃れた。これは、排日感情と巨額の生命保険金目当てに、映画会社の社長らが雪洲殺害を図った偽装事故の可能性が高かったため、雪洲はハリウッドを去った（早川雪洲『武者修行世界をゆく』）。

5 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』によれば、草人はこの月から、月刊邦字雑誌『東西時報』を創刊。中型、約50ページ。庶務係は浦路。発行趣意は日本主義の鼓吹にあり、最初、誌名を「米化以上」とするつもりだった。創刊号に翁久允の祝辞が掲載された。

※草人『素顔のハリウッド』『安坐』によれば、「米化以上」の趣意は、アメリカのよい所と日本のよい所を混合融和して、新生活を創造する事にあった。

※翌年発行の『日米住所録』によれば、東西時報社は草人の自宅 3129 Pine St. San Francisco にあった。「東西時報」は湮滅して見る事が出来ない（工藤美代子『聖林のモンゴル王子』）。

※浦路は食堂へ皿洗いに行つて生活を支えた（三田照子『ハリウッドの怪優』）。

※草人は東西芸術家協会を作る。在留邦人相手の田舎廻りの劇団で苦闘した後、ハリウッドへ行き、エキストラとなる（『日本映画俳優全集・男優編』）。

※高橋梅代さん所蔵新聞切り抜き記事「沙翁劇翻訳の蔭に知られぬ『友情劇』遣遥博士四年祭に話題の故両文豪」に草人の談話があり、「東西時報」を出している時、サンフランシスコに居た小島烏水さんから種々の蒐集品を借りて展覧会を

開いた所、その品物が無くなってしまった。困り切つて、『マクベス』原稿の一枚を差し上げてお詫びした、とある。また、高橋梅代さん所蔵新聞切り抜き・河竹繁俊『逍遙と鷗外』余話」に、草人が『マクベス』原稿を演劇博物館に寄贈した際、小島烏水が所蔵していた原稿の一枚が、草人を介して寄贈されたことが報告されている。なお、小島烏水は、横浜正金銀行支店長として、大正四年から昭和二年までロサンゼルス、サンフランシスコに居た。松本克平の『日本新劇史』は、日本銀行支店長某氏からの借金の担保として渡したとするが、誤聞であろう。ちなみに、蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』所載「東西時報」の紙面には、横浜正金銀行桑港支店の広告が掲載されている。

※「新劇三十五年史を語る」第二回で草人は、東花枝が一時、サンフランシスコで一緒だったが、猛烈なトーダダンスを稽古して、それがもとで奇病に罹つて死んだ、と証言している。

鈴木悦の田村俊子宛書簡に、サンフランシスコで草人宅に二晩泊まった。草人はひどく年を取り、体も弱そうだ。浦路が一人で働いている、とある（工藤美代子『聖林のモンゴル王子』）。

※牛原虚彦「草人氏と私」によれば、草人はアメリカで、永い間病臥した苦しい時期もあった。

6・20 「読売新聞」記事「女優上山珊瑚さんが舞台を引いて結婚」によれば、来月、親戚の媒介で沼津に粉末石鹼工場を経営する石鹼製造技師・鈴木一実（31）と結婚する。平八（15）は近々渡米。

※この際、谷崎が仲人を勤めたが、二人はすぐ離婚したという（橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』田中栄三談）。

キネマ同好会が『世界映画俳優名鑑』発行。上山珊瑚は既婚、住所は東京芝区日蔭町一ノ一。

25 「読売新聞」に記事「上山草人浦路夫妻を慕つて令息が独り旅で渡米する 二十七日出帆の春洋丸で」。平八（15）は芝中学二年。詩や絵に興味が広い。横浜から渡米。珊瑚の言葉が紹介されている。

※草人『素顔のハリウッド』では、大正十年年末とし、ハイスクールに通学させた。

※牛原虚彦「草人氏と私」によれば、平八は「お父さんは漁師になったの？」と浦路に訊ねた。

※「バグダッドの盗賊」に出演して蒙古の王子に入選するまで（T13・5・18

9	<p>佐藤春夫はこの頃、芝居町一ノ一「か、しや」に寄寓(佐藤春夫全集年譜)。</p> <p>※草人「谷崎潤一郎との四十年」にも出る。</p>	<p>※草人は『劇壇秘話』で、草人夫妻の渡米後、沢田正二郎が、珊瑚を新国劇の座員として可愛がってくれたと感謝している。</p> <p>本願寺ホールで舞台結社の旗揚げ興行(工藤美代子『聖林のモンゴル王子』)。</p> <p>関東大震災。</p> <p>※撮影が始まって2日目に、関東大震災の報が伝わる。最初は「バグダットの盗賊」の仙人役で端役に過ぎなかった。しかし、それでもその報酬で中古の自動車を買ひ、新居を構えることが出来た(上山草人『素顔のハリウッド』)。</p> <p>※「鳩よ!」1932・5のインタビューによれば、せい子はアメリカの草人の所へ行きたいと思っていたが、地震で行けなくなった。</p>
6	<p>大正十二年◆(1923)四十歳</p> <p>草人は「キネマ旬報」の田村幸彦から、ダグラス・フェアバンクスが東洋風の一大お伽話映画を撮影するために、東洋系の俳優を物色中というニュースを開き、ハリウッドにある青山雪雄の東洋衣裳会社を訪ね、名刺の裏に推薦の言葉を書き添えて貰って、映画スタジオを訪ね、オーディションを受ける。しかし、採用通知が来ないので、サンフランシスコに引き揚げる(上山草人『素顔のハリウッド』)。</p> <p>※草人の「ハリウッドで私の歩んだ足跡」①(『東京日日新聞』S4・12・22)によれば、田村幸彦は、映画研究の傍ら、雑誌「東西時報」に関係していて、或る日、編集上の打ち合わせをしている時に、田村から強く勧められ、田村と一緒にダグラス・フェアバンクスのスタジオに行った。</p> <p>※「性格俳優の悲哀」では、「サンビードロ港に鮪釣りに南下した時」「バグダットの盗賊」に引き出された、とする。</p> <p>※サン・ペドロはハリウッドに程近いロサンゼルス港。そこにサンフランシスコから南下したの意。</p> <p>サクラメント河で釣りをしていた所へ、撮影開始の通知が来る(上山草人『素顔のハリウッド』)。</p> <p>※サクラメント川はサンフランシスコ市街から程近い。</p> <p>「羅府新報」に草人の「舞台結社の旗揚げ興行」が報じられる(工藤美代子『聖林のモンゴル王子』)。</p> <p>公園劇場で新国劇「新撰組」三幕目に、上山珊瑚が仲居役で出演。以後、珊瑚は昭和二年一月まで、ほぼ毎月出演しているが、殆どが、仲居・侍女といった端役である(『新国劇七十年栄光の記録』)。</p>	<p>10・20</p> <p>※「読売新聞」記事「南部上山の両君が米国で活俳になりバグダットの盗人を撮影中」。ダグラスフェアバンクスと南部邦彦が主人公、侍従長格が草人の役、として南部を写真入りで大きく取り上げている。</p> <p>※この後か? モンゴル王子役だったサダキチ・ハルトマンが止めさせられ、浦路が交渉して、草人を代役に立てることに成功した(上山草人『素顔のハリウッド』)。</p> <p>※モンゴル王子役が決定した際の、給料の交渉については、ロスの月刊誌「クラシック」に浦路を褒めた記事が出た。間もなく、草人は1124 S. Normandie Ave. L.A.に、大きな邸宅を購入した(工藤美代子『聖林のモンゴル王子』)。</p> <p>※サダキチ・ハルトマンについては、太田三郎『叛逆の芸術家』に詳しい。</p> <p>近藤経一夫妻が渡米する船に、草人から予期せぬ電報が届き、ロサンゼルス到着の朝、ホテルへ自動車を迎えに来てくれ、夕飯にトロロを作ってくれた。以後一年近いハリウッド滞在中、草人夫妻からまるで伯父伯母のような親身な世話を受ける。フェアバンクスやルビッチのスタジオに案内された。近藤経一は「バグダットの盗賊」の二三の場面に出演もした。映画「マリッジ・サークル」のオーブニングも一緒に観た。サンタ・モニカの海岸で遊んだ。草人は鋭敏針の如き神経を有し、熱烈火の如き感情を有する(『映画時代』S4/1近藤経一「我が映画界交遊録(二) 上山草人の巻」)。</p> <p>※工藤美代子『聖林のモンゴル王子』によれば、大正十三年、渡米した近藤経一が、帰国した際に草人の人気が語っている。</p> <p>ロサンゼルスで藤原義江・本居令嬢が人気を博している(『萬朝報』T13/4/29)。</p>
7		
8・1		
3		

―※『劇壇秘話』によれば藤原義江も草人の世話になった。

◆大正十三年◆（1924）四十一歳

3・15 「ニューヨーク・タイムズ」にダグラス・フェアバンクスの談話掲載（工藤美代子『聖林のモンゴル王子』）。

・17 ニューヨークで「バグダッドの盗賊」封切り（工藤美代子『聖林のモンゴル王子』）。

※草人『素顔のハリウッド』所載「フィルモグラフィ」誌評「草人——モンゴールの王子は疑ひもなく此映画に於ける演技上の名譽を一身に引さらって行つてしまつて居る。彼は中国人に表情なしと言ふ定評を見事に蹴飛ばして居る。各変相に對する彼の解釈は実に恍惚たらしむるものがある。その間絶えず手離さぬ寶石をちりばめた扇を巧みに取扱つて、その扇自身に物語りをさせて居る」。

中旬 谷崎は兵庫県武庫郡本山村北畑に転居。

（下旬？）

※応接室のティーテーブルの上に「クラシック」「ムービング・ピクチャー」草人のプロマイドという西洋風な趣味だった（S6／8駿台岳人『関西移住の顛末』改造社版谷崎潤一郎全集月報11）【プロマイドは「バグダッドの盗賊」のもので、草人が送つて寄越した可能性が高い】。

・21 「キネマ旬報」125号に「上山草人氏の活躍」として「バグダッドの盗賊」への出演が報ぜられる。

・23 「ニューヨーク・タイムズ」が草人の演技を絶賛する（工藤美代子『聖林のモンゴル王子』）。日付は「ハリウッドを駈けた怪優」による。

4
・29 ロンドンで「バグダッドの盗賊」封切り（工藤美代子『聖林のモンゴル王子』）。「万朝報」に「排日の米国で上山草人が成功 活動俳優として大人気 妻の浦路は雑誌を経営」という記事が出る。草人の短い手紙と浦路の長い手紙の一部が紹介されている。草人は、「おとき映画の上、かたき役ですから余りバットしませ

ん」と卑下しつつ、「次の機会では自信のあるものをお目にかけることが出来ましょう」と、自負と希望を見せていた。

※「性格俳優の悲哀」では、日本人は、同胞が世界の映画界に迎えられたと期待するが、《そこには、環夫人が唱ふ蝶々さんのやうに美しいものは一つもないのである。残忍、無道、冷酷、暴慢、好色、是等の諸悪道を安々と表現する（中略）敵役が売物だとは、情けないではないか。》と述べている。

5・15 長年の排日運動の帰結として、アメリカで排日移民法案可決。7月1日から実

施。日本の新聞はこぞつて反米熱をあおり、一部には日米開戦論さえ真剣に論じられるようになった。

・18 「サンデー毎日」に草人の「バグダッドの盗賊」に出演して蒙古の王子に入選するまで。のち「素顔のハリウッド」に再録。

7・10 ハリウッドのグロマン・エジプチアン劇場で「バグダッドの盗賊」オープニング・ナイト（上山草人『素顔のハリウッド』）。

※「バグダッドの盗賊」を観た細江の印象では、なかなかの傑作。コスチュームやセットが、夢のような様式的な美しさを追求していて、リアリズムでない所が、かえつて「大人のお伽噺」としての内容にマッチしていて、大変面白く見られた。スーパーマンとしての泥棒、予言（薔薇に最初に触れたものが婿になる。アナ・メイ・ウォンにそれを教えられた草人が薔薇の花を摘もうとするが、蜂に邪魔され、ダグラス・フェアバンクスが、蜂に驚いた暴れ馬から振り落とされて、触れる。それから2階のベランダによじ登つて恋を語る）、婿選び（ダグラスが選ばれるが、盗賊とされて、鞭打たれて追放。7ヶ月後に世界一の宝を持つて来たものと結婚する事になる）、宝探し（インドの王は大仏の瞳の水晶。取つた男は墜落して死ぬ。ペルシャの王は空飛ぶ絨毯。草人は死者を蘇らす黄金のリング。アナ・メイ・ウォンに王女を毒殺させて、リングで蘇らせる）、試練（ダ

グラスが聖者・老賢者らに教えられ、炎の谷・怪獣・暗い夜の海を経て、月の宮殿へ行く）と「お伽噺」のパターンを踏まえていることが、ストーリーの骨格を確かなものにしていて。様々な魔法が楽しい。最初に泥棒が手に入れる魔法のロープ、木にされた人間から地図を貰う、海底の宝取り（謡曲「海士」に似ている。海中シーンがいかにそれらしく撮れていた）と竜宮城の美女の誘惑、天馬、姿が見えなくなるマント、何でも願いが叶う箱、そこから無数の兵士を出して、バグダッドを占領したモンゴル軍を追ひ払うところ。最後に魔法の絨毯に乗つて、王女と二人で空を飛ぶシーンでは、下の群集を見下ろす所や、絨毯の影が塔に映るところ等、細かい所まで神経が行き届いている。「神は自ら助くる者を助く」というような教訓が最初と最後に出て来るのも御愛嬌。サイレント映画は、トーキーより夢に近い感じがする。演技もバントマイム的に大袈裟だし、背景も紙芝居のようで、リアルでない所がいい。

※以後、草人は日本公開作品「腕自慢」『愛の大雪嶺』「スエズの東」1925、「太平洋横断」『外交』「ハレムの貴婦人」『海の野獣』「マンダレイへの道」1926、「悪魔の踊子」『キング・オブ・キングス』「懐かしの桑港」『支那の鸚鵡』1927、

11

10

8・3

「魔の家」1928、「救助・海のロマンス」「邪悪の夜」1929を含めて47本のハリウッド映画に出演した。多くは中国人役だった。名探偵チャーリー・チャンに扮した「支那の鸚鵡」では料理人になったり老爺に変装したりして大活躍を見せ、彼の当たり役の一つとなった。この時には、ドイツからわざわざ招かれたコンラート・ファイトを押し退けての起用であった。中国人以外でも、トルコのサルタン、魔法を使う南洋の医者など、アメリカ人のエキゾティズムを満たすものが多かった。「海の野獣」(モービー・ディック)の悪役も当たり役の一つだった(『日本映画俳優全集・男優編』)。

※ハリウッド時代の出演作品については、上山草人『素顔のハリウッド』巻末に「上山草人出演映画目録」がある他、Internet Movie DataBaseでは、1930年までに出演した49作品が挙げられている。

※映画評論家・淀川長治も「草人は早川雪洲・三船敏郎と並んで、ハリウッドの歴史に、アメリカの人たちに知られている人」と認めている(『サンケイ』2001.12.4「日本人の足跡」上山草人)。

※谷崎「上山草人のこと」によれば、谷崎はこの内「スエズの東」「海の野獣」「マンダレイへの道」を見た。

※「上山草人歓迎座談会」(S5/2「芸芸春秋」)で草人は、「アメリカでは日本は仮想敵国。日本人役は、憎まれ役・軽んぜられる役にしか付けない。だから、日本人の役の場合には決して出演しないようにしている。映画出演は自分の芸術のためとは思っていない。機会があつたら自分の思うような映画を撮りたいが、今までの出演映画は皆全く意に満たないものばかりだ。」と発言している【草人は、もともと芸術演劇を志した新劇人であり、白人の人種的偏見に従って、ハリウッド映画の悪役を演じ続けることに、本当の満足を感じることは少なかったらしい】。

※天城診療所に「まちの子かはらう」とよひかわすわが松林の春の夜の月北米松林にて「草人」の短冊あり。

「読売新聞」に記事「にぎはふ秋の映画界」。「バグダットの盗賊」は、英国では各皇族の台覧に入ったもので、南部邦彦・上山草人も出演しているものだが、今秋のシーズンに封切り公開しようと各社が競って封切館の選択に苦心している。

「市俄古キッド(Soft Shoes)」を製作。草人は怪中国人 Yet Tai 役で出演(『素顔のハリウッド』「上山草人出演映画目録」とInternet Movie DataBase)。

「スエズの東(East of Suez)」を製作。草人は中国人富豪 Lee Tai 役で出演

秋

12

・17

(「上山草人出演映画目録」とInternet Movie DataBase)。

ニューヨークでの演劇研究を終えた和田が、日本への帰国途中、ロサンゼルスの上山草人夫妻を訪ねる。草人はバラマウント映画「スエズの東」の撮影中で、ポラ・ネグリと共演していた。「海鷹」のスター、ミルトン・シルスの晩餐に招待された。十一月中頃、和田はサンフランシスコから大洋丸で出航した。草人夫妻と平八が停車場まで見送った。草人は坪内逍遙・河竹繁俊・谷崎・水谷竹紫・沢田正二郎・中村吉蔵らに紹介状を書いた(和田利政「上山草人の思い出」)。

※「海鷹」は「The Sea Hawk」(1924)。Milton Sills (1882-1930) はサイレント時代のスター。48歳で若死にしたが、1914-30年に83本の映画に出演している。

草人は「飛行郵便(Mile High Trail)」の中国人富豪役と「腕自慢(Proud Flesh)」の好々爺 Wong 役に出演して、この月製作(「上山草人出演映画目録」とInternet Movie DataBase)。

「読売新聞」記事「春を待つ芝居と活動」。上山草人共演の「バグダットの盗賊」は正月早々、浅草帝国館と新宿武蔵野館で封切り。

◆大正十四年◆(1925) 四十二歳

★この年、「東西時報」の発行所がロサンゼルスに移る(工藤美代子『聖林のモングル王子』)。

※鮫原八郎「海外邦字新聞雑誌史」によれば羅府アドモア街。

★製作及び封切り日は不明だが、Metro-Goldwyn-Mayer studio で映画製作に携わるスタッフ・俳優たちが登場する32分のドキュメンタリー映画「1925 Studio Tour」に草人も出ている(Internet Movie DataBase)。

1・6

・19

大阪松竹座で「バグダットの盗賊」封切り。東京の浅草帝国館・新宿武蔵野館でも7日から。上山草人・アンナ・メイ・ウオン出演。空前の大ヒットとなる(『松竹七十年史』)。

※谷崎「西洋と日本の舞踊」によれば、「バグダットの盗賊」封切りの際、松竹座では席がないのにどんどん切符を売って、払い戻しを拒否したため、以来、谷崎はなるべく松竹座へ行かないようにした。

2・27

「読売新聞」記事「突然日本へ帰つて来た山本冬郷氏」。明治37年に渡米し、一四一四年から十一年間に八十二本ほどに出演。中国人の敵役として認められていたが、排他的な争いがあったり面倒でもあるので、帰国して日本の映画界で働きた

3・25	「読売新聞」記事「草人の新映画」。草人は「ブラウド・フレッシュ」で中国人の老人、「スエズのエ」で貴公子李太と地下室のボスの二役を演じて好評を得ている。しかし、草人は「どうせ中国人の役などいい役であらう苦はない。大小にかかわらず、あまり期待して貰いたくない」と言っている、と言う。
4	草人は「愛の大雪嶺（The White Desert）」の喜劇的な中国人コック役と「彼女の唇（My Lady's Lips）」の怪中国人と「漂泊ひ人（The Wanderer）」の宝石商サディック役に出演して、この月製作（「上山草人出演映画目録」とInternet Movie Database）。
15	松竹蒲田撮影所事務部長・六車修と俳優・諸口十九は、横浜出帆のこれあ丸で渡米。アメリカからヨーロッパに渡り、各国の映画界を視察した。松竹の大谷社長は、大正9年2月松竹キネマ創設時から、日本映画の海外への輸出を夢見ており、この時もその為の視察で、輸出用に撮影した諸口主演の映画「椿さく国」をアメリカの業者に見て貰ったが、編集が緩慢で、一般興行は無理と判定された（「松竹七十年史」）。
6	※旗一兵『喜劇人回り舞台』によれば、諸口十九は、川田芳子や筑波雪子とのロマンスが災いして、退職手当代わりの洋行に出された後、蒲田を追われる【キネマ旬報】昭和2年6月初旬号によれば、同年6月1日独立）。
7・8	草人は「幸運の姫君（The Lucky Lady）」のGarlezzの秘書役と「海の野獣（The Sea Beast）」の陰陽師Fedallah役に出演して、この月製作（「上山草人出演映画目録」とInternet Movie Database）。
8	「読売新聞」記事「上山草人の映画」。「ワンダラー（さまよへる猶太人）」で、草人がかなり重要な猶太人の宝石商の役を演じている。
9	「苦楽」に上山草人『新劇壇思出話』（東西時報より）掲載。執筆時【四月か？】、草人はフィラデルフィアに居て、ラスキー社のラオール・ワルシュ監督映画「徨へる猶太人」という【セシル・デミル監督の】「十戒」以上の大作に、宝石商の猶太人役で出演していた。支那人以外の役を開拓したことに意義を感じている。共演は「ほろ馬車」のアーネスト・トレンス、「ロビンフッド」の王様ウォーレス・バレー、「バグダッド」で賊の親分をやったスネツ・エドワードなど。
	「ハレムの貴婦人（The Lady of the Harem）」製作。草人はトルコのサルタン役で出演（「上山草人出演映画目録」とInternet Movie Database）。
11	※この頃？朝香宮がハリウッドを訪れる。上山草人『素顔のハリウッド』にパラマウント撮影所の「ハレムの貴婦人」のセットで撮った朝香宮・大橋領事・草人・ウォルシュ監督・グレッタ・ニッセンの記念写真が載っている【朝香宮は、久邇宮朝彦親王の第八王子鳩彦王。陸軍大将・近衛師団長を歴任。フランス留学中、交通事故に遭い、長期療養後、帰国途中に立ち寄ったらしい】。
26	諸口十九帰国（「読売新聞」27日記事）。
27	「読売新聞」記事「上山草人クンもご多分にもれぬ」。諸口十九は、「ドイツで上山草人夫妻の出迎えを受け、夫妻の案内で諸処を見た。ドイツでは上山草人君が専属俳優としてかなりもっているが、それもやはり御多分にもれないものだ」と語っている。
27	「蝙蝠（The Bat）」製作。草人は家僕Billy役で出演（「上山草人出演映画目録」とInternet Movie Database）。
27	※「素顔のハリウッド」所収「ビクチュア・ブレイ」誌（1927・7）評「彼の特殊装束」によれば、会社は当初、草人の顔に無気味さが足りないと考え、他の俳優を捜したが、草人はその事を聞くと、役に相応しい無気味な人物になって現われた。彼は沢山の義歯を持っていて、役に相応しい義歯を用いるのだ。
27	「読売新聞」記事「映画茶話 米国から」。草人は「黄金の旅路」にベルシャの大帝ハーラン・アル・ラシッドという主役の一人として出演。「バグダッドの盗賊」の蒙古王子以上の大役。本月中旬から撮影中。
12・8	この日、パラマウント社の「黄金の旅路」とユナイテッド社の「蝙蝠」に出演しながら、「性格俳優の悲哀」を摘筆（「性格俳優の悲哀」の「映画評論」掲載時の末尾の記載による）。

A Short Chronological History of the Life of Sojin Kamiyama ; His Friendship with Junichiro Tanizaki

HOSOE Hikaru

Abstract : Sojin Kamiyama, one of the key figures in the creation of the modern Japanese theatre, was a friend of Junichiro Tanizaki throughout his lifetime.

He is also known as one of the few Japanese actors who performed in Hollywood silent films in the 1920s. However, his life has not been sufficiently studied ; his fellowship with Junichiro Tanizaki has not been fully investigated either. This paper presents his personal history based on various data, information and interviews with members of his family.